

寺町旧域（本能寺跡）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

寺町旧域（本能寺跡）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、庁舎整備事業に伴う寺町旧域の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

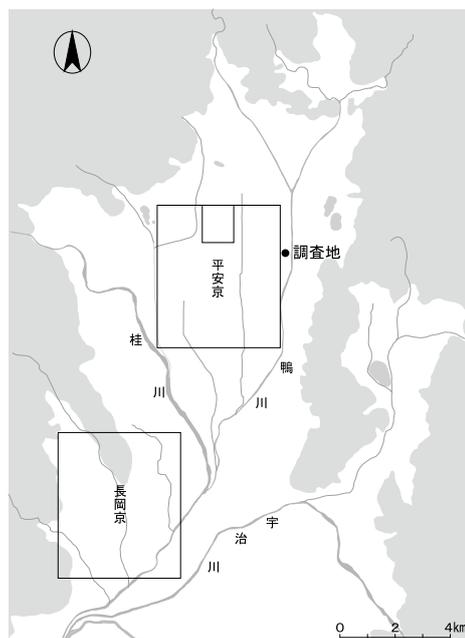
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 寺町旧域（京都市番号 15 S 071）
- 2 調査所在地 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2017年4月20日～2017年8月31日
- 5 調査面積 455㎡
- 6 調査担当者 モンペティ恭代・伊藤 潔
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「御所」「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、建物は別に番号を付した。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、土製品は「土」、石製品は「石」、銭貨は「銭」をそれぞれ頭に付した。番号は本文・写真・表・図版に共通である。
- 13 本書作成 モンペティ恭代
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査にあたって、下記の方々からご教示を得ました。記して感謝いたします（敬称略）。
赤田泰宏、木立雅朗、田島靖大、松中 博、睦月ムンク、和崎光太郎



（調査地点図）

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 位置と環境	4
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 1 区の遺構	10
(3) 2 区の遺構	18
(4) 3 区の遺構	20
4. 遺 物	22
(1) 遺物の概要	22
(2) 土器類	22
(3) 瓦類	27
(4) 土製品	30
(5) 石製品	30
(6) 銭貨	32
(7) その他の遺物	32
5. まとめ	33

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 区第 6 面遺構平面図 (1 : 150)
図版 2	遺構	1 区第 5 面遺構平面図 (1 : 150)
図版 3	遺構	1 区第 4 面遺構平面図 (1 : 150)
図版 4	遺構	1 区第 3 面遺構平面図 (1 : 150)
図版 5	遺構	1 区第 2 面遺構平面図 (1 : 150)
図版 6	遺構	1 区第 1 面遺構平面図 (1 : 150)
図版 7	遺構	1 区北部東西断面図 (1 : 50)
図版 8	遺構	1 区東壁断面図 1 (1 : 50)
図版 9	遺構	1 区東壁断面図 2 (1 : 50)

- 図版10 遺構 1区中央セクション断面図(1:50)
- 図版11 遺構 2区第3~1面遺構平面図(1:100)
- 図版12 遺構 2区北壁・西壁・セクション断面図(1:80)
- 図版13 遺構 3区第2・1面遺構平面図(1:80)
- 図版14 遺構 3区北壁・西壁・セクション断面図(1:80)
- 図版15 遺構 1区石列142・路面139・三和土207・土坑209実測図(1:50)
- 図版16 遺構 1区池77・141、土坑106、埋甕108実測図、溝180断面図(1:40)
- 図版17 遺物 土器実測図1(1:4、15のみ1:8)
- 図版18 遺物 土器実測図2(1:4、46・47のみ1:8)
- 図版19 遺物 土器実測図3(1:4、53・65のみ1:8)
- 図版20 遺物 土器実測図4、土製品実測図(1:4、土1~3のみ1:2)
- 図版21 遺物 瓦拓影及び実測図1(1:4)
- 図版22 遺物 瓦拓影及び実測図2(1:4)
- 図版23 遺物 瓦拓影及び実測図3(1:4)
- 図版24 遺物 瓦拓影及び実測図4(1:6)
- 図版25 遺物 瓦拓影及び実測図5(1:4)
- 図版26 遺物 瓦拓影及び実測図6(1:4)
- 図版27 遺物 瓦拓影及び実測図7(1:4)
- 図版28 遺物 瓦拓影及び実測図8(1:4、瓦62のみ1:6)
- 図版29 遺構 1 1区第6面全景(北東から)
2 1区第5面全景(北東から)
- 図版30 遺構 1 1区第4面全景(北東から)
2 1区第3面全景(北東から)
- 図版31 遺構 1 1区第2面全景(北東から)
2 1区第1面全景(北東から)
- 図版32 遺構 1 1区塀245(南から)
2 1区土坑106(北から)
3 1区池77・141(北から)
4 1区建物1(柱穴26・28)(南東から)
- 図版33 遺構 1 2区第3面全景(南東から)
2 2区第2面全景(南東から)
3 2区第1面全景(南西から)
- 図版34 遺構 1 2区墓坑9・10(北から)
2 3区第2面中央部(南東から)
3 3区第1面全景(南東から)

図版35 遺物 土器類

図版36 遺物 瓦類

挿 図 目 次

図1	調査位置図及び周辺の調査地（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	1区調査前全景（南から）	3
図4	2区調査前全景（東から）	3
図5	3区調査前全景（北西から）	3
図6	作業風景（南から）	3
図7	「寛永十四年洛中絵図」	4
図8	「社寺境内外区別取調（絵図）本能寺境内外区別実測図」	4
図9	基本層序模式柱状図	9
図10	1区柱穴列304実測図（1：50）、集石327実測図、塀245断面図（1：40）	11
図11	1区瓦溜り238実測図（1：30）	14
図12	1区埋甕80実測図（1：20）	16
図13	1区建物1（柱穴26・28）実測図（1：50）	17
図14	2区墓坑12・13・9・10遺物出土状況図（1：40）	18
図15	2区石列6実測図（1：80）	19
図16	3区石列3実測図（1：80）	20
図17	刻印瓦拓影（1：2）	29
図18	石製品実測図（1：8）	30
図19	出土硯実測図（1：4）	31
図20	銭貨拓影（1：1）	31
図21	鉄滓（取鍋椀形滓）	32
図22	獣骨（シカ距骨）	32
図23	「本能寺高樓及び北辻子裏門修理ニ付境内普請絵図」安永4年（1775）	33
図24	「本能寺境内地除却ニ付同寺願書附図」明治28年（1895）	33
図25	明治6年（1873）設立の京都府栽培試験場	34
図26	明治28年（1895）竣功の議事堂	34
図27	明治31年（1898）開庁の京都市役所（初代庁舎）	34
図28	絵葉書（昭和2年頃）	35

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	6
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	22
表4	刻印一覧表	29
表5	土器類観察表	36
表6	瓦類観察表	40
表7	土製品観察表	44
表8	石製品観察表	44
表9	銭貨観察表	44

寺町旧域（本能寺跡）

1. 調査経過

この調査は、京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地で実施される京都市新庁舎整備事業の一環で、本庁舎とゼスト御池地下街を繋ぐ地下通路整備に伴う発掘調査である。調査地は「寺町旧域」にあたり、その中でも、「本能寺」に該当する。寺町は、豊臣秀吉により天正19年（1591）ごろ、御土居の構築とともに整備・完成された。当地周辺の寺町では、本能寺が旧地から移転してきて以来、現代まで存続する。調査地は、江戸時代を通して本能寺境内北部にあたり、明

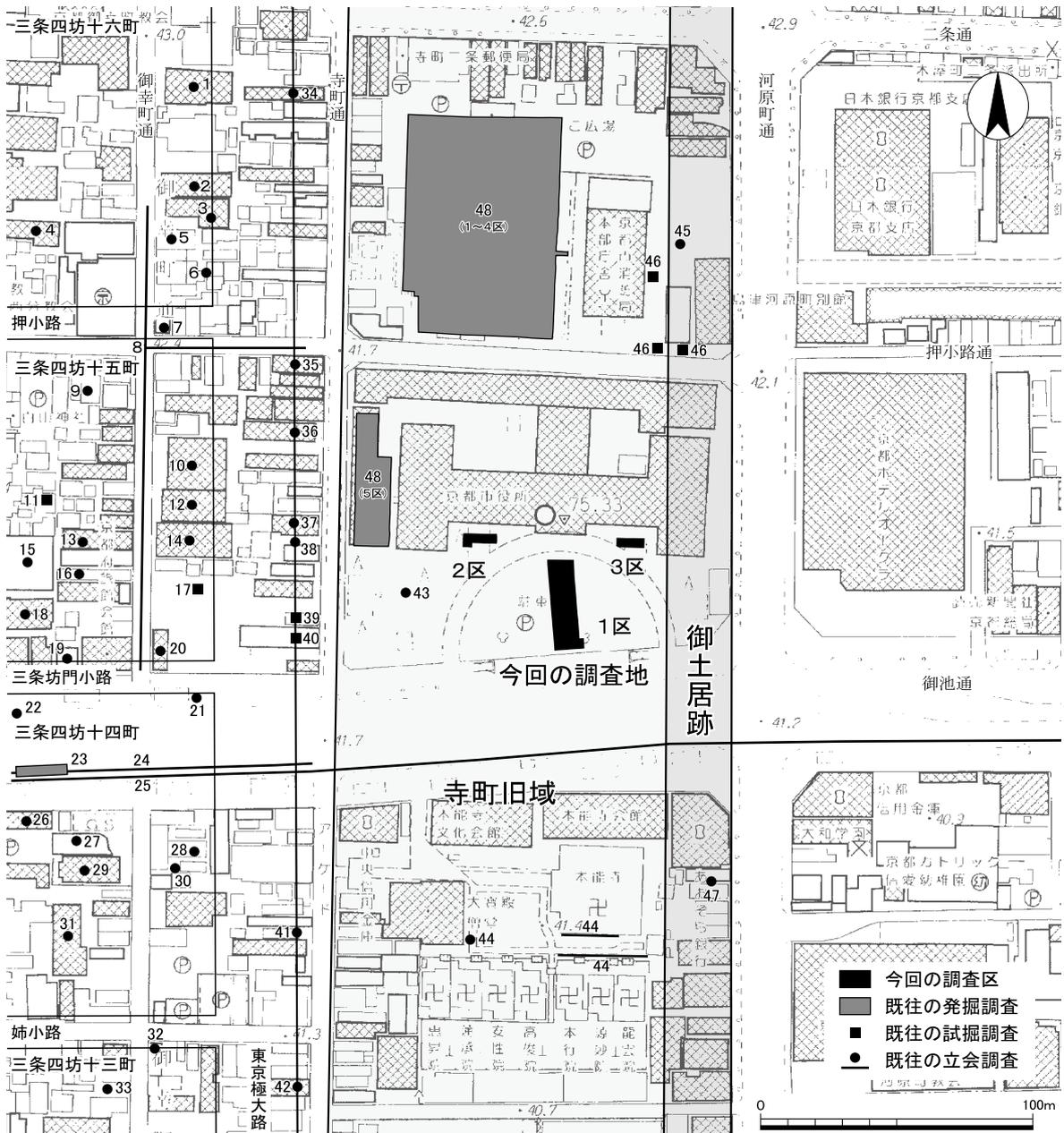


図1 調査位置図及び周辺の調査地（1：2,500）

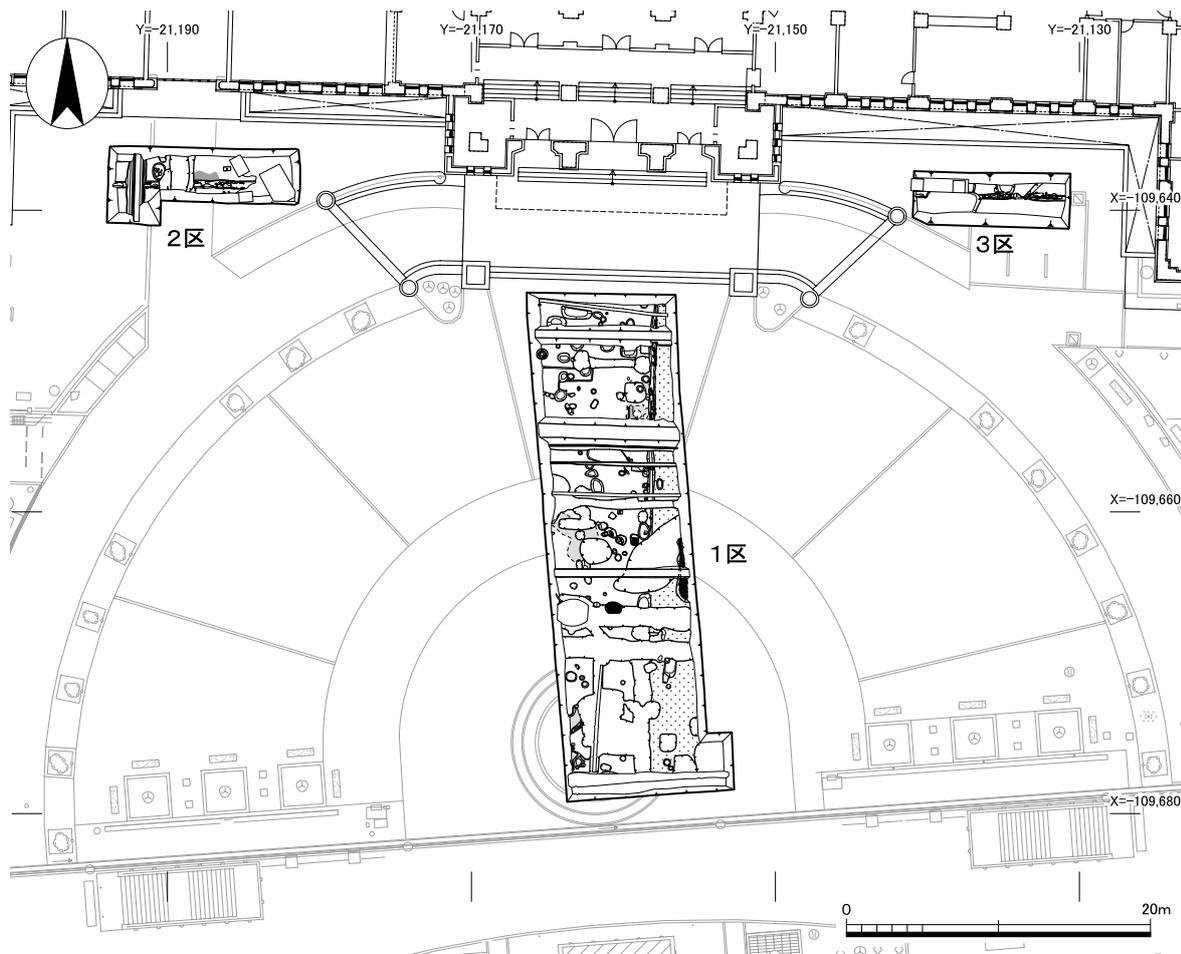


図2 調査区配置図 (1 : 500)

治初期に政府にこの一帯が上地されたことが、史料からわかっている¹⁾。このため、工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）から、発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施することとなった。調査は、寺町の状況を確認すること、及び、周辺の調査と合わせて当地の変遷を考古学的に解明することを目的とした。

発掘調査区は、文化財保護課の指導により、本庁舎前広場内の地下通路予定地範囲及び本庁舎南西側、本庁舎南東側の3区画を設定した。地下通路予定地を1区（約354㎡）、本庁舎南西側を2区（約51㎡）、本庁舎南東側を3区（約50㎡）とし、調査面積は合計455㎡である。調査は2017年4月20日から1区を開始した。1区の調査と並行して、3区の調査を7月18日から開始し、7月31日に終了した。2区の調査は8月8日から開始し、8月23日に終了した。最後に1区を埋め戻して8月31日にすべての作業を終了した。2区・3区調査時には1区の一部を排土置場とした。

1区では中世から明治時代までの遺構を6面にわたって検出した。2区では3面、3区では2面の遺構面を検出した。

各面の遺構掘削は人力によって行った。図面は手測りにより平面図・断面図・立面図などを作成した他、適宜オルソ測量を行った。全景写真撮影は各遺構面ごとに行い、適宜、文化財保護課の指導、検証委員による視察を受けた。



図3 1区調査前全景（南から）



図4 2区調査前全景（東から）



図5 3区調査前全景（北西から）



図6 作業風景（南から）

調査では、江戸時代の本能寺に関する遺構（火災処理土坑・石列・南北路面・池跡・集水桝・柱穴列・土坑）、明治時代初頭の京都府栽培試験場の痕跡や京都市議事堂（初代京都市庁舎）の建物の一部などを検出した。

調査期間中は、調査地仮囲いフェンス外側に調査の概要を記した図入りの看板を掲示し、調査成果の公表に努めた。また、8月2・4日には、京都市考古資料館夏期教室「考古学者に挑戦！」の発掘調査体験会場となった。

註

- 1) 本能寺関連の史料としては下記の文献を参考とした

『寺院明細帳』 明治18年（1885） 京都府立京都学・歴史館蔵

『本能寺史料 本山篇 上』 思文閣出版 1996年

『本能寺史料 本山篇 下』 思文閣出版 1999年

『本能寺史料 古記録篇』 思文閣出版 2002年

本能寺の歴史については他にも、法華宗大本山本能寺赤田泰宏執事長から多大なご助言を賜った。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は現在の御池通の北側、寺町通と河原町通の間に位置する京都市庁舎前広場である。平安時代、当地に西接する平安京左京三条四坊十五町には「山井殿」と呼ばれた邸宅があった¹⁾。当地は鴨川に近く、氾濫の影響を受けやすい位置にあったことから、あまり開発が進まなかったようであるが、平安時代中期以降、東京極大路の東に藤原兼家の法興院などが造営されたことや、二条大路が東進し、鴨東の開発が進んでいったことなどから、東京極大路の東側も土地利用が活発になった。しかしながら中世には鴨川河原はしばしば戦場となり、応仁・文明の乱以降は荒野となったという記事³⁾もある。

安土桃山時代、天下を統一しつつあった豊臣秀吉は京都改造政策を執り、その一環として京都の周囲に土塁と堀からなる「御土居」を巡らせ、これとほぼ同時期に、鴨川沿いに巡らせた御土居の内側に京内にあった寺院を集め、「寺町」を造った。寺町通は改造政策で敷設された路であるが、平安京の条坊では東京極大路にほぼ該当する。現河原町通は御土居の西側を通る。御池通は三条坊門小路に該当し、京内から東進して東京極大路で止まる。御池通が寺町通から東進するのは、近代に入ってからである⁴⁾。

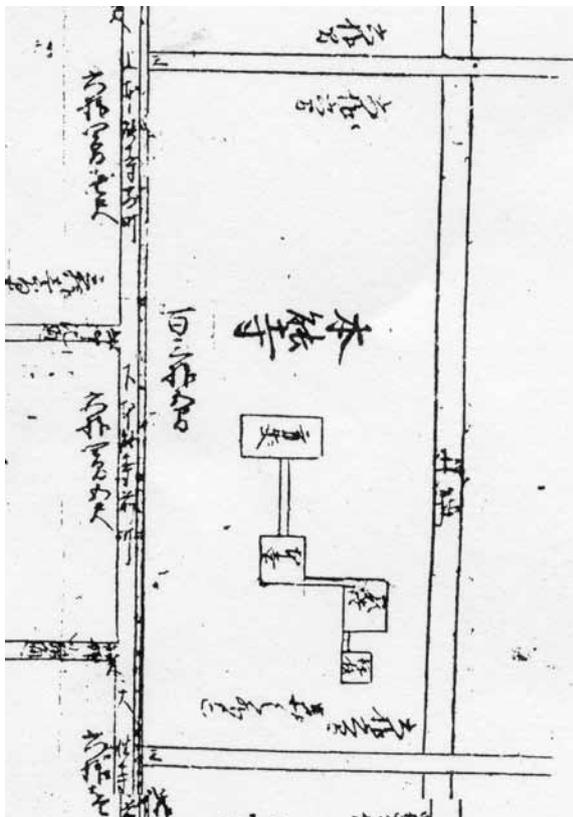


図7 「寛永十四年洛中絵図」(部分、中井家旧蔵 宮内庁書陵部蔵) 『慶長昭和京都地図集成1611(慶長16)～1940(昭和15)』 柏書房より転載した。

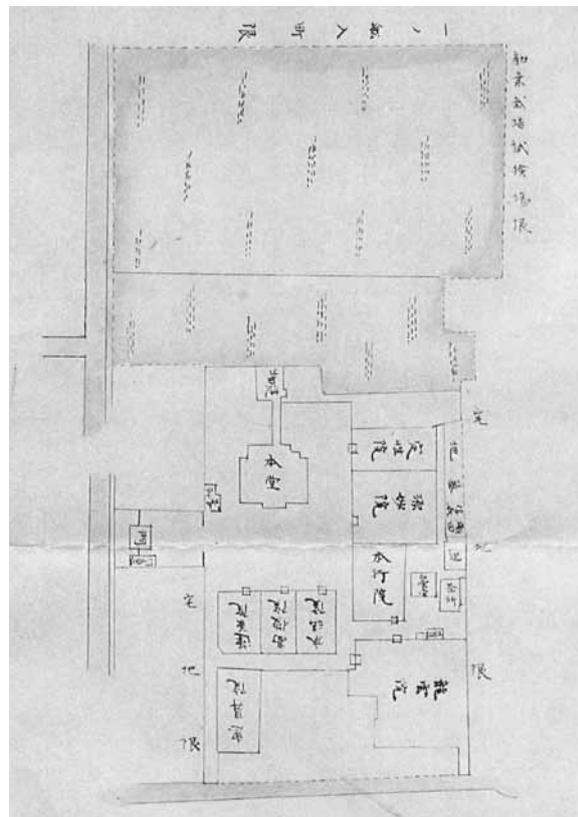


図8 「社寺境内外区別取調(絵図)本能寺境内外区別実測図」明治8～15年(部分、京都府立京都学・歴史館蔵)

調査地は「寺町」に位置し、⁵⁾ 絵図(図7)などによると当地には「本能寺」(日蓮宗)が描かれる。本能寺は応永22年(1415)日隆により、油小路高辻と五条坊門の間に創建された。その後幾度か寺地を転じ、天文5年(1536)の天文法華の乱後、六角西洞院において再興、伽藍も整備されたが、これも天正10年(1582)本能寺の変で炎上した。その復興の途上、秀吉の京都改造政策で現寺地に移った。寺町移転前の本能寺は『上杉本「洛中洛外図」』に描かれる。⁶⁾ 文献には、文禄元年(1592)「本堂再建」「其外番神堂・大坊・庫裏已下引移再建」とあり、この頃には新寺地(現在地)に移転していることがわかる。その後、文禄4年(1695)方丈客殿、慶長13年(1608)惣門・唐門建立、元和7年(1621)には三重塔も引移され、寛永10年(1633)鐘楼、元禄4年(1691)開山堂が建立され、堂宇が整う。ところが天明8年(1788)天明の大火により諸堂宇全焼、その後、徐々に再建されるも、元治元年(1864)禁門の変による元治の大火でまたも焼失する。

明治時代になって、境内地北部が政府に上地され、明治6年(1873)京都府栽培試験場が設立される⁷⁾(図8・25)。試験場は明治27年(1894)に京都市に払い下げられ、翌年ここに京都市議事堂が設立された。この時に御池通が寺町通以東へ通された⁸⁾。明治31年(1898)京都市議事堂内に京都市役所が設置された。これが初代庁舎と呼ばれている。その後、大正天皇の大礼で饗宴場として使用された建物が京都市に下賜され、その用材をもって、大正6年(1917)に初代庁舎の西側に新庁舎が建設された(2代目庁舎)。昭和2年(1927)には、初代庁舎の位置に新東館(3代目庁舎東側)が竣工した。昭和6年(1931)には、その西側に新西館(3代目庁舎西側)が増築され、現在見る京都市庁舎ができた⁹⁾。御池通は昭和20年(1945)空襲による類焼防止のため南側一帯の民家が強制撤去となり、¹⁰⁾ 拡張された。市役所前広場は一時期駐車場となったが、御池地下駐車場の完成に伴い、市役所前広場として市民の憩いの場となっている。

(2) 周辺の調査(図1、表1)

調査地周辺では、過去に数件の発掘調査と数十件の試掘・立会調査が実施されている。

寺町通以西の平安京内の調査では、平安時代から江戸時代までの各時期の包含層や土坑などを検出している。調査7では推定押小路の路面、調査10・34では東京極大路の路面と側溝、調査21では推定三条坊門小路の路面を検出している。東京極大路東端域の調査になると、調査35では平安時代後期の包含層の下層に氾濫堆積とみられる流れ堆積を検出した。調査38では江戸時代末期の焼土を多量に含む明赤褐色泥砂層を検出しており、これは元治の大火の痕跡とみられる。調査39・40の調査では鎌倉から室町時代の土坑を検出している。

寺町旧域及び御土居の調査では、調査43は今回の調査の至近で行われた立会調査で、近世や鎌倉時代の包含層を検出、現地地表下2.7~3.0mで河川堆積を検出している。調査44は現本能寺境内で行われた立会調査で、江戸時代の包含層を検出している。調査45・47では氾濫状堆積を検出している。調査46は御土居跡の試掘調査であるが、御土居の盛土や堀の痕跡はみられず、近世の墓を検出、「元禄八年」銘の墓石や火消し壺を転用した骨壺、6枚重ねた銭貨などが出土している。西に隣接する寺町旧域(妙満寺)が近世の早い段階で御土居部分に墓地が広がっていたことが明らかに

表1 周辺の調査一覧表

No.	遺跡名	調査方法	調査概要	文献	調査記号
1	左京三条四坊十六町	立会	GL-1.45mで平安末期の土坑。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度』京都市文化観光局 1990	89HL063
2	左京三条四坊十六町	立会	GL-1.28mで江戸の包含層(埧塙)。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成11年度』京都市文化市民局 2000	99HL213
3	左京三条四坊十六町・東京極大路	立会	GL-1.32mで時期不明の包含層。-1.52mで時期不明の包含層。-1.6mで室町の包含層。-1.27mで平安の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成12年度』京都市文化市民局 2001	00HL091
4	左京三条四坊十六町	立会	GL-1.55mで平安～鎌倉の土坑(土師器、緑釉陶器椀、瓦器鍋)。-1.95m以下、暗灰黄色細砂の地山。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成11年度』京都市文化市民局 2000	99HL027
5	左京三条四坊十六町	立会	GL-0.2m以下、包含層3(室町1、江戸2)。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度』京都市文化観光局 1985	84HL108
6	左京三条四坊十六町・東京極大路	立会	No.1: GL-1.55m・-1.63mで江戸前期の包含層2。 No.2: -1.1mで江戸末期の包含層。 No.3: -1.0mで室町末期の湿地状堆積。-1.3mで室町後期の包含層。-1.5mで時期不明の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成18年度』京都市文化市民局 2007	06HL359
7	押小路	立会	GL-1.27m以下、推定押小路路面3、室町以降。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988	87HL034
8	左京三条四坊十六町・東京極大路	立会	No.1: GL-0.7m以下、室町・鎌倉・時期不明の包含層各1。-1.15mにて路面。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和63年度』京都市文化観光局 1989	88HL115
9	左京三条四坊十五町	立会	No.1: GL-1.96mで室町の包含層。-2.31mで室町の包含層。-2.6mで室町の包含層。 No.2: -2.06mで室町の包含層。-2.21mで時期不明の包含層。-2.86mで地山。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成27年度』京都市文化市民局 2016	15HL141
10	左京三条四坊十五町・東京極大路	立会	東京極大路の路面と側溝を確認。 No.1: GL-1.08m以下、近世の包含層、時期不明の路面2。-1.9m以下、流れ堆積。 No.2: -1.6m以下、路面2。 No.3: -2.32mで平安後期の南北溝(西側溝)。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成9年度』京都市文化市民局 1998	96HL411
11	左京三条四坊十五町	試掘	GL-1.2m以下で中・近世～平安までの遺構・遺物を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告平成28年度』京都市文化市民局 2017	15H567
12	左京三条四坊十五町・東京極大路	立会	GL-1.87mで平安末～鎌倉の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成6年度』京都市文化観光局 1995	94HL168
13	左京三条四坊十五町	立会	GL-0.3m以下、江戸末期の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和61年度』京都市文化観光局 1987	86HL201
14	左京三条四坊十五町・東京極大路	立会	GL-1.0mで近世以降の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成19年度』京都市文化市民局 2008	06HL550
15	左京三条四坊十五町	立会	GL-0.2m以下、近世の包含層。-1.65mで時期不明の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成15年度』京都市文化市民局 2004	03HL099
16	左京三条四坊十五町	立会	GL-2.1mで平安後期の包含層を切って土坑4(平安後期2、江戸1、時期不明1)。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和61年度』京都市文化観光局 1987	86HL100
17	左京三条四坊十五町・東京極大路	試掘	GL-2.1mで平安末頃の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報平成13年度』京都市文化市民局 2002	00H563
18	左京三条四坊十五町	立会	GL-0.7mで近世の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成15年度』京都市文化市民局 2004	03HL089
19	左京三条四坊十五町・三条坊門小路	立会	GL-1.82m以下、平安整地層。この層を切って平安～室町の土坑4、時期不明の東西方向柱穴列。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成27年度』京都市文化市民局 2016	15HL128
20	左京三条四坊十五町・三条坊門小路	立会	GL-0.9mで江戸の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和58年度』京都市文化観光局 1984	83HL004
21	左京三条四坊十四町・三条坊門小路	立会	GL-1.22m以下、推定三条坊門小路路面5。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988	87HL230
22	左京三条四坊十四町	立会	No.15調査区: 室町前半の遺構・遺物をまとめた形で多く検出。	「第2章II-1 平安京左京三条四坊」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997	95HK-AK002
23	左京三条四坊十四町	発掘	No.18調査区: 時期不明の土坑・井戸・落込み。	「第1章II-10 平安京左京三条四坊」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994	89HK-FR002
24	左京三条四坊十四町・東京極大路	立会	GL-1.55m以下、時期不明の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988	87HL218
25	左京三条四坊十四町・寺町旧城(本能寺跡)	立会	GL-0.45mで江戸末期の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和58年度』京都市文化観光局 1984	83HL208

No.	遺跡名	調査方法	調査概要	文献	調査記号
26	左京三条四坊十四町	立会	No.1 : GL-1.7mで室町の包含層。 No.2 : -2.6mで地山を切って時期不明の堀状遺構。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成26年度』京都市文化市民局 2015	13HL528
27	左京三条四坊十四町	立会	GL-0.85m以下、路面。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度』京都市文化観光局 1991	90HL082
28	左京三条四坊十四町	立会	No.1 : GL-0.82mで鎌倉末期の包含層。-1.97mで鎌倉前期の包含層。 No.2 : -1.57mで桃山の包含層。-1.7mで時期不明の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成17年度』京都市文化市民局 2006	04HL385
29	左京三条四坊十四町	立会	No.1 : GL-1.34mで桃山末～江戸初期の包含層。 -1.45mで室町末期の包含層。 No.2 : -1.77mで平安中期の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成13年度』京都市文化市民局 2002	01HL158
30	左京三条四坊十四町	立会	GL-1.8mで桃山の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988	87HL047
31	左京三条四坊十四町	立会	GL-1.65～2.55mまで近世の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成12年度』京都市文化市民局 2001	00HL085
32	左京三条四坊十三町	立会	GL-0.2mで江戸の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度』京都市文化観光局 1985	83HL227
33	左京三条四坊十三町	立会	No.1 : GL-1.3mで白色粗砂。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成22年度』京都市文化市民局 2011	10HL305
34	左京三条四坊十六町・東京極大路	立会	GL-1.3m以下、平安後期の推定東京極大路路面、東側溝、江戸の落込み。	「Ⅲ 平安京左京三条四坊(91HL38)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992	91HL38
35	東京極大路	立会	No.1 : GL-0.43m以下、平安後期・江戸の包含層。 -1.98m以下、流れ堆積。 No.2 : -0.95m以下、平安・室町の包含層。 -1.7m以下、暗灰黄色砂礫の無遺物層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成8年度』京都市文化市民局 1997	96HL031
36	東京極大路	立会	GL-1.7mで室町の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和61年度』京都市文化観光局 1987	86HL116
37	東京極大路	立会	GL-1.08mで平安後期の土坑。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成9年度』京都市文化市民局 1998	97HL328
38	東京極大路	立会	GL-0.5mで明赤褐色泥砂(炭・焼土多量含)の江戸末期包含層。-0.8～0.92mで黄灰色砂礫。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成28年度』京都市文化市民局 2017	16HL017
39	東京極大路	試掘	GL-1.35mで鎌倉末～室町前期の土坑3。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告平成19年度』京都市文化市民局 2008	07H234
40	東京極大路	試掘	GL-1.1mで時期不明の包含層。-2.2mで室町の土坑1。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和58年度』京都市文化観光局 1984	83HL087
41	東京極大路	立会	GL-0.92mで幅2.1m以上、深さ0.3m以上の室町の南北方向の溝状遺構。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成9年度』京都市文化市民局 1998	97HL352
42	左京三条四坊十三町	立会	No.1 : GL-1.2mで桃山の包含層。 No.2 : -0.96mで桃山の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報平成14年度』京都市文化市民局 2003	02HL059
43	寺町旧城	立会	No.2 : GL-1.32mで近世の包含層。-1.54mで鎌倉の包含層。-1.65mで黒褐色粗砂層。 No.3 : -2.7mまで盛土。-3.0mまで河川堆積と考えられる褐色粗砂(礫混)。-3.28mまで褐色礫(砂混)の地山。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成27年度』京都市文化市民局 2016	15RT101
44	寺町旧城・御土居跡	立会	No.2 : GL-0.6mで江戸末期の包含層。 No.7 : -1.1mで江戸前期の包含層。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成23年度』京都市文化市民局 2012	10RT384
45	御土居跡	立会	No.1 : GL-0.9mで灰黄褐色砂礫の氾濫状堆積。 No.2 : -2.45m以下、にぶい黄褐色細砂の地山。	「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成23年度』京都市文化市民局 2012	11RT062
46	御土居跡	試掘	GL-1.1mで近世の土坑。土師器皿、土師質壺、陶器椀、墓石、銭貨などが出土。	「Ⅲ-6 御土居跡 No.73」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011	10S286
47	御土居跡	立会	No.1 : GL-0.4m以下、褐色砂礫の氾濫状堆積。 No.2 : -1.0mで時期不明の包含層。-1.2m以下、暗褐色砂礫の氾濫状堆積。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成19年度』京都市文化市民局 2008	07RT286
48	寺町旧城	発掘	1～4区では6面の遺構面を調査、妙満寺跡の遺構の変遷を明らかにした。寺町以前の遺構としては平安から室町の井戸・土坑・溝などを検出した。5区では江戸の井戸・土坑・柱穴、室町の石室・土坑、平安の井戸などを検出した。	『寺町旧城(妙満寺跡・本能寺跡)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-18 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018刊行予定	16KS-C0001

なった。

調査48は、京都市新庁舎整備事業の一環で2015～2016年に行われた発掘調査である。1～4区は妙満寺跡にあたり、建物群を良好な状態で検出、その変遷を明らかにした。5区は本能寺跡にあたり、江戸時代の井戸・土坑・柱穴、室町時代の石室・土坑、平安時代の井戸などを検出した。

註

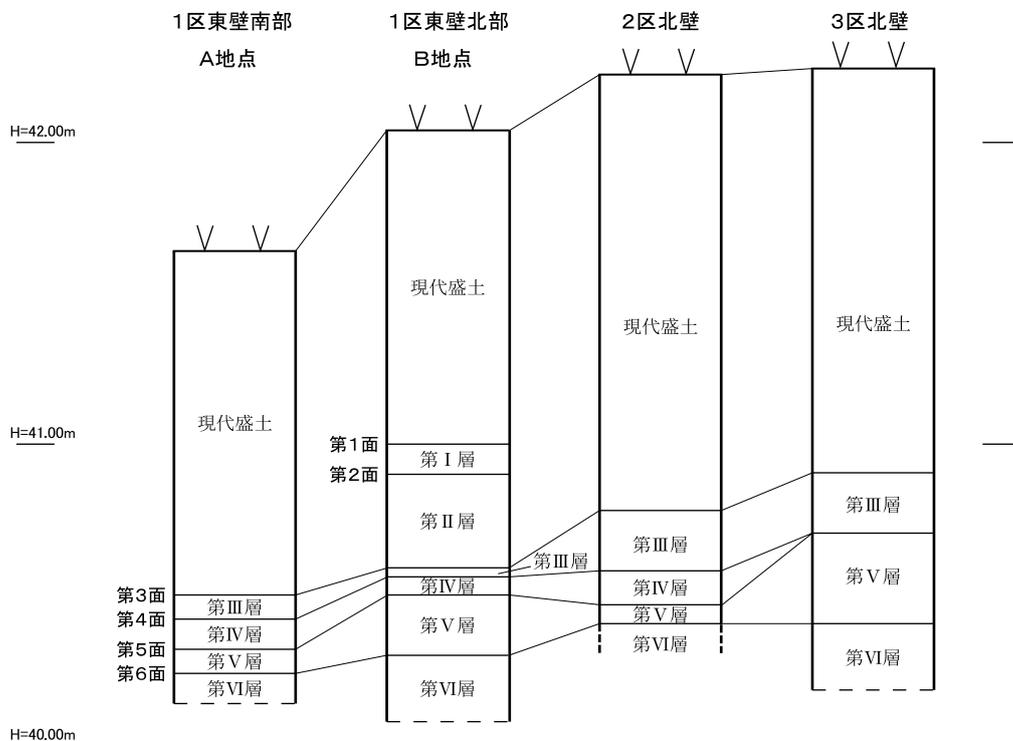
- 1) 「22巻 禁秘抄考註・拾芥抄」『改訂増補 故実叢書』 明治図書出版 1993年
- 2) 「小右記 正暦元年八月十二日条」など『大日本史料第二編之一』 財団法人東京大学出版会 1989年
「拾芥抄」に「法興院 二條北、京極東一町、大入道殿第、後爲堂、」
- 3) 「宣胤卿記 文明十二年二月二日条」『増補史料大成 第四十四巻』 臨川書店 1985年
「東至河原無家、北至近衛無屋、一向荒野之間、」
- 4) 『京都市の地名』 平凡社 1979年
- 5) 「寛永十四年洛中絵図」『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』 柏書房 1994年
「洛中絵図寛永後万治前」 臨川書店 1979年
- 6) 『寺院明細帳』 明治18年（1885） 京都府立京都学・歴史館蔵
『本能寺史料 本山篇 上』 思文閣出版 1996年
『本能寺史料 本山篇 下』 思文閣出版 1999年
『本能寺史料 古記録篇』 思文閣出版 2002年
- 7) 『京都府百年の資料 三 農林・水産編』 京都府 1972年
- 8) 「京都坊目誌首巻之五」『新修京都叢書 第17巻』 臨川書店 1967年
「寺町以東は明治二年寺域を上地し、四年河原町に勸業場を設くるに際し、新道を開く。二十七年之を附替へ議事堂を建設す。此時通す。」
- 9) 『京都市政史 第1巻 市政の形成』 京都市 2009年
- 10) 前掲4)

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図版7～10、図9)

1区の地表面の標高は南部で41.43m、北部で42.16mである。地表面から1.2～1.3mが近代から現代の盛土 (図9の現代盛土層) で、それより下層は上から順に元治の大火後の層 (第I層)、天明の大火から元治の大火までの層 (第II層)、元禄年間整備後から天明の大火までの層 (第III層)、元禄年間整備期の整地層 (第IV層)、寺町形成期から元禄年間整備前までの層 (第V層) が堆積する。この下層は、粗砂を多く含む灰黄褐色から暗褐色の砂礫層と粗砂層の互層 (第VI層) となり、これは河川氾濫による堆積層と考えられる。この層には、平安時代から室町時代の土器片・瓦片が含まれる。これより下層については、1区北端で現地表面から約2.7mの深さ (標高39.4m) まで掘り下げたが、第VI層が連続し遺構面は確認されなかった。調査は、各層の上面で遺構面を区切り、第I層上面を第1面 (幕末以降)、第II層上面を第2面 (江戸時代後期)、第III層上面を第3面 (江戸時代中期)、第IV層上面を第4面 (江戸時代前期)、第V層上面を第5面 (安土桃山時代から江戸時代前期)、第VI層上面を第6面 (室町時代以前) として調査を行った。

2・3区での層序は1区と同様であったが、調査区が狭隘かつ建物基礎などの攪乱が多く、遺構面として6面まで詳細に分けることができなかった。このため2区では第1面を江戸時代中期 (1



第I層：暗褐色系砂泥層 (元治の大火後の整地層) 第IV層：褐色系砂泥層 (元禄整備期の整地層)
 第II層：にぶい黄褐色系砂泥層 (天明の大火後の整地層) 第V層：灰黄褐色系砂泥層 (寺町形成期から元禄整備まで)
 第III層：黒褐色系砂泥層 (元禄整備後から天明の大火まで) 第VI層：灰黄褐色系河川氾濫堆積層 (寺町形成以前)

図9 基本層序模式柱状図

区の第3面に相当)、第2面を江戸時代前期(1区の第4面に相当)、第3面を安土桃山時代から江戸時代前期(1区の第5面に相当)として、また3区では第1面を江戸時代中期(1区の第3面に相当)、第2面を安土桃山時代から江戸時代前期(1区の第5面に相当)として捉え調査を行った。2区北壁での地表面の標高は42.22m、第1面の標高は40.78m、第3面の標高は40.46mであった。3区北壁での地表面の標高は42.24m、第1面の標高は40.90m、第2面の標高は40.70mであった。

以下に、各時期の主要な遺構について述べる。なお、土器類の編年については、平安京・京都I期¹⁾～XIV期の編年案に拠る。

(2) 1区の遺構

1区第6面(図版1)

寺町形成以前の遺構面である。河川氾濫堆積層(第VI層)の上面となる。第VI層は、灰黄褐色～褐灰色の砂礫層やにぶい黄褐色から暗褐色の細砂層が厚く堆積する。第VI層上面の標高は北で40.30m、南で40.25mである。調査区の東側を南流する鴨川の氾濫に伴う堆積層と考えられる。遺構としては落込みを検出した。

落込み395 北端で検出した。東西5.8m以上ある落込みである(図版7-19層)。断面観察での深さは0.6mある。磨滅した土師器や瓦の極小片を含む。

落込み396 北端で検出した。東西1.9m以上の落込みである。落込み395の下層で検出した(図版7-22層)。古墳時代の土師器や飛鳥時代の須恵器、平安時代の土師器・須恵器、室町時代の瓦器が出土した。すべて磨滅しており、河川の氾濫により運ばれたものとみられる。

1区第5面(図版2)

安土桃山時代、秀吉の命により、この地に本能寺が移転してきた当初の遺構面である。土坑・

表2 遺構概要表

時代	時期	遺構			備考
		1区	2区	3区	
室町時代	寺町以前	落込み395・396、河川氾濫堆積層			1区第6面
安土桃山時代	寺町造成・本能寺転入	土坑283・305・369、塀245(柱穴342など)、路面397、柱穴列304(柱穴284～286)、集石327	土坑14・15、墓坑12・13	土坑5	1区第5面
江戸時代前期	整地面	土坑282、石列235、路面303	土坑7・11、墓坑9・10		1区第4面
江戸時代中期	天明の大火	土坑73・106・109・110・118・127、石列142、路面139、三和土207、埋甕108・209、池77・141、瓦溜り86・238、溝180	石列6	石列3	1区第3面
江戸時代後期	元治の大火	土坑52・53・175、路面76、埋甕80			1区第2面
幕末～近代	上地・栽培試験場設立	土坑42、小溝群(溝44～46)、井戸36、漆喰槽49、会所50、建物1(柱穴26・28)	煉瓦基礎18		1区第1面

塀・路面・柱穴列・集石などを検出した。

土坑283 南東部で検出した。塀245を切って成立する平面円形の土坑である。径0.45m、断面は逆台形。底面の標高は40.10m。京都XI期の土師器皿が出土した。

土坑305 北西部で検出した。土留め擁壁際で一部を検出したのみであるが、東西4.2mある。検出面からの深さは約0.3mあり、底面の標高は39.84mである。埋土には礫を多く含む。土師器・焼塩壺・瓦質大甕・埴埴・瓦類などが出土した。

土坑369 中央部東端で検出した。平面形が隅丸長方形の土坑である。北東部は攪乱を受ける。

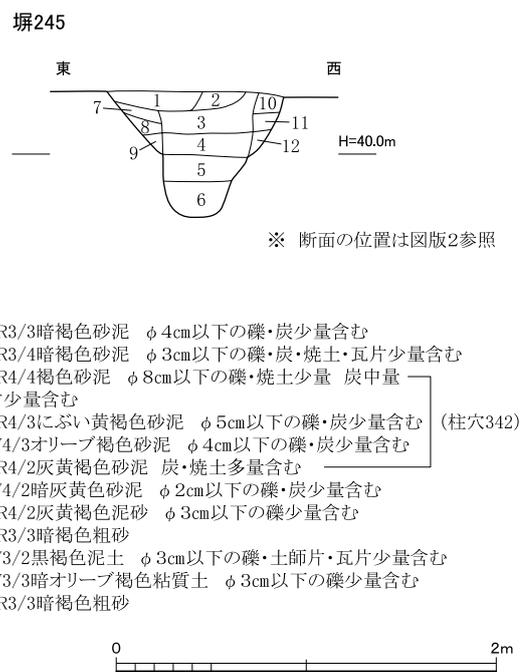
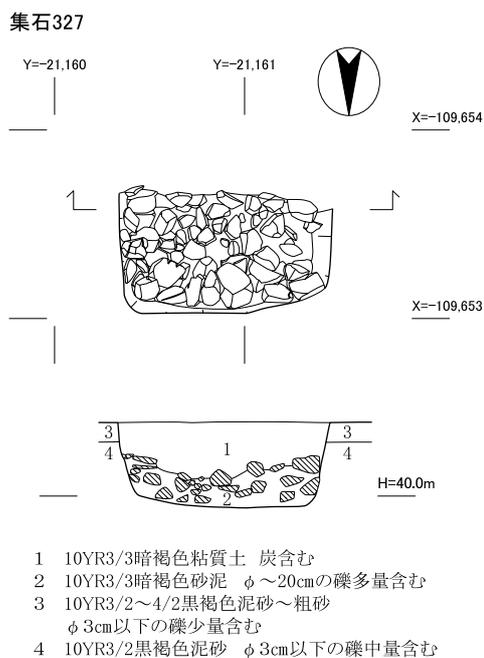
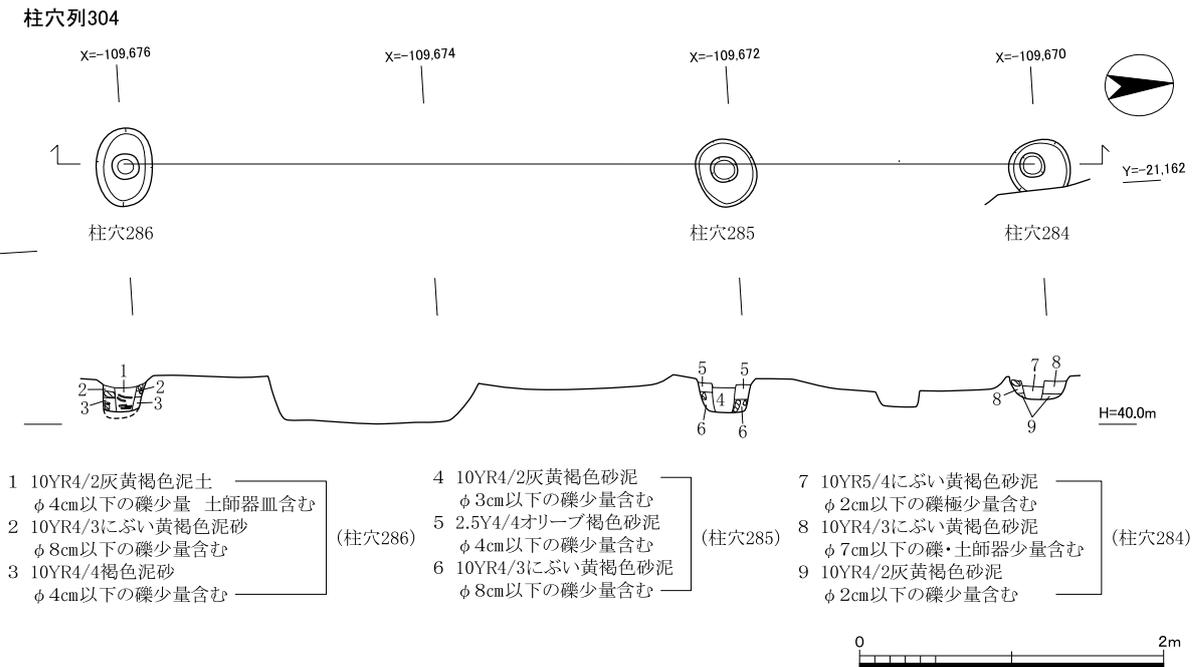


図10 1区柱穴列304実測図(1:50)、集石327実測図、塀245断面図(1:40)

東西0.9m、南北2.0m（図版10-24・25層）。検出面からの深さは0.16mで、底面の標高は40.10mである。内面ににぶい黄褐色粘質土を約4cmの厚さで貼り付ける。丁寧な造作を施しているが、用途は不明である。

塀245（図版32、図10） 1区を南北に貫く。溝状遺構に柱穴が並ぶいわゆる布掘り基礎をもつ。布掘りの断面はU字形（図版10-21～23層、図10）、幅は0.5～1.0m、検出長は27mあり、南は調査区外に延び、北は水道管土留め擁壁際で途切れる。深さは0.24～0.44m、布掘りの底部の標高は北端で40.15m、南端で39.81mである。方位は正方位である。この布掘りに柱穴が24基並ぶ。柱穴の掘形は径0.3～0.4m、深さ0.4～0.7m。中には径0.15mの柱痕の残るものもある。柱間は0.5～1.2mである。この遺構は敷地を東西に仕切る塀と考えられ、東側で検出した路面397に対応する。土器類・瓦類細片の他、取鍋の椀形滓が出土した。

路面397 南東部で検出した寺院内通路と考える遺構である。一部に攪乱を受けるが、東壁断面の南半で観察することができる（図版8・9-34・35層）。灰黄褐色から暗褐色の砂泥を約0.1mの厚さで敷き、よく締まる。上面が硬化する。西側で検出した塀245に対応するとみられ、本能寺境内を区画する南北塀とそれに沿った通路が想定できる。

柱穴列304（図10） 南西部で検出した南北方向の柱穴列である。途中1箇所は攪乱を受けるが、南北3間分（北から柱穴284・285・286）を検出した。南へ連続する可能性もある。方位は北に対して3.5度東に振れる。柱間は2.0mである。掘形の平面形は円形で、径0.4m、深さは0.15～0.22mある。柱穴286では、柱痕に土師器皿が4枚以上重ねて埋納されていた。土師器は京都X期に属する。柵か、建物の一部である可能性がある。

集石327（図10） 北部で検出した。南は埋設管コンクリートにより不明であるが、検出面では平面方形の遺構である。掘形は東西1.1m、南北0.65m以上。検出面からの深さ0.45m、底部の標高は39.94m、断面は方形。埋土下層には径10～15cmの河原石が密に詰まる。

1区第4面（図版3）

江戸時代前期の整地層上面で、土坑・石列・路面などを検出した。

土坑282 中央東寄り検出した。東西0.7m、南北1.2mの平面隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さ0.24m、断面は逆台形。底部の標高は40.10m。埋土には径約10cmの河原石が密に詰まる（図版10-15層）。

石列235 北部東端で検出した。長径0.1～0.3m、短径0.1mの河原石を南北に並べる。東に面を合わせている。検出長は9.8mある。北は調査区外に延びるとみられるが、調査区中央部では大きく攪乱を受け、南部では石列は見つからなかった。第5面で検出した塀245中心から0.8m東に離れて並行する。後述する路面303に伴う縁石と考える。

路面303 東部で南北に検出した寺院内通路と考える遺構である。一部に攪乱を受けるが、北・南・東は調査区外に延びる（図版7-15層、図版8・9-33層）。路面幅は最大で2.4m。遺構の西側は北半では石列235により区画される。南半では石列による区画はないが、瓦や集石により区

切られる。この遺構は礫を少量含む褐色砂泥を約0.1mの厚さで敷き、よく締まる。上面が硬化する。第5面で検出した路面397の後身と想定できる。

1区第3面（図版4）

江戸時代中期の遺構面である。1788年の天明の大火により廃絶した遺構及び大火の火災処理坑があり、土坑・石列・路面・三和土・埋甕・池・瓦溜り・溝などを検出した。

土坑73 南西部で検出した。平面円形の遺構である。掘形は径0.7m。検出面からの深さ0.06m、底部の標高は40.58m、断面は扁平な逆台形。陶胎染付が出土した。

土坑106（図版16・32） 中央部で検出した。掘形は東西0.5m、南北0.7mの隅丸長方形の遺構である。検出面からの深さ0.25m。底部の標高は40.48m、断面長方形。掘形内において幅30～35cmの平瓦を4枚、縦に組み、その内部に径5～15cmの礫を密に詰め込む。内法は東西0.3m、南北0.35m。浸透枘としていたと考えられる。

土坑109 北西部で検出した。平面隅丸長方形の遺構である。掘形は東西0.8m、南北0.65m。検出面からの深さ0.14m、底部の標高は40.96m、断面は逆台形。土師器の他、施釉陶器が出土した。

土坑110 北東部で検出した。北部は土留め擁壁により不明であるが、検出面では隅丸方形の遺構である。掘形は東西1.0m、南北0.7m以上。検出面からの深さ0.71m、底部の標高は39.95m、断面は逆台形。土師器・陶磁器類・瓦類・鉄釘・泥面子が出土した。

土坑118 北西部で検出した。平面ほぼ円形の遺構である。掘形は径0.7m。検出面からの深さ0.17m、底部の標高は40.58m、断面は逆台形。土師器・陶磁器類・瓦類・銭貨が出土した。

土坑127 北東部で検出した。南部は土留め擁壁により不明であるが、検出面では隅丸方形の遺構である。掘形は東西1.3m、南北0.7m以上。検出面からの深さ0.72m、底部の標高は40.04m、断面は逆台形（図版7－8層）。土師器・土師質土器・焼塩壺・焼締陶器・施釉陶器・肥前系磁器など多量の遺物が出土した。

石列142（図版15） 北東部で検出した。長さ約0.4m、厚さ約0.3mの花崗岩製切石を南北に並べる。東に面を合わせている。検出長は8.0mある。北は調査区外に延びる。南では埋設管コンクリートにより中断される。そこより南では石列は見つからなかったが、抜き取り痕とみられる掘形を見つけている。方位は正方位である。この東側には路面139がある。

路面139（図版15） 東部で南北に検出した寺院内通路と考える遺構である。中央部に攪乱を受けるが、北・南・東は調査区外に延びる（図版7－12層、図版8・9－31層）。路面幅は最大で3.0m。遺構の西側は北半は石列142により区画される。南半は攪乱を受けており、明確な区画はみつからなかった。礫・焼土・漆喰・炭を微量に含む黒褐色砂泥を0.05～0.08mの厚さで敷き、よく締まる。上面が硬化する。第5面の路面397、第4面の路面303を踏襲する路面である。なお、この路面北部は瓦を多量に含む層（図版7－4層、図版8－26層）により覆われている。本報告ではこの層を路面139上面と呼称する。

三和土207（図版15） 北東部で検出した遺構である。東端は石列142の石の上面を覆う。一部

に攪乱を受けるが、東西1.3m、南北2.6mの範囲に厚さ6～8cmで黄褐色の漆喰を敷き固める。南西部ではその上面に灰白色漆喰を厚さ2cm程度重ねる。西端では約8cm角のいわゆる豊島石で漆喰面を区切り、その西にはさらに平瓦を縦にして区切りを設ける。三和土上面の標高は40.72～40.77m。北東には大甕を据えた埋甕209があり、これを含めて何らかの水回り設備であったと考える。

埋甕108 (図版16) 北西壁際で検出した。直径0.65mの掘形に底径0.20mの焼締陶器の甕を正位に据える。掘形の深さは検出面から0.45m、底部の標高は40.24mを測る。検出面から甕の底面までの深さは0.4mである。甕の上端部は攪乱を受け失われているが、体部・底部は残存する。内面には尿石が付着する。甕内の埋土からは土師器や施釉陶器などが出土した。

埋甕209 (図版15) 北東部で検出した。掘形は径約0.5mの円形である。検出面からの深さ0.54m、断面は逆台形。底部の標高は40.16mである。大和産瓦質土器大甕が上部を破壊された状態で出土した。甕の埋土からは他にも土師器小片や陶磁器小片などが出土した。

池77・141 (図版16・32) 南部西端で検出した漆喰造りの池である。平面形は不定形で、西は調査区外に延びる。池77は東西0.65m以上、南北1.7m、池の底はほぼ平坦で、深さは0.18m。底部の標高は40.40mである。南東の岸辺には人頭大の河原石を縁に配置した径約0.7mの土坑があり、ここには景石を据えたとみられる。池141は東西0.8m以上、南北1.8m、東は攪乱を受ける。池の底はほぼ平坦で、深さは0.2m。底部の標高は40.34mである。両遺構とも、明黄褐色漆喰を6～12cmの厚さで掘形に直に貼り付けて造られる。池141の方が漆喰は薄い、層序・構造などから、両遺構は同一の遺構である可能性がある。

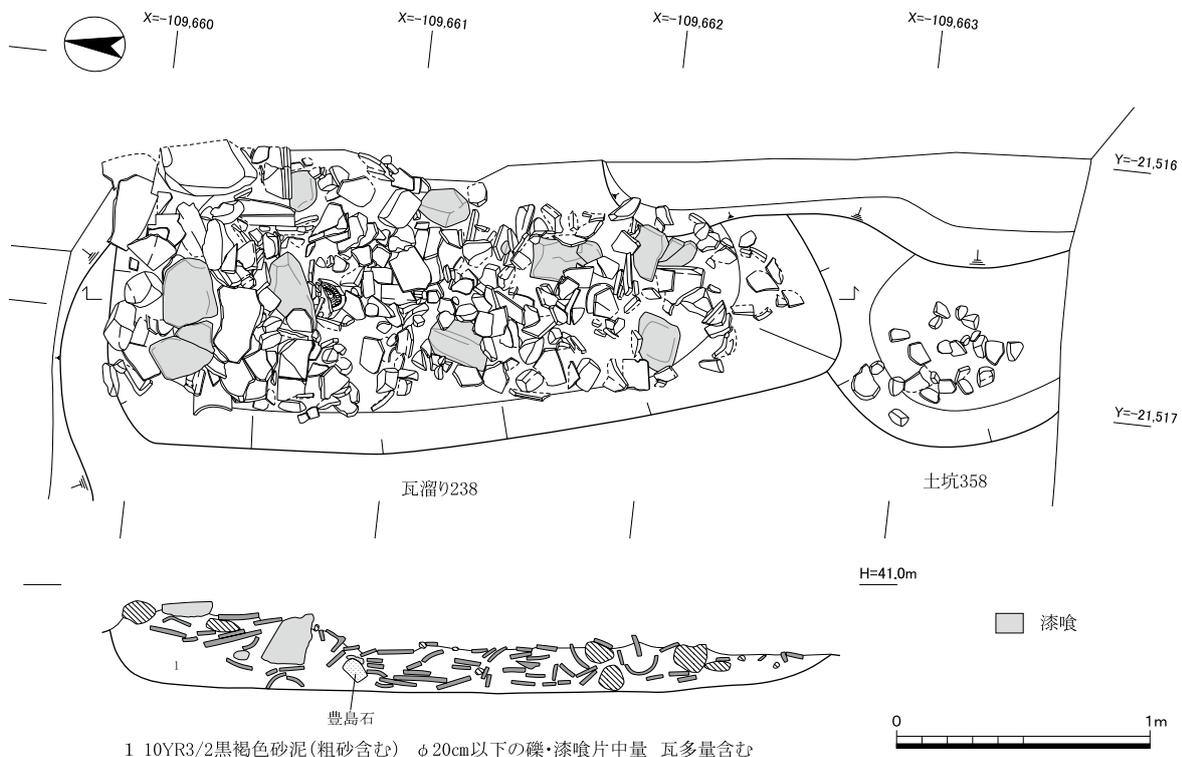


図11 1区瓦溜り238実測図(1:30)

瓦溜り86 中央部東端で検出した。東は調査区外に延びる。東西0.8m以上、南北4.2mの瓦溜り遺構である(図版8-27層、図版10-12層)。検出面からの深さ0.94m、断面は方形。底部の標高は39.64mである。埋土は赤褐色焼土と炭を含む黒色泥砂で、瓦が多量に詰め込まれる。瓦はほぼ全て二次的な被熱を受けている。他には土師器・施釉陶器の細片が含まれる。瓦には、軒丸瓦・軒棧瓦の他、棟端瓦などがあり、中には「御用／大仏瓦師／井上十郎瓦窯」「大仏瓦工／井上十良兵衛」「京大佛瓦師／西村彦右衛門」などの刻印のあるものがある。

瓦溜り238 (図11) 中央部東端で検出した。東側は調査区外に延びる。東西1.0m以上、南北2.9mの瓦溜り遺構である。検出面からの深さ0.3m、断面は緩やかな逆台形。底部の標高は40.58mである。埋土は黒褐色砂泥で瓦が多量に詰め込まれる他、一辺0.2～0.3mの漆喰塊を含む。この土坑の上層には、明黄褐色粘土(図版8-28層)が0.08～0.10mの厚さで敷かれており、瓦を埋めた後、上面を舗装し路面としたと考えられる。他には土師器・陶磁器の細片が極少量含まれる。瓦には、軒棧瓦・丸瓦・棟端瓦などがあり、中には「大仏瓦工／井上十良兵衛」と記す刻印のあるものがある。なお、二次的な被熱を受けた瓦はほとんど含まれなかった。

溝180 (図版16) 南東部で検出した南北溝である。路面139を断ち割るように掘り込まれている。北と南は調査区外に延びる(図版9-30層)。検出長は9.5m、深さ0.4m、幅は北で0.7m、南で1.5m、断面は逆台形である。検出面からの深さは0.4m、底部の標高は南北とも40.10m。方位はほぼ正方位である。埋土は暗褐色泥砂からにぶい黄褐色砂泥で、瓦類・陶磁器片を少量、漆喰・炭・焼土を微量含む。

1区第2面(図版5)

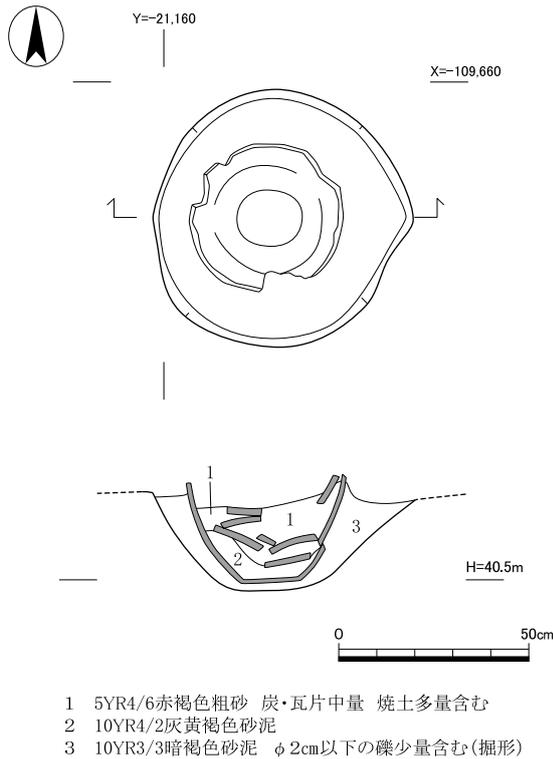
江戸時代後期の遺構面である。1864年の元治の大火により廃絶した遺構及び大火の火災処理坑で、土坑・路面・埋甕などを検出した。

土坑52 南東部で検出した。南はコンクリート擁壁により不明であるが、検出面では隅丸方形の遺構である。掘形は東西1.6m、南北0.5m以上。検出面からの深さ0.48m、底部の標高は40.05m、断面は逆台形。土師器・染付小片・軒平瓦・瓦類・銭貨などが出土した。

土坑53 南西部で検出した。東は攪乱を受け不明であるが、検出面では径2.0mの半円形の遺構である。検出面からの深さ0.41m、底部の標高は40.23m、断面逆台形。土師器、陶磁器、瓦の小片の他、シカの距骨が出土した。

土坑175 中央部で検出した。平面楕円形で、東は調査区外に延びる大規模な土坑である。掘形は東西5.1m以上、南北4.1m。検出面からの深さ0.45m、底部の標高は40.2m、断面は方形(図版8-15～17層、図版10-7・8層)。土師器の他、陶磁器小片・瓦類が出土した。

路面76 東部で検出した南北方向の寺院内通路と考える遺構である。一部に攪乱を受けるが、路面幅は最大で2.0m。北・東は調査区外に延びる(図版7-2層、図版8・9-21層、図版10-10・11層)。路面はよく締まったにぶい黄褐色砂泥によって構築される。路面の一部が暗赤褐色に変色(図版5焼土面)、元治の大火で被熱した面とみられる。第5面の路面397、第4面の路面303、



- 1 5YR4/6赤褐色粗砂 炭・瓦片中量 焼土多量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥 φ2cm以下の礫少量含む(掘形)

図12 1区埋甕80実測図(1:20)

西2.2m以上、南北3.0m。検出面からの深さ0.38m、底部の標高は40.56m、断面は掘鉢状。二次的被熱を受けた瓦が多量に出土した。

小溝群 中央部で南北小溝を3条検出した。方位はほぼ正方位である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、土師器片・焼土を含む。溝44・45の北と南は現代攪乱を受ける。溝46の北は調査区外に延び、南は現代攪乱を受ける。溝44(図版10-1層)は検出長9.1m、幅0.3m。断面は逆台形で、検出面からの深さは0.05~0.10m、底部の標高は北で40.82m、南で40.88mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、土師器・陶磁器・瓦の細片を含む。溝45(図版10-2層)は検出長9.0m、幅0.2~0.4m。断面は逆台形で、検出面からの深さは0.03~0.08m、底部の標高は北で40.79m、南で40.86mである。溝44と45との芯々距離は約2.2mである。溝46(図版8-13層、図版10-3層)は検出長8.0m、幅0.25~0.3m。断面は逆台形で、検出面からの深さは0.02~0.05m、底部の標高は北で40.87m、南で40.84mである。溝45と46との芯々距離は約2.1mである。

井戸36 南西部で検出した円形漆喰枠の井戸である。東半は攪乱を受ける。掘形は径1.45m、漆喰枠部分は外法径が0.95m、内法径が0.85mある。検出面から深さ約1mまで掘り下げたが、安全面を考慮して掘り止めたため、底部の標高は不明である。灰白色の漆喰を5~6cmの厚さで固める。

漆喰槽49 南部で検出した槽である。灰黄色漆喰製で平面形は紡錘形、長径1.0m、短径0.6m、深さは0.4mある。厚さ0.05~0.10mで漆喰を塗り固める。槽の上端部の標高は40.72m、底部は平坦で標高は40.32m。槽南東部は攪乱を受け上端部は失われる。南東下部と北西上部に溝が付く。南東の溝は槽の最下部から会所50へと繋がる。北西の溝は槽の上部から北西方向に延びるがその

第3面の路面139を踏襲する。

埋甕80(図12) 中央部で検出した。直径0.7mの掘形に底径0.2mの焼締陶器の甕を正位に据える。掘形の深さは検出面から0.3m、底部の標高は40.48mを測る。検出面から甕の底面までの深さは0.27mである。甕の上部は攪乱により失われているが、体部・底部は残存する。内面には尿石が付着する。甕内の埋土からは瓦小片などが出土した。

1区第1面(図版6)

1864年の元治の大火後の遺構面である。土坑・小溝群・井戸・漆喰槽・会所・建物などを検出した。

土坑42 中央部西端で検出した。平面不定形で、西は調査区外に延びる土坑である。掘形は東

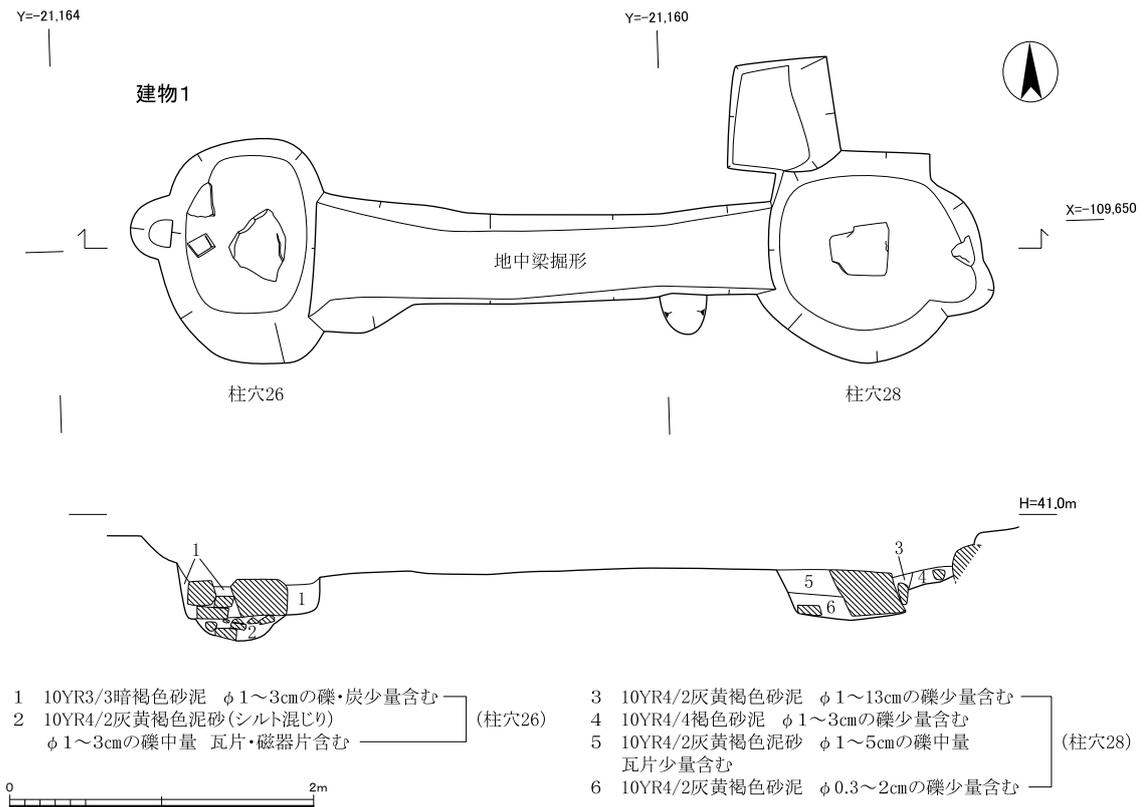


図13 1区建物1（柱穴26・28）実測図（1：50）

先は攪乱を受け途切れる。北西壁面最下部には径約8cmの小穴があり、下層にも北西へ続く溝があった可能性がある。

会所50 漆喰槽49南東で検出した一辺約0.5mの方形の遺構である。掘形は径1.2mの円形。深さは検出面から0.47m、底は平坦で標高は40.01m、断面形は方形。下半部を高さ約0.1mまで灰白色の漆喰で固め、その上半部を長辺0.3~0.4m、短辺0.15~0.20mの切石で囲む。内法は一辺約0.4m。西辺漆喰上端部に漆喰槽49から延びてきた溝の底部が繋がる。漆喰槽49とともに沈砂槽か水回りの設備であるとみられる。

溝44~46・井戸36・漆喰槽49・会所50は明治6年（1873）に設立された京都府立栽培試験場に関連するもの遺構とみられる。

建物1（図版32、図13） 北部で検出した建物の一部である。東西方向に並ぶ2基の地下式礎石（柱穴26・28）からなる。柱間4.0mである。柱穴26は平面隅丸方形で掘形は東西1.0m、南北1.5m。検出面からの深さ0.78m。底部には一辺0.40mの扁平な石を設置して礎石としている。柱穴28は平面隅丸方形で掘形は東西1.5m、南北1.4m。検出面からの深さ0.69m。底部には一辺0.40mの扁平な石を設置して礎石とする。柱穴26と柱穴28の間は溝状に掘り込まれている。これは柱をつなぐ地中梁の掘形と考えられる。規模は幅0.55m、検出面からの深さ0.27m。明治時代の磁器碗（55）やガラス片などが出土した。

柱穴26・28は明治28年（1895）竣功の京都市議事堂（初代庁舎）の玄関前に設けられた車寄せの底を支える柱（図24・26）と考えられる。

(3) 2区の遺構

2区第3面 (図版11)

1区第5面に相当する。土坑や墓坑を検出した。

土坑14 中央部東寄りで検出した。南は調査区外となる。平面形は歪な楕円形、東西幅は1.6mある。検出面からの深さ0.32m、断面はU字状。一部を欠く一石五輪塔や人頭大の河原石などが投棄された状態で出土した。底部の標高は40.06m。

土坑15 中央西寄りで検出した。東と南は攪乱を受ける。平面形は一辺1.7m以上の隅丸方形。検出面からの深さ0.44m、断面は逆台形。底部の標高は39.87m。土師器・土師質土器などが出土した。

墓坑12 (図14) 中央部南端で検出した。南は調査区外となる。平面形は隅丸方形に近い円形で、径1.15m、検出面からの深さは0.18mである。断面形はU字状。底部の標高は40.09m。人骨・肥前系磁器・鉄釘が出土した。墓坑の最下層とみられる。

墓坑13 (図14) 土坑14の北側で検出した。北東部に攪乱を受ける。平面形は円形、径約1.2m、検出面からの深さ0.43m、断面はU字状。底部の標高は39.88m。人骨・施釉陶器が出土した。また、底面には、鉄釘の痕跡を検出した。

2区第2面 (図版11)

1区第4面に相当する。土坑や墓坑を検出した。

土坑7 中央部で検出した。一辺約1.0mの隅丸方形の土坑である。検出面からの深さ0.76m、断面は逆台形。底部の標高は39.8mである。埋土からは焼締陶器大甕が出土した。他にも、土師器・土師質土器・焼塩壺・陶磁器小片などが出土した。

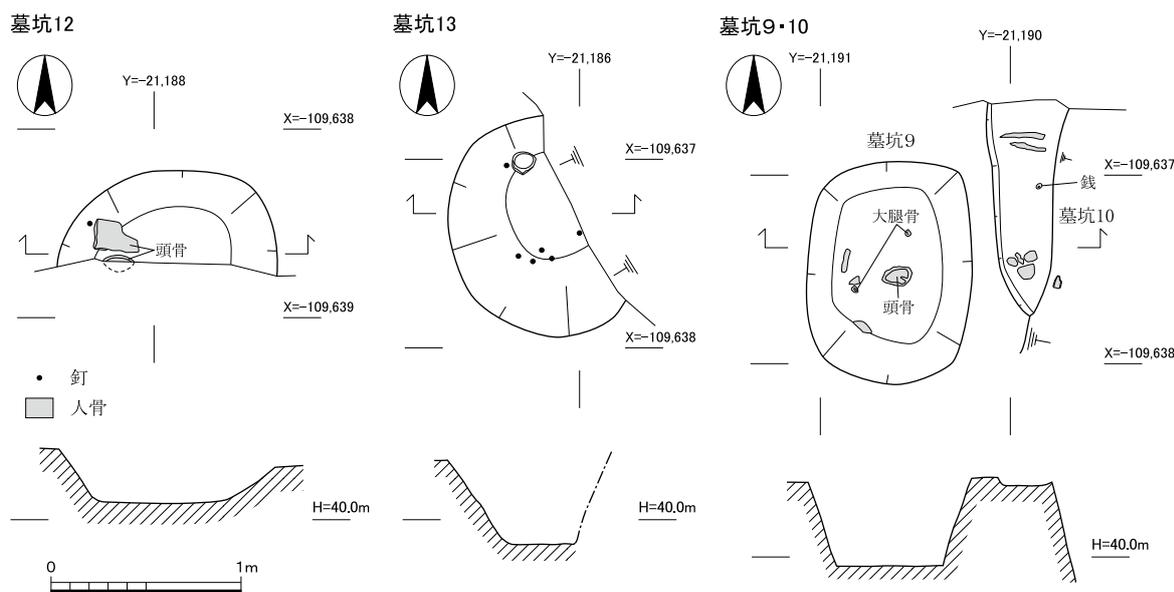


図14 2区墓坑12・13・9・10遺物出土状況図 (1 : 40)

土坑11 中央部北東寄りで検出した。一辺0.5mの円形の土坑である。検出面からの深さ0.28m、断面は逆台形。底部の標高は40.33mである。大型の火消し壺(63・64)が埋納されていた。さらに、火消し壺の中には胞衣壺(61・62)が入れ子に入っており、胞衣壺の中には土師器皿(60)が伏せた状態で納められていた。

墓坑9(図版34、図14) 西寄りで検出した。東西0.9m、南北1.2mの隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さ0.48m、断面は逆台形。底部の標高は39.96mである。中央部で頭頂骨が上下逆転した状態で1個体出土し、その北と西で大腿骨が鉛直方向で出土した。他にも側頭骨・鎖骨・脛骨・上腕骨などが出土した。この下層部においてほぼ水平状態で別個体の大腿骨を検出した。埋土にも大腿骨が含まれ、改葬されたか、複数体埋葬されていた可能性がある。

墓坑10(図版34、図14) 墓坑9北東で検出した。東は攪乱を受け、北は調査区外に延びる。東西0.5m以上、南北1.1m以上の土坑である。検出面からの深さ0.18m、断面は逆台形。底部の標高は40.30mである。人骨(脛骨・上腕骨)が水平状態で2点出土。埋土(図版12-北壁断面13層)は暗灰黄色砂質土で人骨を含む。他にも、鉄釘・銭貨(寛永通寶)が出土した。

2区第1面(図版11)

1区第3面に相当する石列を検出した。また、近代の遺構であるが、この面で検出した煉瓦基礎についてここに述べる。

石列6(図15) 中央部で検出した。長さ約0.75m、厚さ約0.3mの花崗岩製切石を東西に並べて据える。南に面を合わせている。検出長は9.4mある。西は調査区外に延びる。東はコンクリート層により攪乱される。方位はほぼ正方位である。根入れに小石を挟み込み固定させている。天端の標高は平均40.88m、天端後方には焼土面が広がる。

煉瓦基礎18 南北に約4.5m分検出した。南と北は調査区外に延びる。南で現地表下約0.3m、北で現地表下約0.7mで検出した。基礎は最も深いところで1.5mの深さまであり、厚さは最下部で0.7m、上部で0.35mある。最下層はコンクリートで固める。煉瓦は長手だけの段、小口だけの段と一

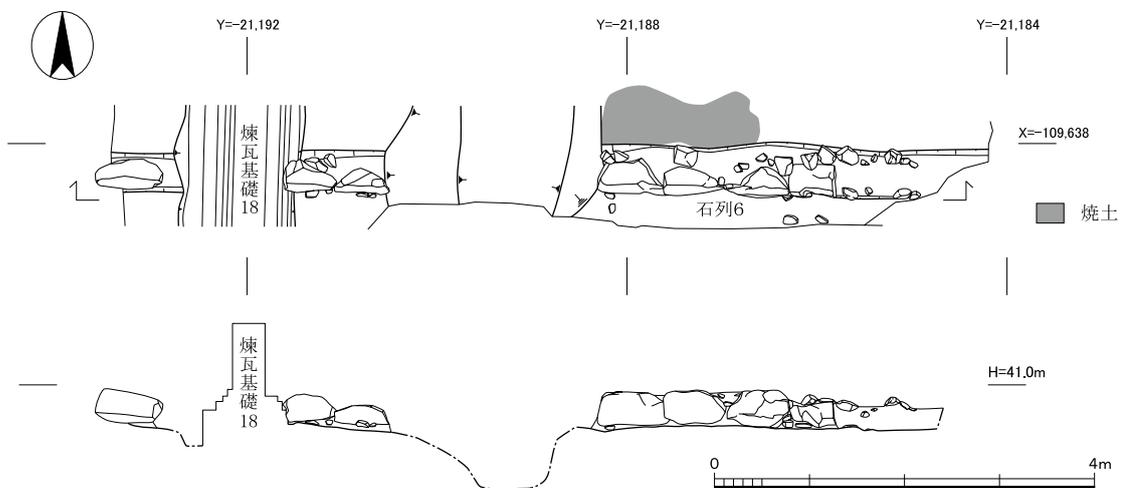


図15 2区石列6実測図(1:80)

段置きに積む方式のイギリス積みで、下部は下に行くに従って壁が厚くなるように階段状に積む。西側の表面には灰白色の漆喰の痕跡がある。出土した煉瓦の寸法は概ね長さ22.0cm、幅10.7cm、厚さ5.7cmである。表面にはワイヤーカットを示す縮緬状の皺があり、機械抜き成形による煉瓦の特徴である。同様の製法で作られた同サイズの煉瓦は、禁野火薬庫（明治30年開設）出土煉瓦²⁾や、旧大阪府庁舎大正増築棟出土煉瓦³⁾（大正3・4年に生産された可能性が高い）などがある。層序、出土煉瓦の時期とあわせて、この煉瓦基礎は大正の御大典（大正4年挙行）で使用された建物の部材を使用して造られたという2代目庁舎（大正6年竣工）⁴⁾の基礎であるとみられる。

（4）3区の遺構

3区第2面（図版13）

1区第5面に相当する。土坑を検出した。

土坑5 中央部で検出した。北は調査区外に延びる。一辺1.0m以上の方形の土坑である。検出面からの深さ0.3m、断面は逆台形。底部の標高は40.40mである。埋土は3層に分けることができ、上層には、土師器皿が多量に投棄されていた。他にも、施釉陶器や焼締陶器の小片・硯などが出土した。

3区第1面（図版13）

1区第3面に相当する。石列を検出した。

石列3（図16） 中央部で検出した。長さ約0.7m、厚さ約0.3mの花崗岩製切石を東西に並べる。南に面を合わせている。検出長は途中で攪乱を受けてはいるが10.0mあり、東西は調査区外に延びる。方位はほぼ正方位である。根入れに小石を挟み込み固定させている。天端の標高は平均40.97m。掘形から土師器・肥前系磁器・施釉陶器などが出土。検出状況、東西の座標がほぼ同じことなどから、2区石列6の延長部にあたる可能性がある。

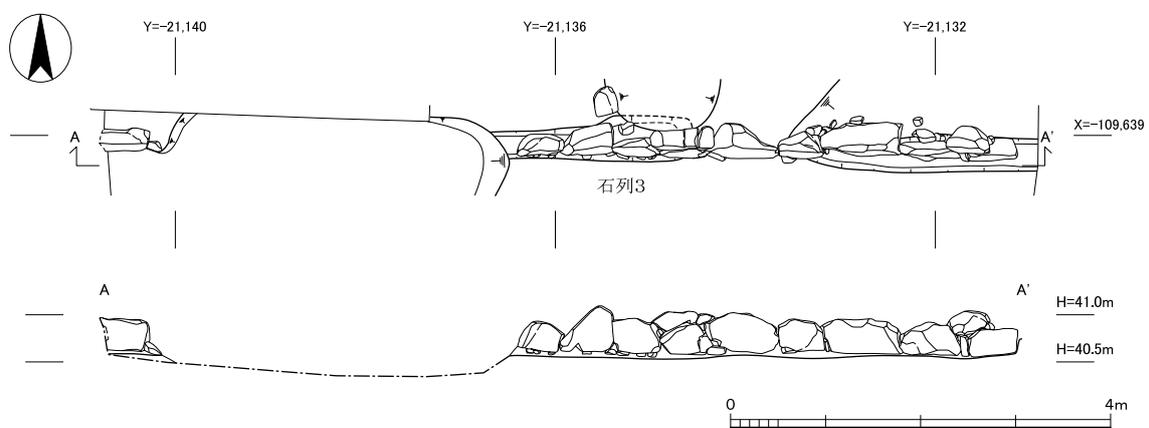


図16 3区石列3実測図（1：80）

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査では、整理コンテナにして87箱分の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、土製品、石製品、銭貨などがある。全体の5割が土器・陶磁器類、約4割が瓦類である。遺物の帰属時期は古墳時代から明治時代までのものがあるが、江戸時代の遺物が最も多く、古墳時代から室町時代までの遺物は微量である。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について調査区ごとに概要を述べる。なお、各種遺物の個別の詳細については、表4～9にまとめた。

(2) 土器類 (図版17～20・35、表5)

1区出土土器 (図版17～19)

落込み396出土土器(1～6 図版17) 土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。この遺構からは、今回の調査の中で最も古い時期の土器が出土した。すべて磨滅が激しく、河川氾濫により運ばれたとみている。1は古墳時代の土師器高杯脚部である。脚裾部が屈曲して大きく開き、外面には縦方向のヘラミガキの痕跡がわずかに認められる。2は飛鳥時代の須恵器杯Aである。3～5は土師器の皿である。3は京都V期中段階に属し、体部外面から口縁部外面は二段ナデで、口縁端部は丸く仕上げる。4は体部外面の横方向のナデが一段で、口径は14cmを超える。京都VI期中段階に

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		土師器 1点		
飛鳥時代	須恵器		須恵器 1点		
平安時代	土師器、須恵器、瓦類		土師器 3点、須恵器 1点、瓦類 3点		
室町時代	瓦器、瓦類		瓦器 1点、瓦類 1点		
安土桃山時代	土師器、瓦類		瓦類 2点		
江戸時代	土師器、土師質土器、瓦質土器、磁器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、銭貨、鉄滓、人骨、獣骨		土師器49点、土師質土器11点、瓦質土器 2点、磁器13点、施釉陶器17点、焼締陶器 4点、輸入陶磁器 3点、瓦類61点、土製品 5点、石製品 8点、銭貨 7点、鉄滓 1点、獣骨 1点		
明治時代初期	磁器、施釉陶器		磁器 1点		
合 計		105箱	196点 (26箱)	0箱	79箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より18箱多くなっている。

属する。5は体部外面のナデは二段である。京都Ⅵ期古段階に属する。6は室町時代の瓦器羽釜である。外面の鏝より下方にはわずかに煤が付着する。

柱穴286出土土器（7～9 図版17） 土師器皿が重なって出土した。京都Ⅺ期古段階に属する。7～9まですべて、内面の立ち上がり部に不明瞭ながらも凹線状圏線（以下圏線という）をもち、体部は直線的に開く。口径は10.4～11.6cm。

土坑283出土土器（10・11 図版17） 土師器が出土した。京都Ⅺ期に属する。10・11は土師器皿である。10は圏線が巡る。器壁はやや厚手である。内外面とも煤が付着し、表面は黒灰色を呈する。11は浅い圏線をもつ。

土坑305出土土器（12～15 図版17） 土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、埴塙などが出土した。12・13は土師器の皿である。12は体部外面にヨコナデによる凹みがある。口縁には煤が付着する。13には圏線はないが器壁がやや厚手で口縁部に丸みをもつ。14は土師質土器で堺系の焼塩壺である。15は瓦質土器の甕である。口径47.0cm、器高49.1cm、底径40.0cmを測る。口縁部は内面に肥厚し、端部は平坦面をもつ。大和産である。

溝180出土土器（16～19 図版17・35） 土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、磁器などが出土、土師器皿の出土はなかった。16は磁器で端反の小杯である。草花文と鳥文を描く。薄手で高台外周部が幅広に造形され丁寧な絵付けを施す。輸入磁器であると考えられる。17～19は施釉陶器である。17は角皿で、ロクロ成形の後、体部を長方形に仕上げる。見込みには径4cmの円形に浅く圏線を入れ、草花文が描かれる。赤褐色の化粧土を掛けた後、釉薬は口縁部外面を外して掛ける。18世紀前半の京焼である。18は蓋である。胎土は灰黄褐色を呈するが、上面には褐色の釉薬をリング状に、下面には暗オリーブ色の釉薬を施す。19は土瓶である。側面に布袋の絵を描く。反対側には化粧土で文字が書かれるが判読できない。京焼である。

土坑127出土土器（20～35 図版17・18・35） 土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器が出土した。20～22は土師器の小型皿である。赤色系で口径は7.0～7.2cmであり。20・21には煤が付着する。23は土師器皿で、圏線が明瞭に入る。体部は直線的に開く。24は備前産の焼締陶器の壺である。内面にも一部釉薬が掛かる。器壁を薄く作り、堅く焼き締める。25～30は磁器で、肥前系の染付である。18世紀代のものである。25は蓋で外面には草花文が描かれ、見込みに笠文が付く。26・27は口縁内部に四方嚮、見込みに五弁花手書きコンニャク文が描かれる。26は筒形椀で氷裂文に菊花散し文様、高台内は二重方形枠内に渦福の銘が入る。27・28は椀で、27は梅樹文様、見込み周縁に二重圏線が入る。28はねじ花文様で、見込みには一重圏線内に桃の実状の文様が描かれる。体部の立ち上がり部の丸みが少ない。29は輪花の鉢である。内外面に雲竜を描く。30は折縁の鉢で、高台の内側に無釉の部分を幅広く作り中央を凹ませる。内面には草花を描く。焼継が施されている。31～33は京焼の施釉陶器である。31・32は合子の蓋と身である。蓋には菊水文様が簡素に描かれる。身には貫入が入る。油墨状のものが付着していた。33は折縁皿で全体に灰黄色の釉薬が掛かる。34・35は土師質土器で、34は花塩壺である。伏見・深草産である。35は風炉である。全体が明赤褐色を呈する。体部外面を丁寧に磨く。3箇所扁平な脚が付き、各脚の中央に径約2

mmの孔を貫通させる。

第3面遺構検出中出土土器 (36 図版18) 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器などの他に、輸入陶磁器の小片が出土した。36は華南三彩の皿である。薄緑を呈する緑釉と黄色及び褐色の釉薬を施す。陰刻文を施す。

石列142出土土器 (37 図版18) 掘形から施釉陶器、焼締陶器、磁器などの他に、輸入陶磁器の小片が出土した。37は輸入青磁皿の底部である。釉薬はオリブ黄色を呈する。内面には陰刻を施す。底部外面に墨書様のものがあるが、判読できない。

土坑73出土土器 (38 図版18) 土師器、施釉陶器、磁器などが出土した。38は施釉陶器の鉢である。いわゆる陶胎染付で外面には白化粧し青で絵付けを施す。口縁端部は平坦に作り釉薬を掛けていないことから、重ね鉢であるとみられる。

土坑109出土土器 (39～41 図版18・35) 土師器、磁器、施釉陶器、輸入陶磁器などが出土した。39は土師器で肘造りの小型皿である。外面に指頭圧痕がある。内面はナデを施す。橙色を呈する。40は磁器で肥前系染付の仏飯器である。松葉文を描く。41は施釉陶器で、京焼の花入れである。四角柱形で、1面にアヤメ科の花が描かれる。にぶい黄色の釉薬が外面最下部と下面以外に掛かる。

埋甕108出土土器 (42～46 図版18) 埋甕の埋土から土師器、施釉陶器などが出土した。42は土師器の小型皿である。外面にナデによる凹みが巡る。浅黄色を呈する。43～45は施釉陶器である。いずれも京・信楽系の灯明具で灰オリブ色の釉薬を施す。43・44は灯明皿で、43は内面の一部に釉薬が荒れてはがれる箇所がある。44は見込みに3箇所目痕が残る。内面にはへら状の工具で2条の交差した沈線を施す。外面の素地の部分には煤が付着する。45は油受皿である。46は埋甕として使用されていた信楽の甕である。4段に分割成形されている。底部外面を除いて赤褐色に発色する鉄泥が塗られている。尿石の付着が認められ、便槽として使用されていたものとみられる。

埋甕209出土土器 (47 図版18) 47は埋甕として使用されていた瓦質土器の甕である。口径55.0cm、器高53.5cm、底径26.0cmを測る。底部から斜めに体部が立ち上がり上半は直立する。口縁部は外反するが、端部は平坦面をもつ。内外面ともにナデで仕上げるが指頭圧痕を認める。大和産と考えられる。

土坑175出土土器 (48～52 図版19) 土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。48～52は土師器である。すべて肘造りの小型皿で口径は5.2cm、浅黄橙からにぶい橙色を呈する。内面はナデを施す。48～50には外面に指頭圧痕がよく残る。

埋甕80出土土器 (53 図版19) 53は埋甕として使用されていた信楽の甕である。3段に分割成形されている。底部外面を除いて赤褐色に発色する鉄泥が塗られている。尿石の付着が認められ、便槽として使用されていたものとみられる。

第1面遺構検出中出土土器 (54 図版19) 土師器、土師質土器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。54は磁器の小椀である。瀬戸・美濃系の端反椀で型紙摺りのいわゆる染色体

文、口縁端部には鉄釉が施される。見込みには朱で大きく「本」の文字を本来の中心文様に重ねて書く。高台内には縦書きで「□津」横書きで「施」「主」の文字を朱で入れる。19世紀後半のものである。

柱穴26出土土器 (55 図版19) 土師器、施釉陶器、磁器、焼締陶器が出土した。55は磁器である。薄手の小椀で口縁部は失われているが、体部外面に把手を付けた痕跡が認められ、ティーカップであった可能性もある。高台内に「幹山精製」と書かれる。この銘を使用したのは清水焼陶工幹山伝七で、幕末に東山において磁器の製造を起し明治前半期に隆盛を極めた。京都府知事植村正直などの支持を受け、宮内省御用品の製造も行っていた。

2区出土土器 (図版19・20)

土坑15出土土器 (56・57 図版19) 土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器が出土した。56は土師器の皿である。橙色を呈し、内面の立ち上がり部に不明瞭ながらも圏線をもち、体部は直線的に開く。口径は9.9cm。57は土師質土器でいわゆる「でんぼ」と呼ばれる白色系土師質の鉢である。

墓坑12出土土器 (58 図版19) 磁器が出土した。58は肥前系染付椀である。草花文を描く。底部を厚く作る。釉薬は灰色である。

墓坑13出土土器 (59 図版19) 施釉陶器が出土した。59は京焼の筒形椀である。見込みに小さい目痕が三箇所認められる。高台部を除いて浅黄色の釉薬を施す。貫入が入る。

土坑11出土土器 (60～64 図版19・35) 土師器、土師質土器が出土した。60は土師器の皿である。内面の立ち上がり部に明瞭に圏線が巡る。体部外面から口縁部外面の横方向のナデによる凹み有一段明瞭につく。口径9.8cm。61～64は土師質土器である。61・62は胞衣壺の蓋と身である。伏見・深草産とみられる。63・64は火消し壺の蓋と身である。ロクロ成形である。63の蓋は口径26.6cmあり、ツマミが付く。64には肩部に櫛描波状文が施される。口径22.0cm、器高23.5cm、底径24.7cmを測る。63・64の中に61・62が入れ子状態となって出土、61・62の中に60が入っていた。胞衣壺62の内容物を分析したところ、土師器皿60の他はザクロソウ種子28点と魚骨とみられる小片・鉄片各1点であった。ザクロソウは人里の畑地や路傍に生育する植物である。

土坑7出土土器 (65 図版19) 陶器の甕が出土した。65は信楽の甕である。4段に分割成形されている。最大径が口縁部にある。口縁をL字状に内側に曲げ、端部に平坦面を作りその下方に3条の凹線を施し、くびれ部を作る。底部外面を除いてにぶい赤褐色に発色する鉄泥を塗る。尿石の付着はない。破壊された状態で出土した。

石列6出土土器 (66 図版19) 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などが出土した。66は土師器の皿である。内面の立ち上がり部に明瞭に圏線が巡る。灰白色を呈し、口径9.4cm。

土坑5出土土器 (67 図版19) 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器が出土した。67は土師器の皿である。器壁は厚みがある。圏線が明瞭に巡る。橙色を呈し、口径10.9cm。

第2面遺構検出中出土土器 (68・69 図版19) 土師器、土師質土器、施釉陶器、磁器が出土した。68・69はともに土師質土器の「でんぼ」である。灰白色を呈する。

3区出土土器 (図版20)

第Ⅵ層出土土器 (70 図版20) 壁断面の断ち割り作業中に第Ⅵ層 (河川氾濫堆積層) から、古い時代の土師器、須恵器が出土した。70は平安時代の須恵器杯Bで、貼り付け輪高台をもつ。磨滅している。

土坑5出土土器 (71~83 図版20) 土師器の皿が大量に出土した。その他の遺物には施釉陶器、磁器などの小片が出土した。土師器皿には完形のものも多く、また多数の破片も完形に復元できる。71~76までは肘造りの小型皿である。外面に指頭圧痕がある。内面はナデを施す。口径は5.1~5.8cmの中に納まる。浅黄橙色を呈する。77~82は圏線のない小型皿である。内面及び口縁端部は丁寧にナデを施す。口径は8.1~8.4cmの中に納まる。にぶい橙色を呈する。83はこの遺構から出土した土師器の中で唯一、圏線が明瞭に巡る皿である。口径は10.6cmで浅黄橙色を呈する。

土坑6出土土器 (84~88 図版20) 土師器、施釉陶器、磁器、焼締陶器が出土した。84~87は土師器の皿である。84は肘造りの小型皿である。外面に指頭圧痕、内面はナデを施す。口径5.6cmで淡赤橙色を呈する。85は圏線のない皿で全体に厚みがある。口縁部に煤が付着する。86・87は圏線をもつ皿である。86の口縁には煤が付着する。88は施釉陶器で、唐津の天目茶碗である。底部を厚く作る。胎土はにぶい黄色、釉薬はオリーブ褐色に発色する。

土坑7出土土器 (89~94 図版20) 土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、磁器が出土した。89~91は土師器の皿である。89は肘造りの小型皿である。外面に指頭圧痕、内面はナデを施す。口径5.9cmで浅黄橙色を呈する。90・91は浅い圏線をもつ皿である。体部が斜め上方へ直線的に立ち上がり、器高が2.2~2.3cmと深さがある。92は土師質土器で堺系の焼塩壺である。93・94は磁器で、肥前系青磁である。93は脚付き香炉で三足が付く。外面にケズり出しで数条の凸線を巡らせる。94は大皿で口径は27.8cmある。

石列3出土土器 (95~107 図版20) 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器が出土した。95~101は土師器である。95・96は肘造りの小型皿で、口径5.3cm・5.5cmと小振りである。浅黄橙色を呈する。97は圏線のない小型皿で内面及び口縁端部はナデを施す。口径は8.3cm、浅黄橙色を呈する。口縁端部に煤が付着する。98~101は圏線が明瞭に入る皿である。浅黄橙色から灰白色を呈する。98は体部が斜め上方に直線的に立ち上がるが、99は著しく外反する。100・101は体部外面にヨコナデによる凹みがある。100は口縁部に、101には全体に煤が付着する。102は施釉陶器で明赤褐色の釉薬を全面に施す。内面にはハケメが入る。口縁端部に煤が付着するため、灯明皿としても使用されたとみられる。103・104は磁器で、肥前系染付小碗である。コンニャク印判の桐の葉文様を散らす。103は松葉などを手描きで付け足す。105~107は施釉陶器である。105は下ぶくれの円錐形をした小壺である。透明の鉛釉を掛ける。京焼とみられる。106は平坦な底部をもつ筒形の香炉である。外面と口縁部まで朱泥を施す。内面には釉薬を施さない。底部外面に窯印とみられる刻印が押されている。107は瀬戸の脚付き盤である。底部内外面に目痕が残る。体部外面に縦方向に凹凸をつける。釉薬は黄色を呈するが、口縁部外面に褐釉を点状に付ける。

(3) 瓦類 (図版21～28・36、図17、表4・6)

瓦は火災時に掘削された焼瓦廃棄土坑(瓦溜り)などから大量に出土した。平安時代から近世のものまでであるが、江戸時代のものが多くを占める。平安時代から室町時代までの瓦は河川氾濫層や落込み、後世の遺構や攪乱に混入して出土した。ここでは、平安時代の瓦、室町時代と考えられる瓦、江戸時代の瓦の計67点を掲載する。この中には刻印をもつ瓦が23点、ヘラ書きのある瓦が3点ある。個別の詳細は表6に記載したため、ここでは概要を述べる。

1区出土の江戸時代中期の瓦(瓦1～58 図版21～27・36)

ほとんどの瓦は瓦溜り86及び瓦溜り238出土の瓦である。他に、路面139上面、溝180などからの出土が多い。瓦溜り86出土瓦はほとんどが二次被熱により赤変している。刻印のあるもの、人名印のあるもの、ヘラ書きで人名を記すものも多い。

軒丸瓦(瓦1～5)には、右巻き三巴文と菊花文がある。三巴文はほとんどが右巻きであるが、掲載はしていないが左巻き三巴文も数点あった。瓦1は丸瓦部の凹面には鉄線切り離し痕と布目が残し、中央には釘孔が1箇所ある。瓦2には瓦当面に「+」の記号が陽刻される。瓦4は丸瓦部中央に釘孔が1箇所ある。瓦5は小型の蓮華文である。

棟込瓦(瓦6～9)は、すべて菊花文である。

軒平瓦(瓦10～25)は、瓦10の他は軒棧瓦の軒平部の可能性がある。瓦10は中心文が花文の唐草文で、瓦12は滴水瓦である。瓦当部右脇縁を面取りする。瓦32と同文である。瓦13は中心文が橋である。瓦28と同文である。瓦15は二次被熱を受け赤褐色を呈する。瓦当面左周縁に「瓦工大坂甚兵衛」と記す人名印がある。瓦16～18・20・22・24は外行2転唐草文、中心文は5葉文の下に珠点が付く。19・21・23も同文と考えられる。瓦16・18～22・24には、瓦当面周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。瓦25は立浪文である。瓦当面右周縁に「大仏瓦師／井上十郎瓦窯」と記す刻印がある。瓦34の刻印と同文字である。

瓦26は平板状の瓦に棧を付けた板塀瓦である。

瓦27～35は軒棧瓦である。瓦28は軒平瓦部が瓦13と同文である。瓦31は軒平瓦部は無文である。瓦32は滴水瓦で、瓦12と同文である。瓦33・34は立浪文である。瓦34の右周縁には、隅丸長方形の圏線内を2区画に区切り、「御用」「大仏瓦師／井上十郎瓦窯」と記す刻印がある。瓦35は角瓦である。

瓦36・37は丸瓦である。粘土板1枚作りで、凹面に鉄線切り離し痕と布目が残る。瓦37には抜き縄痕跡が明瞭に付く。

瓦38・39は隅瓦の一部である。瓦39には釘孔が2箇所ある。

瓦40～45は棟端飾り瓦の一部である。瓦40は珠文を円筒状の器具で押す。瓦41は鬼面部は失われているが、右側面に「大佛瓦工／井上重良兵衛」と大きくヘラ書きする。瓦42は菊花を彫刻する。裏面に「□大仏瓦工□／□井上十郎兵□」とヘラ書きする。瓦43は葺手の先端部で裏面にカキ

ヤブリがある。二次被熱により赤変している。瓦44は葉脈を線刻する。裏面にヘラ書きがあるが、ごく一部のため判読できない。瓦45は鬼面の一部とみられる。

瓦46・47は棟端瓦である。獅子口最上部の経の巻となる。瓦46は小ぶりの右巻き三巴文、瓦47は菊花文である。

瓦48は獅子口の側面である。山形の綾筋が2条ある。3箇所釘孔が残る。地の部分に漆喰塗布のためのカキヤブリがある。経の巻上面に円形の圏線内に「+」字の記号印、その下方に隅丸長方形の凹みの中に「大仏瓦工／井上十良兵衛（衛はくずし字）」を陽刻で表す人名印がある。これと同文字のものが瓦57・58にある。

瓦49は面戸瓦の中でも鱧面戸と呼ばれるものである。裏面に突起があり、根元に穿孔がある。

瓦50～57は刻印のある瓦を掲載した。瓦50は棟瓦の一種で角棧伏間瓦と呼ばれる。瓦51～55は平瓦か熨斗瓦である。瓦52と54には櫛目がある。瓦50～53には隅丸長方形の凹みの中に「京大佛瓦師／西村彦右衛門」を陽刻で表す人名印を凸面に押す。瓦54には上部欠損して隅丸長方形の凹みの中に「・佛瓦師／・重良兵衛」を陽刻で表す人名印を凸面に押す。瓦55は隅丸長方形の圏線内に行書体で「十」を表す文字印を平瓦の小口に押す。瓦56は丸瓦で、凸面に「大佛瓦師／西村彦右衛門」と行書体で刻印される。瓦57・58は獅子口側面上部にあたる。経の巻上面に円形の圏線内に「+」字の記号印、その下方に隅丸長方形の凹みの中に「大仏瓦工／井上十良兵衛（衛はくずし字）」を陽刻で表す人名印がある。瓦48の刻印と同文字である。

1区出土の江戸時代後期の瓦（瓦59～62 図版28）

軒平瓦か軒棧瓦が3点、道具瓦が1点ある。瓦59は右周縁に行書体で「平」を表す文字印を上下逆に押す。瓦60・61は立浪文である。瓦60は滴水瓦である。瓦61は左周縁に「平安城大佛任瓦師／西村彦右エ門尉」の人名印を押す。瓦62は飾り瓦で、菊花の蕾と葉を表す。裏面にカキヤブリがあり、棟端を飾ったものと考えられる。

1区出土の寺町以前の瓦（瓦63～66 図版28・36）

1区では今回の調査で見つかった瓦の中で寺町期より古い時期の瓦も数点出土した。

瓦63～65は平安時代の軒丸瓦である。いずれも磨滅している。後世の遺構や整地層に混入して出土した。

瓦66は室町時代とみられる軒丸瓦である。瓦当面には圏線の中に文字を表す文様が入る。左半分が欠損しているが「妙」の字の傍にあたりとみられる。塀245下層から出土した。

3区出土の江戸時代後期の瓦（瓦67 図版28・36）

軒丸瓦を1点掲載する。瓦67は右巻き三巴文の瓦当面のみである。裏面は丸瓦との接合痕がなく丁寧にナデを施し、円盤状を呈する。中央と外区の2箇所に小孔がある。獅子口の修理に釘か鉄線などで取り付けたものか考える。

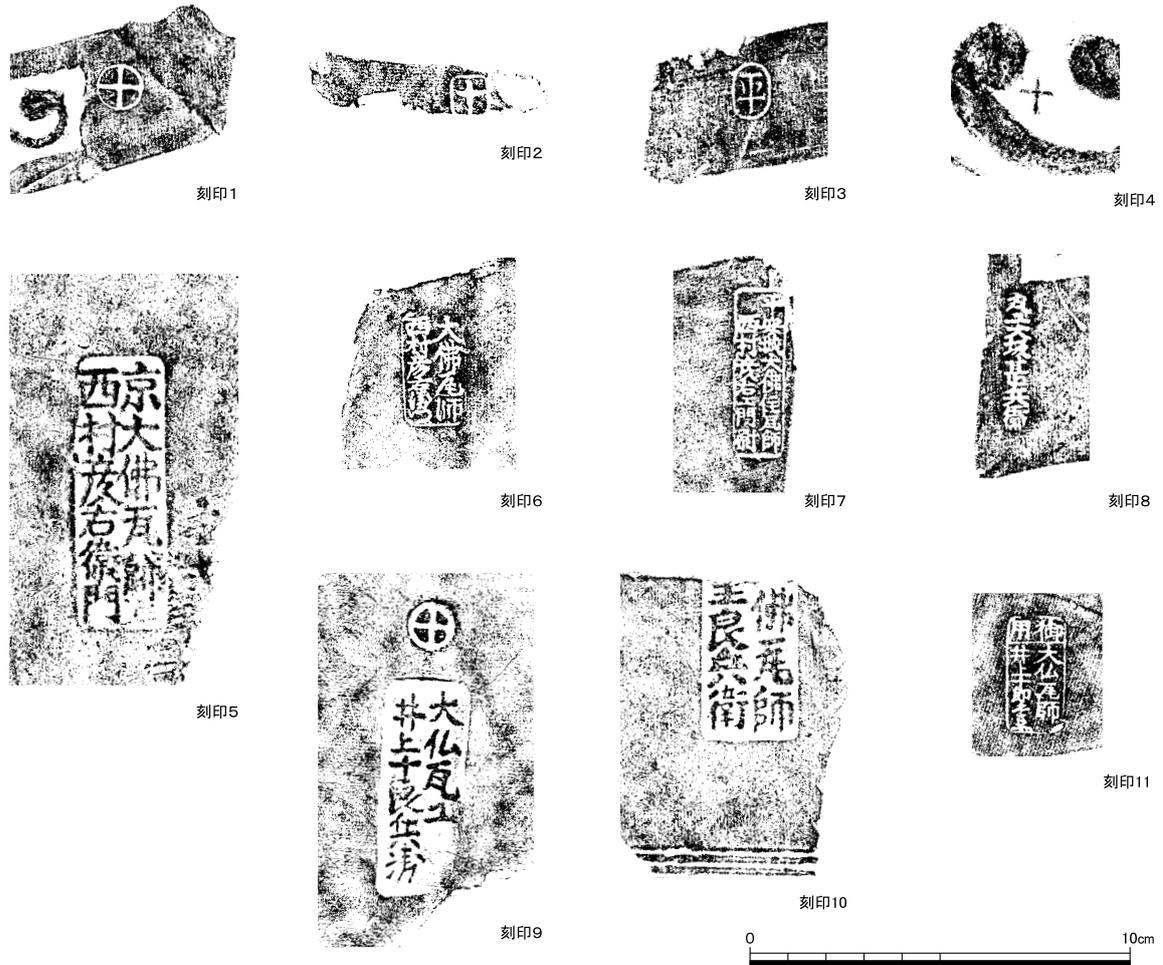


図17 刻印瓦拓影（1：2）

表4 刻印一覧表

No.	刻印	数	押印箇所	出土遺構	瓦番号
刻印1	丸に「+」	25	軒平瓦周縁(7)、平瓦小口(17)、瓦凸面(1)	瓦溜り86(6)、土坑54(9)、土坑55(1)、土坑88(5)、路面139上面(1)、掘下げ中(3)	瓦19
刻印2	角に「十」字	1	平瓦小口	瓦溜り86	瓦55
刻印3	隅丸長方形に「平」字	1	軒平瓦周縁	土坑62	瓦59
刻印4	「+」陽刻	1	軒丸瓦瓦当	瓦溜り238	瓦2
刻印5	「京大佛瓦師／西村彦右衛門」陽刻	11	平瓦凸面(11)	瓦溜り86(8)、土坑52(3)	瓦53
刻印6	「大佛瓦師／西村彦右衛門」	1	丸瓦凸面	瓦溜り86	瓦56
刻印7	「平安城大佛任瓦師／西村彦右衛門尉」	1	軒平瓦周縁	土坑54	瓦61
刻印8	「瓦工大坂甚兵衛」	1	軒平瓦周縁	土坑88	瓦15
刻印9	丸に「+」、「大仏瓦工／井上十良兵衛」陽刻	3	獅子口経の巻凸面(3)	瓦溜り238(1)、瓦溜り86(2)	瓦58
刻印10	「佛瓦師・重良兵衛」陽刻	1	平瓦凸面	瓦溜り86	瓦54
刻印11	「御用」「大仏瓦師／井上十郎瓦窯」	2	軒丸瓦瓦当(2)	瓦溜り86(2)	瓦34

刻印瓦 (図17、表4)

今回の調査では、刻印をもつ瓦は合計48点見つかった。刻印には記号印4種28点と人名印7種20点がある。記号印は、圏線内に「+」が最も多く25点ある。人名印には「西村」銘が最も多く3種13点ある。他には「井上十良兵衛」「重良兵衛」「井上十郎」銘が6点、「大坂」銘が1点ある。また、ヘラ書きは3点あり、2点(瓦41・42)が「井上」と書かれ、残る1点(瓦44)は判読し難い。

(4) 土製品 (図版20、表7)

土1～3は泥面子である。土1は矢車文で1区土坑110から、土2は「寅」の文字銘で2区石列6裏込めから、土3は五三桐文で2区第2面遺構検出中に出土した。

土4は土人形の人物立像で、表面に淡黄色の釉を施す。底面に径4mmの孔がある。中には玉が入り、鈴のように鳴る。2区墓坑9から出土した。

土5は鳩笛である。完形で出土、高く澄んだ音を出すことができる。2区第2面遺構検出中に出土した。

(5) 石製品 (図18・19、表8)

石1～3は墓標の部材である。石1・2は三段墓の前面両側に据えられる逆円錐型の花立てで

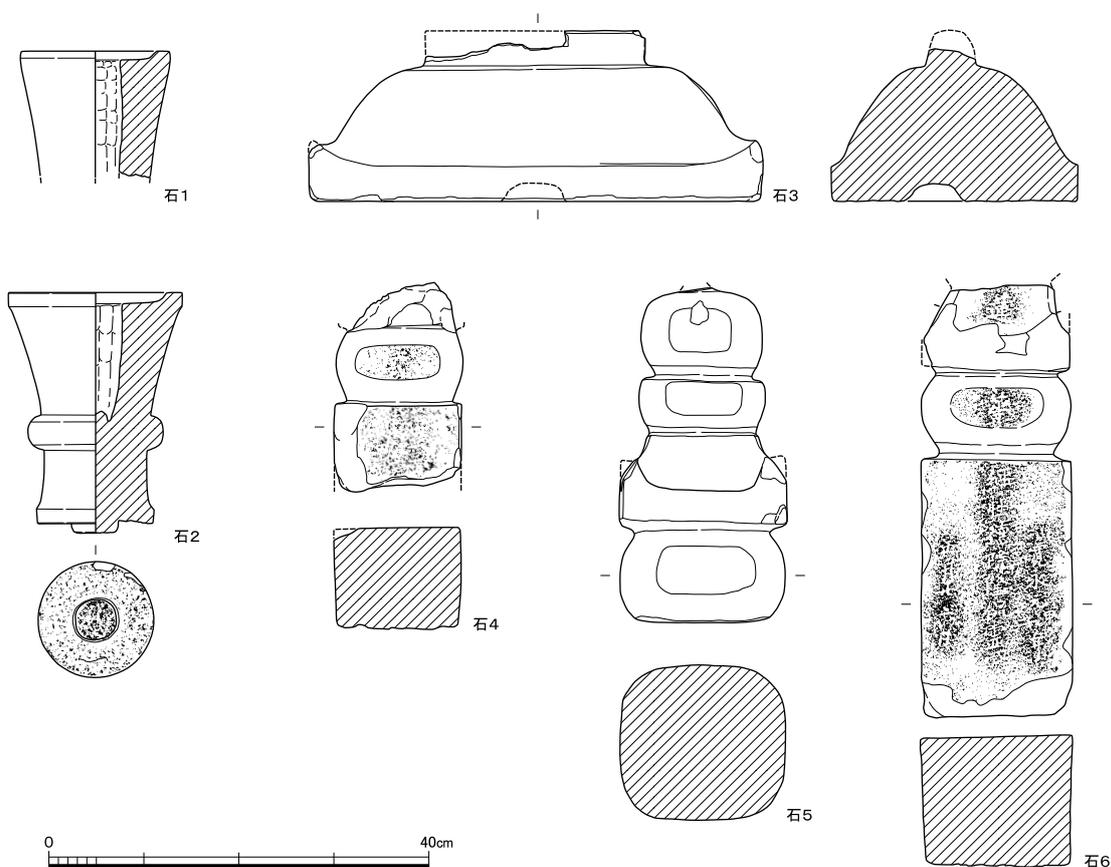


図18 石製品実測図 (1 : 8)

ある。石1は中央に径5.6cmの孔がある。石2は中央に径5.6cm、深さ12.5cmの孔が穿たれる。底部には組み合わせを安定させるための突起を設けている。石1は花崗岩製、石2は砂岩製である。石3は笠付位牌形墓標の笠部である。横長の屋根形をしており、頂部に棒状の突起が付く。底面には組み合わせのための柄穴がある。黒雲母花崗岩製である。

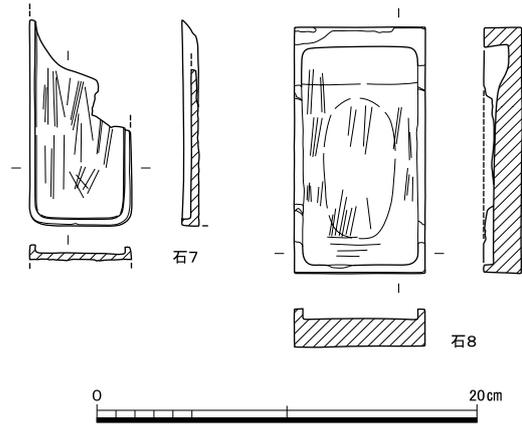


図19 出土硯実測図(1:4)

石4~6は一石五輪塔である。石4は水輪部と地輪部の一部である。水輪部には「華」の文字が刻まれる。地輪部には「經」の他に文字があるが、判読し難い。閃緑岩~斑糲岩製である。石5は地輪部を欠く。文字はみつからない。黒雲母花崗岩製である。石6は空輪部と風輪部を欠く。火輪部には「蓮」、水輪部には「華」の文字が刻まれる。地輪部には「經」の文字の他に「寛永元年」「性徳院隆侃靈」「五月廿六日」と刻まれる。閃緑岩~斑糲岩製である。

石7・8は長方形を呈する硯である。頁岩~粘板岩製である。石7は上面を欠損、裏面が剥離しているため、長さとは不明である。二次被熱により赤変している。石8は長さ13.1cm、幅6.9cm、厚さ2.1cm、黒色を呈する。

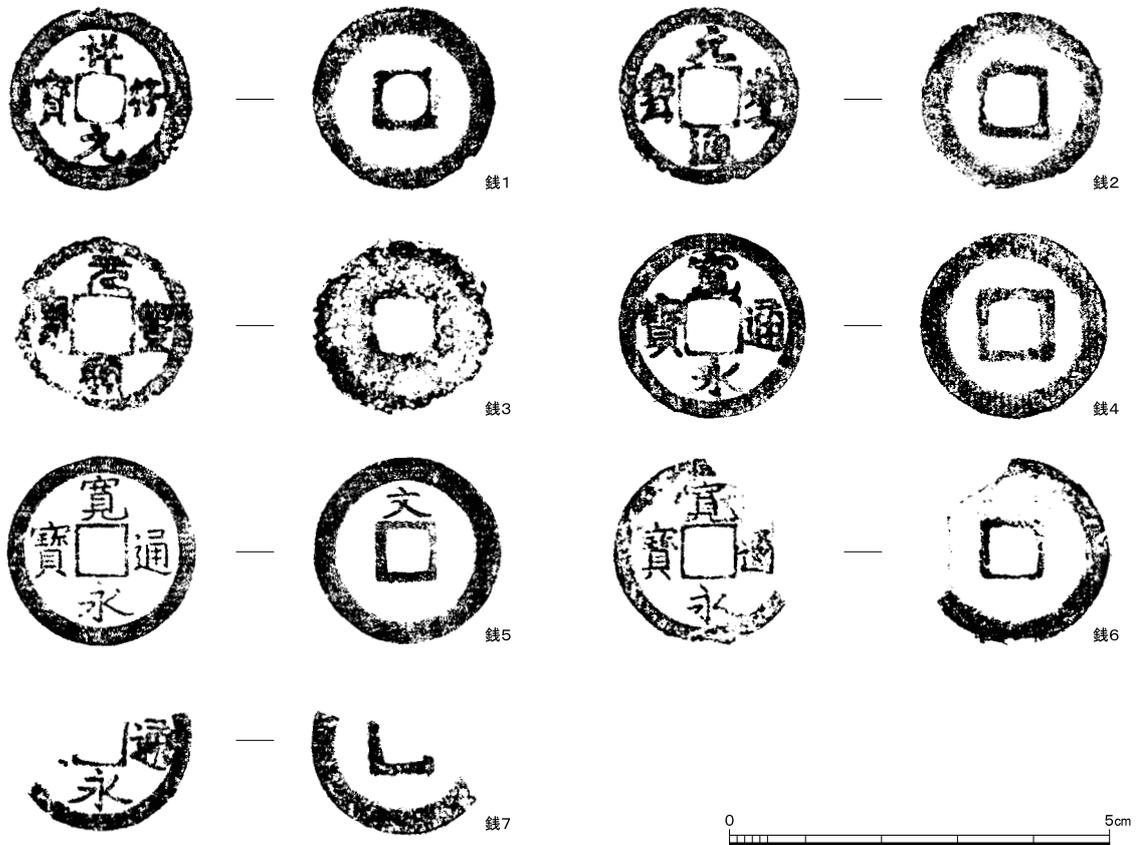


図20 錢貨拓影(1:1)

(6) 銭貨 (図20、表9)

今回の調査で出土した銭貨は7枚ある。内3枚は輸入銭、他は寛永通寶である。輸入銭に関しては模倣銭の可能性も検討すべきであるが、理化学的分析は行っていない。

銭1～3は輸入銭である。銭1は祥符元寶、銭2は行書体の元豊通寶、銭3は篆書体の元豊通寶である。輸入銭の出土した最も新しい遺構は土坑52で、天明の大火後の遺構である。この頃まで流通していたことが窺われる。

銭4は古寛永通寶で、初鑄年は寛永13年(1636)である。これも土坑52からの出土である。銭5は裏面に「文」の銘があるいわゆる寛文期の文銭である。初鑄年は寛文8年(1668)。銭6は裏面に銘はないが、字形から寛文以降の新寛永に分類できる。銭7は半分欠損しているため、時期は判定し難い。観察表では寛永13年初鑄とした。

(7) その他の遺物 (図21・22)

鉄滓 (図21)

径約10cmで底の丸い、取鍋の椀形滓である。鍛冶炉の底に不純物がたまったまま固まったものである。塀245下層から出土した。寺の造営にあたり、周辺で簡単な鍛冶工が行われたことが想定できる。

獣骨 (図22)

シカの右距骨がある。土坑53から出土した。

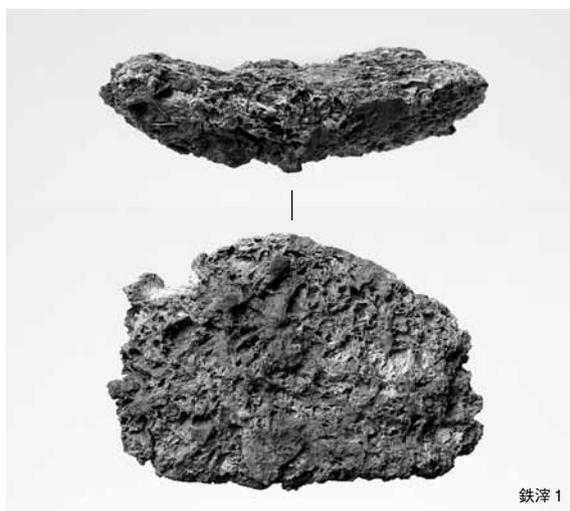


図21 鉄滓 (取鍋椀形滓)



図22 獣骨 (シカ距骨)

江戸時代（第2面から第4面） 第2面から第4面で、石列・路面・三和土・池・浸透樹・瓦溜りなどを検出した。第4面は、第5面で検出した堀245や路面397の上に石列235や路面303が造られていたことで、本能寺転入時と天明の大火の間に一度整地されたことがわかった。この整地は元禄4年（1691）の開山堂¹⁾建立か、翌年の本能寺裏門²⁾新設に伴う境内の整備であったと考えられ、この頃堂宇が整ったという史料と合致する。路面についてみると、路面は第2～5面の各面に存

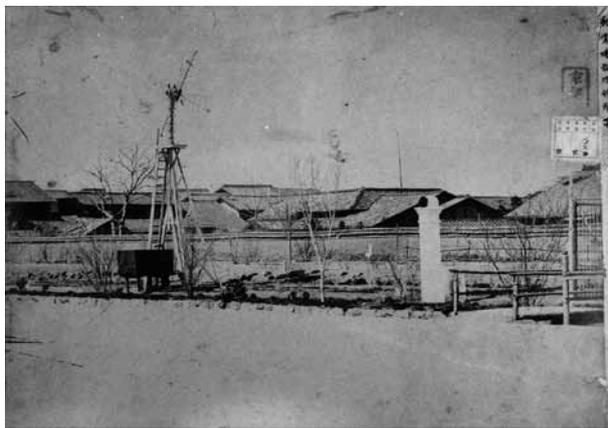


図25 明治6年（1873）設立の京都府栽培試験場（京都府立京都学・歴史館「京の記憶アーカイブ」から）



図26 明治28年（1895）竣工の議事堂（京都市ホームページ「京都市庁舎の沿革」から）



図27 明治31年（1898）開庁の京都市役所（初代庁舎）（京都府立京都学・歴史館「京の記憶アーカイブ」から）

在し、第2面は元治の大火による被熱痕が明瞭である。江戸時代を通じて幾度か改修されながらも、調査区東端には南北通路があったことが明確になった。

第3面では、南北通路は花崗岩切石と通路で東西に区切られ、石列の西側には三和土の間や水回り遺構、池を検出していることから、西側に建物とその南西には園池が存在したことがわかった。これらの遺構は天明の大火で廃絶する。天明の大火前の建物配置を知る資料としては『本能寺史料 本山篇 下』³⁾に安永4年（1775）の絵図がある（図23）。しかし、この絵図は実寸が不明のため、残念ながら本調査地を正確に当てはめることはできなかった。

第2面は天明の大火後から元治の大火までであるが、遺構はまばらであり、この時期は空地となった可能性がある。

また2区では、墓坑を検出しており、墓域となっていたことがわかった。墓坑9では、頭骨の両側に大腿骨が鉛直方向で出土した状況から、座棺であったとみられる。その下層からは別の大腿骨が出土しており、複数体埋葬されていたようである。土坑11からは胞衣壺を火消し壺に入れ子にして埋納していた。当時の慣習を何う手掛かりとなろう。2・3区で検出した南面する東西石列は、本能寺境内周囲に配された塔頭の南限を示すとみられ、塔頭内に配置された墓とみられる。古絵⁴⁾図には、2区では久成院、遠寿院、3区では

慧昇院、本光院などの名が当該地に記されるが、今のところ塔頭名は特定できていない。

幕末以降（第1面）明治6年（1873）に設立された京都府栽培試験場（図8・25）のものと考えられる溝や井戸、漆喰槽や会所を検出している。京都府栽培試験場は明治27年（1894）に京都市に払い下げられ、翌年に京都市議事堂が設立される。⁵⁾『本徳寺史料 本山篇



図28 絵葉書（昭和2年頃）

上』の明治28年（1895）の図面には「議事

堂」の記載がある（図24）。議事堂の写真には、車寄せに2本の柱が見える（図26）。ここに明治31年（1898）に京都市役所（初代庁舎）が開庁される（図27）。その後、大正天皇の大礼で饗宴場として使用された建物が京都市に下賜され、その用材をもって、大正6年（1917）に、初代庁舎の西側に2代目庁舎として新庁舎が建設された。昭和2年頃の絵葉書（図28）には、手前に2代目庁舎、その奥に昭和2年竣工の3代目庁舎（新東館）が並んで写る。調査では、1区で京都市議事堂（初代庁舎）の車寄せの庇を支える柱とみられる柱穴26・28、2区で大正時代の2代目庁舎の基礎である煉瓦基礎18などを検出、歴代京都市庁舎の位置を確認することができた。

註

- 1) 『本徳寺史料 古記録篇』 思文閣出版 2002年
- 2) 『本徳寺史料 本山篇 上』 思文閣出版 1996年
- 3) 『本徳寺史料 本山篇 下』 思文閣出版 1999年
- 4) 『大本山本徳寺敷地絵図』 寛政十一年作製 本徳寺所蔵など
- 5) 『京都市政史 第1巻 市政の形成』 京都市 2009年

表5 土器類観察表

掲載番号	器種	器形	調査区	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調・胎土など	備考
1	土師器	高杯	1区	落込み396	-	(4.2)	10.7	脚部60	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含	古墳時代
2	須恵器	杯A	1区	落込み396	11.9	3.4		15	5Y6/1灰 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート含	飛鳥時代
3	土師器	皿	1区	落込み396	9.2	1.5		25	10YR8/2灰白 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	平安時代後期
4	土器類	皿	1区	落込み396	14.9	2.4		10	10YR8/2灰白 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母含	平安末期～鎌倉
5	土器類	皿	1区	落込み396	15.0	3.0		10	7.5YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	平安末期～鎌倉
6	瓦器	羽釜	1区	落込み396	17.6	(3.3)	-	10	N4/0灰 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒子含	室町時代
7	土師器	皿	1区	柱穴286	10.4	2.3		60	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
8	土師器	皿	1区	柱穴286	10.5	2.3		50	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・雲母・石英含	
9	土師器	皿	1区	柱穴286	11.6	2.4		30	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
10	土師器	皿	1区	土坑283	9.9	(2.0)		20	2.5Y5/1黄灰 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
11	土師器	皿	1区	土坑283	11.8	2.0		50	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
12	土師器	皿	1区	土坑305	10.5	2.0		25	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
13	土師器	皿	1区	土坑305	10.6	2.0		20	7.5YR7/3こぶい橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英・赤色粒子含	
14	土師質土器	焼塩壺	1区	土坑305	5.5	9.7		100	5YR6/6橙 胎土密 φ1mm以下の長石・チャート・石英含	堺系
15	瓦質土器	甕	1区	土坑305	47.0	49.1	40.0	40	N5/0灰 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含	大和
16	輸入磁器	小杯	1区	溝180	6.2	4.1	3.0	60	N8/0灰白 胎土密	
17	施釉陶器	角皿	1区	溝180	長辺8.9 短辺7.1	2.2	3.5	80	5Y8/2灰白 釉2.5Y8/1灰白 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	京焼
18	施釉陶器	蓋	1区	溝180	15.6	3.8		20	10YR5/2灰黄褐 釉7.5Y4/3暗オリーブ 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	京焼
19	施釉陶器	土瓶	1区	溝180	7.3	13.6	9.6	80	5YR5/4こぶい赤褐 胎土密 φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含	京焼
20	土師器	皿	1区	土坑127	7.0	1.0		25	5YR7/6橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含	
21	土師器	皿	1区	土坑127	7.2	1.3		25	7.5YR7/4こぶい橙 胎土やや粗 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	
22	土師器	皿	1区	土坑127	7.2	1.1		50	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
23	土師器	皿	1区	土坑127	9.6	1.7		60	7.5YR8/4浅黄橙 胎土やや粗 φ4.5mm以下の長石・チャート・石英含	
24	焼締陶器	壺	1区	土坑127	8.1	7.1	4.3	85	5YR4/4こぶい赤褐 胎土密	備前系
25	磁器	蓋	1区	土坑127	9.0	2.5	5.1	90	5Y8/1灰白 釉10Y8/1灰白 胎土密 微砂粒少量含	肥前系染付 見込みに笠文
26	磁器	筒形椀	1区	土坑127	8.0	6.3	4.0	90	N8/0灰白 釉7.5GY8/1明緑灰 胎土密	肥前系染付 氷裂文に菊花散らし
27	磁器	椀	1区	土坑127	10.3	5.4	4.2	100	N8/0灰白 釉7.5GY8/1明緑灰 胎土密 微砂粒少量含	肥前系染付 梅樹文
28	磁器	椀	1区	土坑127	10.5	5.3	3.6	100	5GY8/1灰白 胎土密	肥前系染付 ねじ花文
29	磁器	鉢	1区	土坑127	13.1	4.6	8.7	50	N8/0灰白 釉7.5GY8/1明緑灰 胎土密	肥前系染付 雲龍文 輪花

掲載 番号	器種	器形	調査 区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調・胎土など	備考
30	磁器	鉢	1区	土坑127	20.2	6.8	11.6	80	2.5GY明オリブ灰 釉7.5GY8/1明緑灰 胎土密	肥前系染付 焼継あり
31	施釉陶器	合子蓋	1区	土坑127	10.1	2.2		100	2.5Y8/2灰白 胎土密	京焼
32	施釉陶器	合子身	1区	土坑127	7.4	2.6	7.0	100	2.5Y6/2灰黄 胎土密	京焼
33	施釉陶器	皿	1区	土坑127	20.7	3.5	9.8	40	5Y8/3淡黄 胎土密 微砂粒少量含	京焼
34	土師質土器	花塩壺	1区	土坑127	6.2	3.6	7.7	100	2.5Y8/2灰白 胎土密 微砂粒少量含	伏見・深草
35	土師質土器	風炉	1区	土坑127	16.8	15.0	16.5	90	2.5YR5/8明赤褐 胎土密	産地不明
36	輸入磁器	皿	1区	第3面 遺構検出中	—	(3.4)	—	破片	10YR8/3浅黄橙 胎土密	華南三彩
37	輸入磁器	皿	1区	石列142	—	(1.8)	—	破片	5Y7/2灰白 胎土密	青磁
38	施釉陶器	鉢	1区	土坑73	11.3	3.5	9.9	90	2.5Y6/3にぶい黄 釉N8/1灰白 胎土密	産地不明
39	土師器	皿	1区	土坑109	5.8	1.4		80	7.5YR7/6橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
40	磁器	仏飯器	1区	土坑109	8.5	6.5	4.5	60	N8/0灰白 胎土密	肥前系染付
41	施釉陶器	花入れ	1区	土坑109	10.0	15.3	5.5	60	10YR8/2灰白 釉2.5Y6/3にぶい黄 胎土密	京焼
42	土師器	皿	1区	埋壘108	7.7	1.3		80	2.5Y7/3浅黄 胎土密 φ1mm以下の長石・チャート・石英含	
43	施釉陶器	灯明皿	1区	埋壘108	6.6	1.5		70	2.5Y7/2灰黄 釉5Y6/2灰オリブ 胎土密	京・信楽系
44	施釉陶器	灯明皿	1区	埋壘108	9.0	1.8		100	5Y7/2灰白 釉5Y6/2灰オリブ 胎土密	京・信楽系
45	施釉陶器	油受皿	1区	埋壘108	6.7	1.4		50	7.5Y8/1灰白 釉7.5Y7/1灰白 胎土密	京・信楽系
46	焼締陶器	甕	1区	埋壘108	—	(49.1)	18.0	50	2.5Y8/1灰白 釉2.5Y3/1暗赤灰 胎土密 φ8.0mm以下の礫・長石・石英・チャート含	信楽
47	瓦質土器	甕	1区	埋壘209	55.0	53.5	26.0	70	2.5Y5/1黄灰 胎土密 φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含	大和
48	土師器	皿	1区	土坑175	5.2	1.3		40	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ3mm以下の長石・チャート・石英含	
49	土師器	皿	1区	土坑175	5.2	1.1		25	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
50	土師器	皿	1区	土坑175	5.2	1.1		50	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含	
51	土師器	皿	1区	土坑175	5.2	1.1		50	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
52	土師器	皿	1区	土坑175	5.2	1.2		50	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
53	焼締陶器	甕	1区	埋壘80	—	(33.3)	18.5	70	5YR3/4暗赤褐色 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	信楽
54	磁器	小椀	1区	第1面 遺構検出中	8.2	3.8	3.0	50	N8/0灰白 釉10Y8/灰白 胎土密	瀬戸・美濃系 見込みに「本」
55	磁器	小椀	1区	土坑26	—	—	3.4	底部のみ	N8/0灰白 釉10Y8/灰白 胎土密	清水焼 高台内に「幹山精製」
56	土師器	皿	2区	土坑15	9.9	(1.8)		20	5YR7/6橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
57	土師質土器	でんぼ	2区	土坑15	8.3	2.6	6.0	90	2.5Y8/2灰白 胎土密 φ1mm以下の長石・チャート・石英含	
58	磁器	椀	2区	墓坑12	10.0	6.1	4.3	40	N7/0灰白 釉7.5Y6/1灰 胎土密	肥前系染付 草花文

掲載 番号	器種	器形	調査 区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調・胎土など	備考
59	施釉陶器	筒形碗	2区	墓坑13	7.1	(8.2)		60	2.5YR8/3淡黄 釉7.5Y7/1灰白 胎土密	京焼
60	土師器	皿	2区	土坑11	9.8	1.5		100	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
61	土師質土器	胞衣壺蓋	2区	土坑11	14.5	2.1		90	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英・雲母含	
62	土師質土器	胞衣壺身	2区	土坑11	11.5	7.5	14.0		7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
63	土師質土器	火消し壺蓋	2区	土坑11	26.6	3.6		80	10YR7/3にぶい黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子・雲母含	
64	土師質土器	火消し壺身	2区	土坑11	22.0	23.5	24.7	70	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ3mm以下の長石・チャート・赤色粒子含	楠描波状文
65	焼締陶器	甕	2区	土坑7	63.2	67.7	23.0	60	2.5YR4/3にぶい赤褐 胎土密 φ5mm以下の石英含	信楽
66	土師器	皿	2区	石列6	9.4	1.5		20	10YR8/2灰白 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
67	土師器	皿	2区	土坑5	10.9	(1.7)		20	5YR7/6橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
68	土師質土器	でんぼ	2区	第2面遺構検出中	7.6	2.4	5.1	50	2.5YR8/2灰白 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
69	土師質土器	でんぼ	2区	第2面遺構検出中	10.1	3.0	7.0	30	2.5YR8/2灰白 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャート・石英含	
70	須恵器	杯B	3区	第VI層	—	(2.5)	9.0	底部20	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	平安時代
71	土師器	皿	3区	土坑5	5.1	1.0		100	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
72	土師器	皿	3区	土坑5	5.2	1.2		100	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
73	土師器	皿	3区	土坑5	5.2	1.1		100	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
74	土師器	皿	3区	土坑5	5.2	1.0		100	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
75	土師器	皿	3区	土坑5	5.6	1.1		100	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含、φ5mm礫含	
76	土師器	皿	3区	土坑5	5.8	1.1		100	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
77	土師器	皿	3区	土坑5	8.1	1.6		90	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
78	土師器	皿	3区	土坑5	8.1	1.8		90	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
79	土師器	皿	3区	土坑5	8.4	1.6		90	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
80	土師器	皿	3区	土坑5	8.4	1.7		90	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
81	土師器	皿	3区	土坑5	8.4	1.7		100	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
82	土師器	皿	3区	土坑5	8.4	1.6		90	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
83	土師器	皿	3区	土坑5	10.6	1.7		25	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
84	土師器	皿	3区	土坑6	5.6	1.8		100	2.5YR7/4淡赤橙 胎土密 φ1mm以下の長石・チャート・石英含	
85	土師器	皿	3区	土坑6	8.8	1.7		50	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
86	土師器	皿	3区	土坑6	10.8	2.0		50	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	
87	土師器	皿	3区	土坑6	10.4	1.7		60	10YR8/2灰白 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子含	

掲載 番号	器種	器形	調査 区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調・胎土など	備考
88	施釉陶器	椀	3区	土坑6	9.7	7.6		70	2.5Y6/3にぶい黄 釉2.5Y4/3オリーブ褐 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含	肥前系 天目
89	土師器	皿	3区	土坑7	5.9	1.2		100	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英 ・チャート・雲母・赤色粒子含	
90	土師器	皿	3区	土坑7	10.5	2.3		30	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英 ・チャート・雲母含	
91	土師器	皿	3区	土坑7	10.7	2.2		30	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英 ・チャート・雲母・赤色粒子含	
92	土師質土器	焼塩壺	3区	土坑7	5.2	8.9	4.0	100	10YR6/6橙色 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャ ート・赤色粒子含	堺系
93	磁器	香炉	3区	土坑7	11.5	(7.7)	10.0	25	N8/0灰白 釉5GY7/1明オリーブ灰 胎土密	肥前系青磁
94	磁器	大皿	3区	土坑7	27.8	5.9	14.7	25	N8/0灰白 釉10GY6/1緑灰 胎土密	肥前系青磁
95	土師器	皿	3区	石列3	5.3	1.3		50	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・ チャート・石英含	
96	土師器	皿	3区	石列3	5.5	1.2		50	7.5YR8/4浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・ チャート・石英含	
97	土師器	皿	3区	石列3	8.3	1.6		25	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・ チャート・石英含	
98	土師器	皿	3区	石列3	10.5	(1.9)		20	10YR8/3浅黄橙 胎土密 φ0.5mm以下の長石・ チャート・石英・赤色粒子含	
99	土師器	皿	3区	石列3	10.8	2.1		60	10YR8/2灰白 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャ ート・石英含	
100	土師器	皿	3区	石列3	10.9	1.9		90	10YR8/2灰白 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャ ート・石英含	
101	土師器	皿	3区	石列3	11.5	(1.6)		20	10YR8/2灰白 胎土密 φ0.5mm以下の長石・チャ ート・石英含	
102	施釉陶器	皿	3区	石列3	11.0	2.0		25	5YR6/6橙色 釉5YR5/8明赤褐 胎土密 φ1mm以 下の長石・チャート・石英含	全面施釉
103	磁器	椀	3区	石列3	8.3	4.5	3.1	50	5Y8/1灰白 釉2.5GY6/1オリーブ灰 胎土密	肥前系染付 桐文
104	磁器	椀	3区	石列3	8.6	4.8	3.3	60	2.5Y8/1灰白 釉2.5GY6/1オリーブ灰 胎土密	肥前系染付 桐文
105	施釉陶器	小壺	3区	石列3	—	(5.3)	3.9	90	2.5Y8/4淡黄 釉2.5Y7/6明黄褐 胎土密	京焼か
106	施釉陶器	香炉	3区	石列3	11.0	7.5	10.0	60	5YR7/6橙 釉2.5YR4/6赤褐 胎土密 φ0.5mm以 下の長石・チャート・石英含	産地不明
107	施釉陶器	盤	3区	石列3	17.8	7.5		30	2.5Y8/4淡黄 釉5Y7/6黄 胎土密	瀬戸・美濃系

表6 瓦類観察表

掲載番号	種類	調査区	出土遺構	形態・手法の特徴	色調・胎土	焼成	二次被熱
瓦1	軒丸瓦	1区	土坑358	珠文付右巻き巴文。丸瓦部外形、外面は縦ナデでヘラミガキを施す。裏面に鉄線切り離し痕と布目が残る。玉縁部は横ナデ。裏面に石はぜ有、釘穴1箇所あり。外径推定14.3cm。	N5/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・雲母、φ10mmの礫含	良	なし
瓦2	軒丸瓦	1区	瓦溜り238	右巻き三巴文で高く盛り上がる。瓦当面中心はずれに陽刻で「+」字の記号印。瓦当面にキラコ多く付着。瓦当下半はナデ、裏面ナデ、瓦当周縁外端を面取り。外径14.3cm。	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦3	軒丸瓦	1区	土坑110	菊花文。高く盛り上がる凸弁、おそらく十六葉一重菊。ボタン状中房。瓦当裏面はナデ。瓦当下半はナデ。裏面ナデ、瓦当周縁外端を面取り。丸瓦部裏面に内叩き痕。外径14.4cm。	N5/0灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・黒色粒子含	良	なし
瓦4	軒丸瓦	1区	瓦溜り86	菊花文。凸弁一重菊。間弁は三角形。中房に五弁花文。丸瓦部中央に釘穴1箇所あり。瓦当周縁外端を面取り。丸瓦部外面はナデ、裏面は鉄線切り離し痕と布目が残る。外径推定20cm。	10YR7/4にぶい黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	やや不良	あり
瓦5	軒丸瓦	1区	土坑110	単弁八葉蓮華文、単弁八弁の間弁が巡る。弁の中央に稜線。中房の連子は欠損があり、数不明。瓦当下半はナデ、裏面ナデ。外径10.5cm。	N5/0灰 胎土密 φ5mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦6	棟込瓦	1区	路面139上面	菊花文、凹弁8葉一重菊。ボタン状中房。瓦当面にキラコ付着。瓦当部下半、裏面はナデ。さし部外面は縦ナデ、裏面は未調整。外径6.6cm。	N6/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	一部あり
瓦7	棟込瓦	1区	路面139上面	菊花文、凹弁十葉一重菊。ボタン状中房。瓦当面にキラコ付着。瓦当部下半、裏面はナデ。さし部は外面裏面ともナデ。外径5.9cm。さし部完形で長さ6.9cm。	N6/0灰 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦8	棟込瓦	1区	瓦溜り86	菊花文、凹弁八葉一重菊。ボタン状中房。瓦当部下半、裏面はナデ。さし部欠損。	2.5Y8/3淡黄 胎土密 φ1mm以下の長石・石英含	やや不良	あり
瓦9	棟込瓦	1区	路面139上面	菊花文、凹弁八葉一重菊。ボタン状中房。さし部外面、裏面ともケズリのちナデ。外径8.1cm。さし部完形で外面は縦ナデ、裏面は未調整、長さ10.4cm。	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦10	軒平瓦	1区	溝180	外行2転唐草文、複線で表現。中心飾りは花文。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦11	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	外行3転唐草文、中心飾りは上向き五葉文。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。磨滅激しい。	2.5Y4/1黄灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦12	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	滴水瓦。外行1転唐草文と子葉、中心飾りは4葉文の下に珠点。周縁の外側上面は面取り。瓦当部右脇縁を面取りする。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。	10YR7/4にぶい黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	やや不良	あり
瓦13	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	外行唐草文と子葉、中心飾りは橘。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面横ナデ、裏面未調整。瓦28と同文。	10YR7/4にぶい黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	やや不良	あり
瓦14	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	外行1転唐草文と子葉、中心飾りは橘。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。燻し強。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含	良	なし
瓦15	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	土坑88	唐草文。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。二次被熱強く赤褐色を呈す。左周縁に1行で「瓦工大坂甚兵衛」と記す人名印を横向けに押す。	5YR6/6橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦16	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	土坑88	外行2転唐草文、中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側上面は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。右脇縁を面取り。右周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。燻し強。瓦20と同文。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦17	隅軒瓦	1区	瓦溜り86	切隅瓦。屋根の角の部分に使用するため、左脇縁下部を円弧状に仕上げ、平瓦部は三角形となる。外行2転唐草文。中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側上面は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。	N5/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし

掲載番号	種類	調査区	出土遺構	形態・手法の特徴	色調・胎土	焼成	二次被熱
瓦18	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	土坑88	外行2転唐草文、中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側上面は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。右脇縁を面取り。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。右周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。瓦19と同文。	N5/0灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦19	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	外行2転唐草文、中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側上面は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。右脇縁を面取り。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。右周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。瓦18と同文。	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含	良	一部あり
瓦20	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	外行2転唐草文、中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。右脇縁を面取り。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。平瓦部に釘穴1箇所。右周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。瓦当面にキヤコ付着。瓦16と同文。	N5/0灰 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦21	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	外行2転唐草文。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。右脇縁を面取り。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。右周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。キヤコ多く付着。	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦22	隅軒瓦	1区	土坑88	切隅瓦。屋根の角の部分に使用するため、平瓦部を三角形に仕上げる。外行2転唐草文、中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。左周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。キヤコ多く付着。	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦23	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	外行唐草文、中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。キヤコ付着。	10YR7/4にぶい黄橙 胎土密 φ4mm以下の長石・石英・チャート含	やや不良	あり
瓦24	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	路面139 上面	外行2転唐草文、中心飾りは5葉文の下に珠点。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面裏面ナデ。左周縁に円形の圏線内に「+」字の記号印を押す。	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ4mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦25	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	瓦溜り86	立浪文。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。右周縁に隅丸長方形の圏線内に2行で「大仏瓦師/井上十郎瓦窯」と記す人名印を押す。刻印上部には横書きで「御用」か。瓦34の刻印と同印。	10YR7/3にぶい黄橙 胎土密 φ5mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦26	板塀瓦	1区	溝180	平板状の瓦に棧を付けた平瓦。軒瓦部の垂れが水平で唐草文が付く。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面、側縁、ナデ、裏面未調整。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦27	軒棧瓦	1区	瓦溜り86	軒丸部は珠文付き右巻き巴文。軒平部は外行2転唐草文と子葉、中心飾りは1葉に珠点。瓦当周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。平瓦部外面・裏面ともナデ。キヤコ多く付着。燻し強。	N3/0暗灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦28	軒棧瓦	1区	溝180	軒丸部は珠文付き右巻き三巴文、軒平部は外行2転唐草文と子葉、中心飾りは橘。瓦当周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。丸瓦部外面縦ナデ、裏面ナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。軒平部は瓦13と同文。	N4/0灰 胎土密 φ1.5mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦29	軒棧瓦	1区	瓦溜り238	軒丸部は珠文付き右巻き三巴文。軒平部は文様不明。瓦当周縁の外側は面取り。瓦当外縁・裏面ナデ。丸瓦部外面は縦ケズリ後、ナデ。	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含	良	一部あり
瓦30	軒棧瓦	1区	瓦溜り86	軒丸部は右巻き三巴文。軒平部は外行2転唐草文。中心飾りは橘。瓦当周縁の外側は面取り。瓦当外縁・裏面ナデ。丸瓦部外面は縦ケズリのちナデ、平瓦部外面ナデ、裏面未調整。	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦31	軒棧瓦	1区	溝180	軒丸部右巻き三巴文。軒平部は無文。瓦当外縁・裏面ナデ。丸瓦部外面は縦ケズリのちナデ、平瓦部外面ナデ、裏面未調整。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦32	軒棧瓦	1区	瓦溜り86	滴水瓦。軒丸部は右巻き巴文。軒平部は外行1転唐草文と子葉。中心文は4葉文の下に珠点。周縁の外側上面は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。丸瓦部外面縦ナデ。平瓦部外面はナデ、裏面は未調整。	N5/0灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦33	軒棧瓦	1区	瓦溜り86	軒丸部欠損。軒平部立浪文。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。厚みがある。平瓦部上面はナデ。キヤコ付着。	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ4mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦34	軒棧瓦	1区	瓦溜り86	軒丸部珠文付き右巻き巴文。軒平部立浪文。右脇縁を面取り。平瓦部裏面に櫛目あり。右周縁に隅丸長方形の圏線内を2分割して横書きで「御用」、縦書き2行で「大仏瓦師/井上十郎瓦窯」と記す人名印を押す。瓦25の刻印と同文字。	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	一部あり

掲載番号	種類	調査区	出土遺構	形態・手法の特徴	色調・胎土	焼成	二次被熱
瓦35	角瓦	1区	瓦溜り86	屋根の角の部分に使用する。丸瓦当面と平瓦当面は45度傾く。軒丸部は右巻き三巴文。左側の軒平部は外行2転唐草文、中心飾りは4葉文の下に珠点。周縁の外側は面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部上面はナデ、裏面は未調整。	N5/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦36	丸瓦	1区	瓦溜り238	粘土板1枚作りで、凹面に鉄線切り離し痕と布目が残る。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部は横ナデ。	N5/0灰 胎土密 φ1mm以下の長石・石英含	良	なし
瓦37	丸瓦	1区	瓦溜り238	粘土板1枚作りで凹面に鉄線切り離し痕と布目残り、布には抜き縄痕跡が明瞭に付く。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部は横ナデ。	N5/0灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦38	隅瓦	1区	瓦溜り86	隅平瓦の一部。三角形に仕上げる。平板状の瓦に棧を付ける。上面、側面を平坦にする。	10YR8/4浅黄橙 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦39	隅瓦	1区	瓦溜り86	隅平瓦の一部。三角形に仕上げる。2箇所釘孔がある。	7.5YR6/6橙 胎土密 φ5mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦40	棟端飾り瓦	1区	瓦溜り238	鬼瓦の珠文部。連珠は円筒状の器具で押捺する。磨滅激しい。	7.5YR4/1褐灰 胎土密 φ0.5mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦41	棟端飾り瓦	1区	路面139 上面	鬼瓦の右半部。鬼面は欠損、耳と牙が残る。珠文は径約4cmの円筒状。側面に2行で「大佛瓦工／井上重良兵衛」と大きくヘラ描きする。	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦42	棟端飾り瓦	1区	瓦溜り86	菊花を彫刻する。花卉ごとに一筋の線刻を入れる。花芯は半球状で格子模様を線刻するなどして蕊を表現する。裏面に2行で「大仏瓦工・／井上十郎兵衛」とヘラ描きする。	2.5Y7/2灰黄 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦43	棟端飾り瓦	1区	瓦溜り86	飾瓦、蕨手の先端部。裏面にカキヤブリがある。	7.5YR7/4にぶい橙 胎土密 φ3.5mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦44	棟端飾り瓦	1区	瓦溜り86	菊の葉を彫刻する。葉脈を線刻する。裏面に径1cmの孔がある。裏面2箇所にヘラ書きがあるが、ごく一部のため、判読不能。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦45	棟端飾り瓦	1区	瓦溜り86	鬼瓦、鬼面の一部か。裏面には指頭圧痕が多く残る。	10YR6/3にぶい黄橙 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦46	棟端瓦獅子口	1区	瓦溜り86	獅子口の経の巻。右巻き三巴文で高く盛り上がる。丸瓦部は円筒状。外面はナデ、内面は未調整。丸瓦部裏面接合部にはキザミ目がある。	N4/0灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	一部あり
瓦47	棟端瓦獅子口	1区	瓦溜り86	獅子口の経の巻。菊花文。無周縁。瓦当面は平坦で線刻で花卉を表現する。外縁を摘み出して間弁とする。中房は五弁花文を取り付ける。瓦当目の裏面に接合のためのカキヤブリあり。丸瓦部は円筒状。外面はナデ、内面は未調整。地の部分にカキヤブリ。	N4/0灰 胎土密 φ6mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦48	棟端瓦獅子口	1区	瓦溜り86	獅子口の側面上部。山形の稜筋2条。地の部分にカキヤブリ。釘穴3箇所残る。経の巻上面に円形の圏線内に「+」字の記号印とその下方に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「大仏瓦工／井上十郎兵衛」（衛はくずし字）と記す人名印を押す。瓦57・58と同文字。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦49	面戸瓦	1区	路面139 上面	面戸瓦の中でも鏝面戸と呼ばれる種類。前面、側面はナデで平坦に仕上げる。裏面に上方で二つに分かれる突起が付く。突起根元に穿孔1箇所あり。突起貼付け時の指頭圧痕あり、貼付け後ナデ。	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含	良	一部あり
瓦50	棟瓦	1区	瓦溜り86	棟瓦、伏間瓦とも呼ばれる。平瓦に棧を付ける。接合部に櫛目がある。凸面に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「京大佛瓦師／西村彦右衛門」と記す人名印を押す。瓦51・52・53と同文字。	10YR7/2にぶい黄橙 胎土密 φ4mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦51	平瓦か熨斗瓦	1区	瓦溜り86	凸面に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「京大佛瓦師／西村彦右衛門」と記す人名印を押す。瓦50・52・53の刻印と同文字。強く二次被熱、赤褐色を呈す。	5YR7/6橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含	良	あり

掲載番号	種類	調査区	出土遺構	形態・手法の特徴	色調・胎土	焼成	二次被熱
瓦52	平瓦か 熨斗瓦	1区	瓦溜り86	凸面に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「京大佛瓦師／西村彦右衛門」と記す人名印を押す。瓦50・51・53と同文字。櫛目がある。	N5/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含	良	なし
瓦53	平瓦か 熨斗瓦	1区	瓦溜り86	凸面に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「京大佛瓦師／西村彦右衛門」と記す人名印を押す。瓦50・51・52と同文字。	10YR7/4にぶい黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦54	平瓦か 熨斗瓦	1区	瓦溜り86	凸面に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「佛瓦師／重良兵衛」と記す人名印を押す。櫛目がある。	10YR7/2にぶい黄橙 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含	良	あり
瓦55	平瓦か 熨斗瓦	1区	瓦溜り86	隅丸方形の圏線内に行書体文字「十」を表す文字印、平瓦か熨斗瓦の小口に押す。	N6/0灰～2.5Y7/2灰黄 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦56	丸瓦	1区	瓦溜り86	凸面はナデ。凹面に鉄線切り離し痕と布目が残る。凸面に隅丸長方形の圏線内に2行で「大佛瓦師／西村彦右衛門」と行書体で記す人名印を押す。	10YR7/4にぶい黄橙 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦57	棟端瓦 獅子口	1区	瓦溜り86	獅子口の側面上部。地の部分にカキヤブリ。釘穴1箇所残る。経の巻上面に円形の圏線内に「+」字の記号印とその下方に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「大仏瓦工／井上十良兵衛」（衛はくずし字）と記す人名印を押す。瓦48・58と同文字。	2.5Y6/1黄灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦58	棟端瓦 獅子口	1区	瓦溜り238	獅子口の側面上部。地の部分にカキヤブリ。釘穴1箇所残る。経の巻上面に円形の圏線内に「+」字の記号印とその下方に隅丸長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「大仏瓦工／井上十良兵衛」（衛はくずし字）と記す人名印を押す。瓦48・57と同文字。	N4/0灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦59	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	土坑62	唐草文。周縁の外側上面は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。平瓦部外面ナデ、裏面未調整。隅丸長方形の圏線内に行書体文字「平」を表す文字印、右周縁に上下逆に押す。	N3/0暗灰 胎土密 φ1mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子含	良	なし
瓦60	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	土坑52	滴水瓦。立浪文、飛沫は珠点で表現。周縁の外側は面取り。左脇縁を面取り。瓦当頸部凸面と裏面は横ナデ。平瓦部外面はナデ。	N4/0灰 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦61	軒平瓦か 軒棧瓦	1区	土坑54	立浪文。周縁の外側上面は面取り。瓦当頸部凸面と裏面はナデ。平瓦部外面、裏面ともナデ。左周縁に長方形の圏線内に2行で「平安城大佛任瓦師／西村彦右エ門尉」と押す。	N3/0暗灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦62	棟端 飾り瓦	1区	土坑54	菊花の蕾と葉を彫刻する。葉脈を線刻。裏面は平坦に作り、カキヤブリがある。二次被熱により全体が灰黄色を呈する。	2.5Y6/2灰黄 胎土密 φ3mm以下の長石・石英・チャート含	良	あり
瓦63	軒丸瓦	1区	土坑190	蓮華文。中房の周りに芯帯が巡る。蓮子数不明。複弁で蓮弁は盛り上がる。間弁は三角形。外区には珠文が密に巡る。丸瓦部外面は縦ケズリ。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て粘土を付加して接合。磨滅している。	N6/0灰 胎土密 φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦64	軒丸瓦	1区	第5面 遺構 検出中	蓮華文。中房は平坦で圏線が巡り、蓮子は1+6。単弁16弁で蓮弁は盛り上がる。子葉はなし。瓦当部裏面上端に溝を付け丸瓦部を挿入し粘土を付加して接合。磨滅している。	N4/0灰 胎土密 φ1.5mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦65	軒丸瓦	1区	第5面 遺構 検出中	蓮華文。中房は平坦で圏線が巡り、蓮子は1+6。複弁で子葉・間弁も凸線で表す。外区に珠文が巡る。磨滅している。	N4/0灰 胎土密 φ1.0mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし
瓦66	軒丸瓦	1区	堀245 下層	文字文。「妙」の文字の旁か。圏線が巡る。瓦当周縁ナデ。瓦当部裏面はナデ。丸瓦部外面は縦ナデ。	N3/0暗灰 胎土密 φ4mm以下の長石・石英・チャート含	やや 不良	なし
瓦67	軒丸瓦	3区	石列3	右巻き三巴文。中央1点と外区1点に孔を穿つ。穴の径は瓦当面で8mm、裏面で6mm。裏面には接合痕なく、全面に丁寧なナデを施し平坦に仕上げる。獅子口に釘か鉄線などで取り付けられたものか。	N4/0灰 胎土密 φ2mm以下の長石・石英・チャート含	良	なし

表7 土製品観察表

掲載番号	種類	調査区	出土遺構	法量(cm)	色調	製作技法	形態	備考
土1	泥面子 矢車文	1区	土坑110	径2.9~3.0、厚さ0.9	7.5YR7/3にぶい橙	型おこし	中実	裏面ナデ
土2	泥面子 「寅」の文字	2区	石列6	径3.1、厚さ0.9	5YR7/6橙	型おこし	中実	裏面ナデ
土3	泥面子 五三桐文	2区	第2面遺構検出中	径3.8、厚さ1.1	5YR8/4淡橙	型おこし	中実	裏面ナデ
土4	土人形 人物立像	2区	墓坑9	高さ7.2、幅2.9、厚さ2.1	7.5YR8/6浅黄橙	型あわせ	中空	表面に淡黄の釉を施す
土5	鳩笛	2区	第2面遺構検出中	高さ5.4、幅7.2、厚さ3.0	5YR8/2灰白	型あわせ	中空	完形

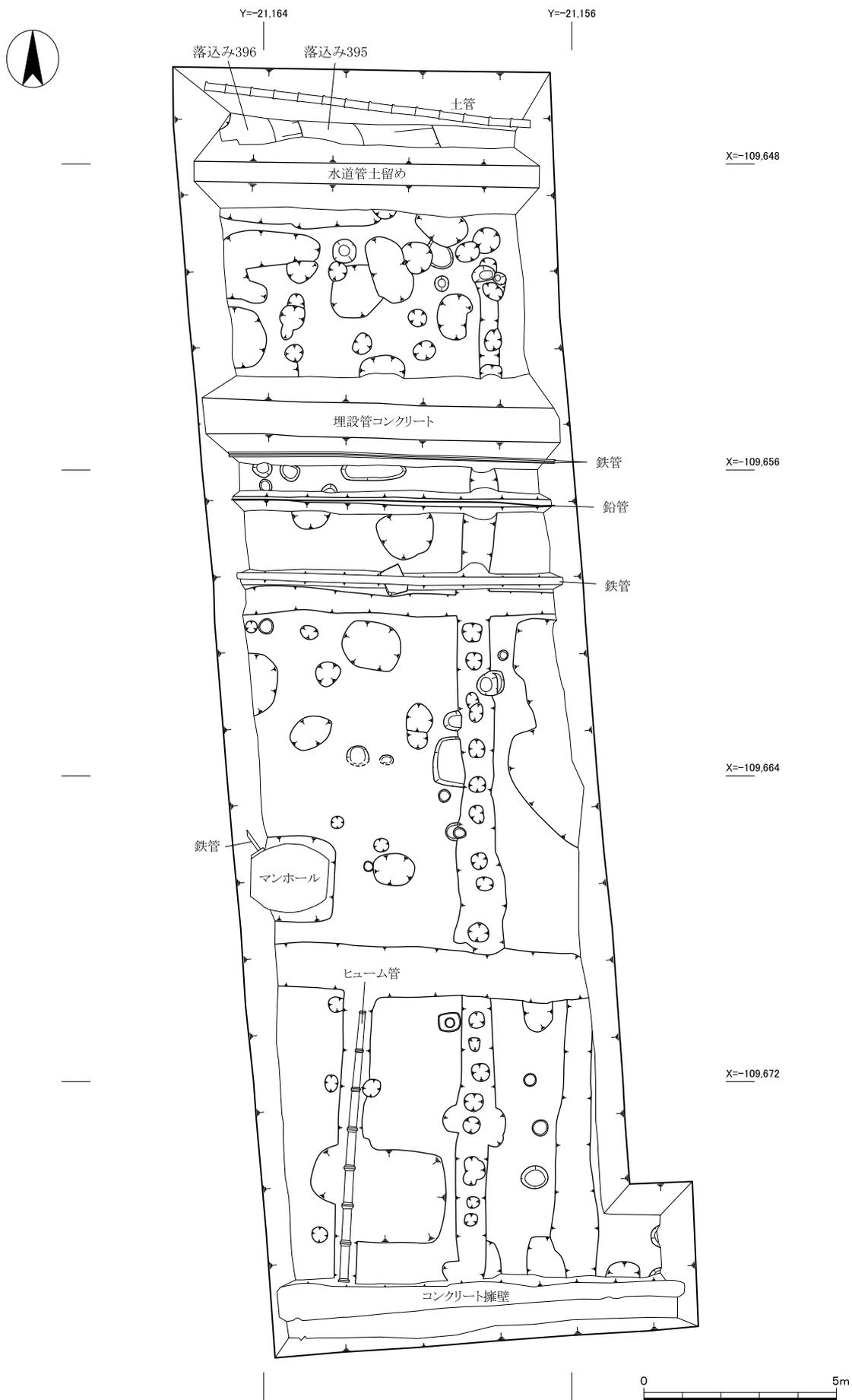
表8 石製品観察表

掲載番号	種類	調査区	出土遺構	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
石1	花立て	2区	第1面遺構検出中	高さ(13.4)、口径15.6	—	花崗岩	
石2	花立て	2区	石列6	高さ25.5、口径18.0、底径12.0	—	砂岩	
石3	墓標笠部	2区	第2面遺構検出中	高さ18.1、長辺47.8、短辺26.0	—	黒雲母花崗岩	位牌型
石4	一石五輪塔	2区	土坑14	高さ(22.2)、幅13.6、厚さ11.9	—	閃緑岩~斑礫岩	「華」「經」の他に文字はあるようだが、判読し難い
石5	一石五輪塔	2区	土坑14	高さ(35.5)、幅17.6、厚さ16.5	—	黒雲母花崗岩	
石6	一石五輪塔	1区	あげ土	高さ(45.8)、幅16.0、厚さ14.0	—	閃緑岩~斑礫岩	「寛永元年」(1624)の銘あり
石7	硯	1区	第3面遺構検出中	高さ(10.9)、幅5.4、厚さ(0.9)	38	頁岩~粘板岩	2次被熱を受ける
石8	硯	3区	土坑5	高さ13.1、幅6.9、厚さ2.1	342	頁岩~粘板岩	長方形

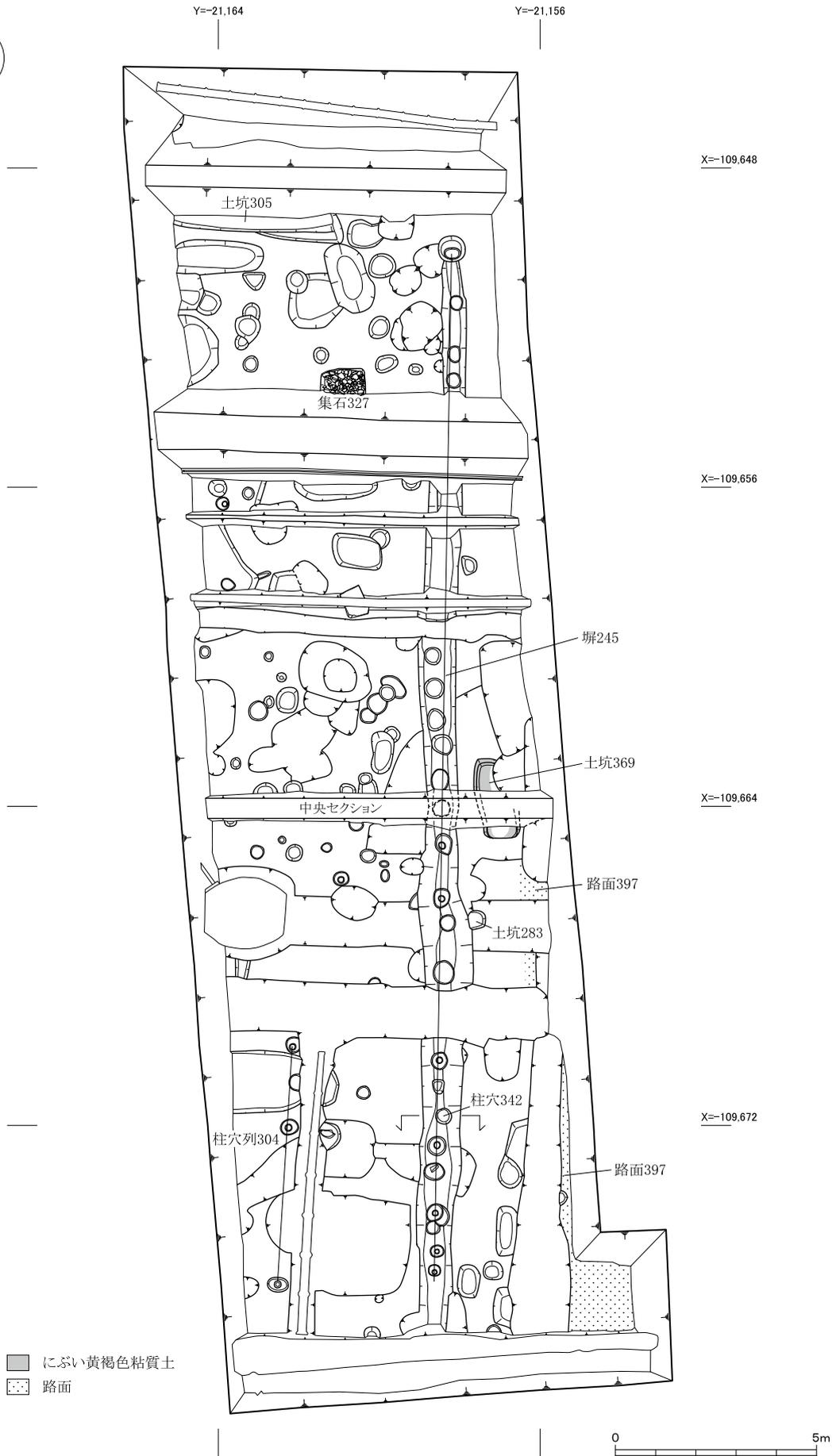
表9 銭貨観察表

掲載番号	種類	調査区	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	初鑄年	備考
				外径	厚さ	穿孔径			
銭1	祥符元寶	1区	土坑52	2.48	0.11	0.60	2.73	北宋(1009)	裏面無文無銘
銭2	元豐通寶(行書)	1区	第4面遺構検出中	2.42	0.11	0.71	2.55	北宋(1078)	裏面無文無銘
銭3	元豐通寶(篆書)	1区	土坑358	2.39	0.13	0.70	2.32	北宋(1078)	裏面無文無銘
銭4	寛永通寶(古)	1区	土坑52	2.51	0.11	0.65	2.84	寛永13年(1636)	裏面無文無銘
銭5	寛永通寶(文銭)	1区	第3面遺構検出中	2.55	0.13	0.58	3.15	寛文8年(1668)	裏面「文」銘
銭6	寛永通寶(新)	2区	墓坑10	2.50	0.11	0.65	(1.31)	寛文8年(1668)	裏面無文無銘
銭7	寛永通寶	1区	土坑118	(2.2)	0.13	0.52	(1.53)	寛永13年(1636)	裏面無文無銘

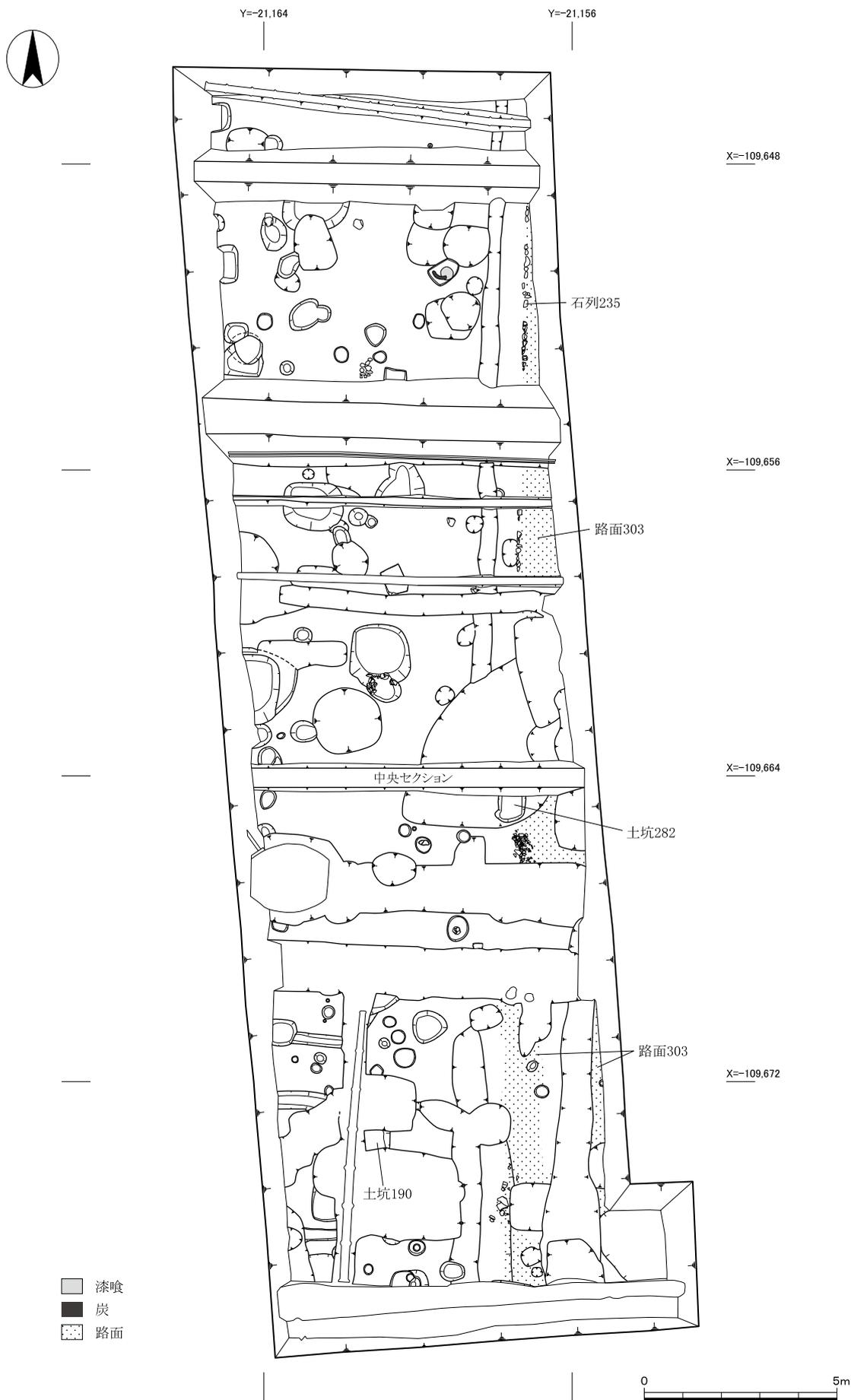
圖 版



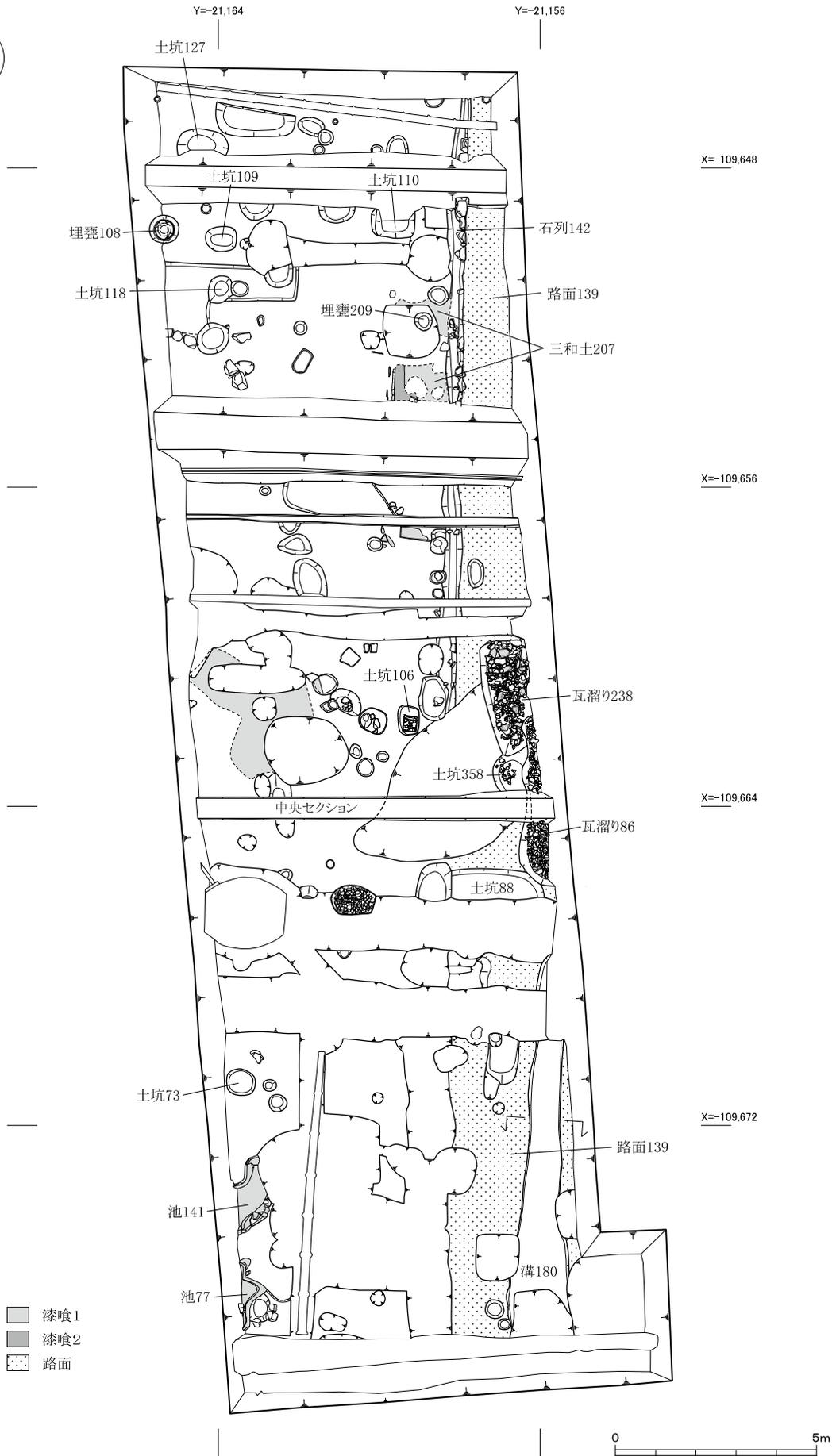
1区第6面遺構平面図 (1 : 150)



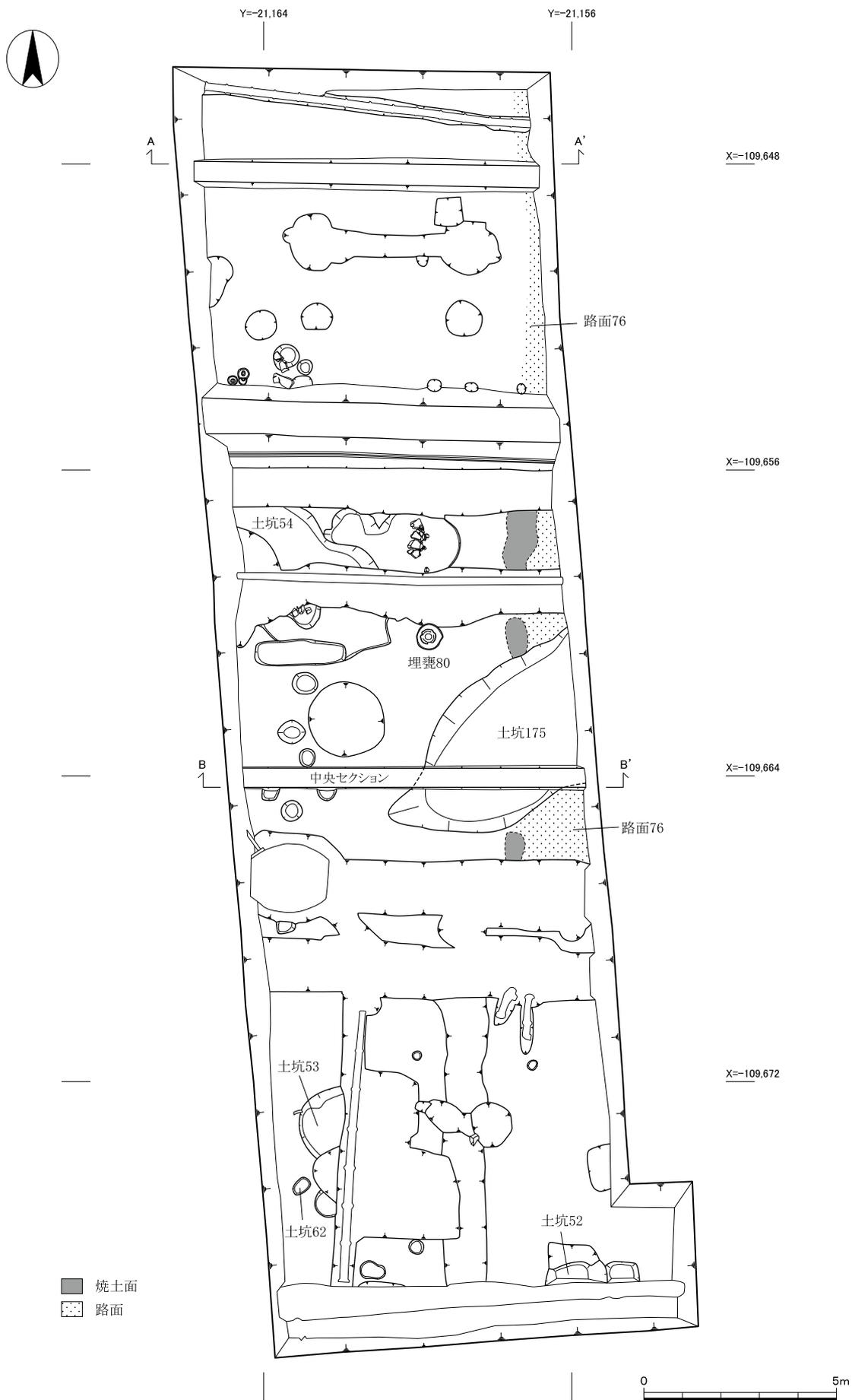
1区第5面遺構平面図 (1 : 150)



1区第4面遺構平面図 (1 : 150)



1区第3面遺構平面図 (1 : 150)



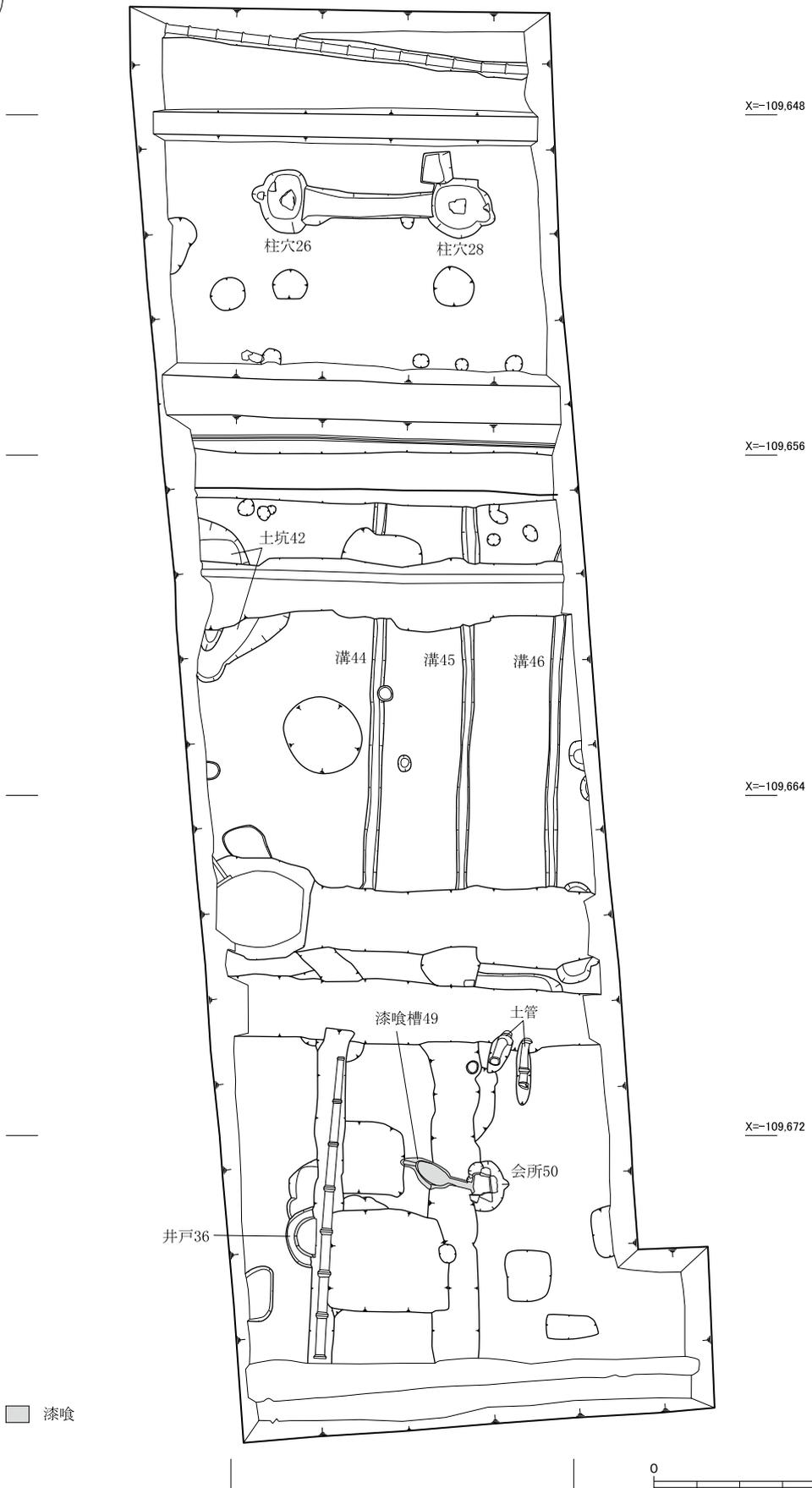
1区第2面遺構平面図 (1 : 150)

図版6
遺構



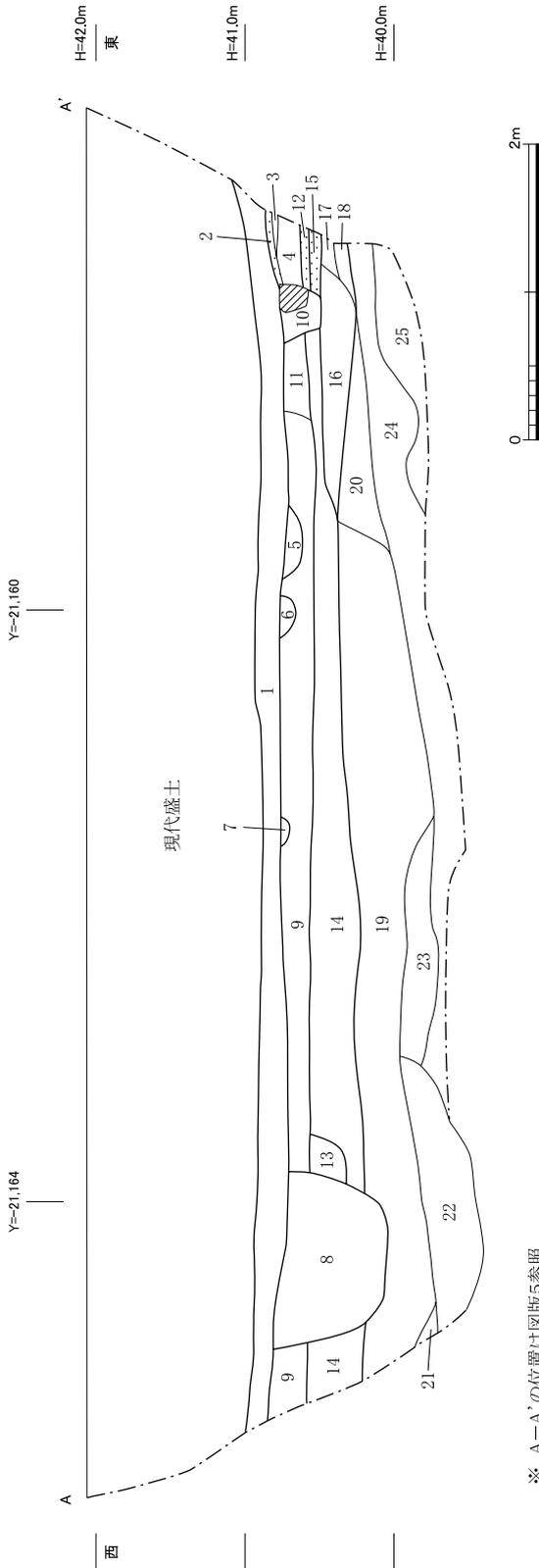
Y=-21.164

Y=-21.156



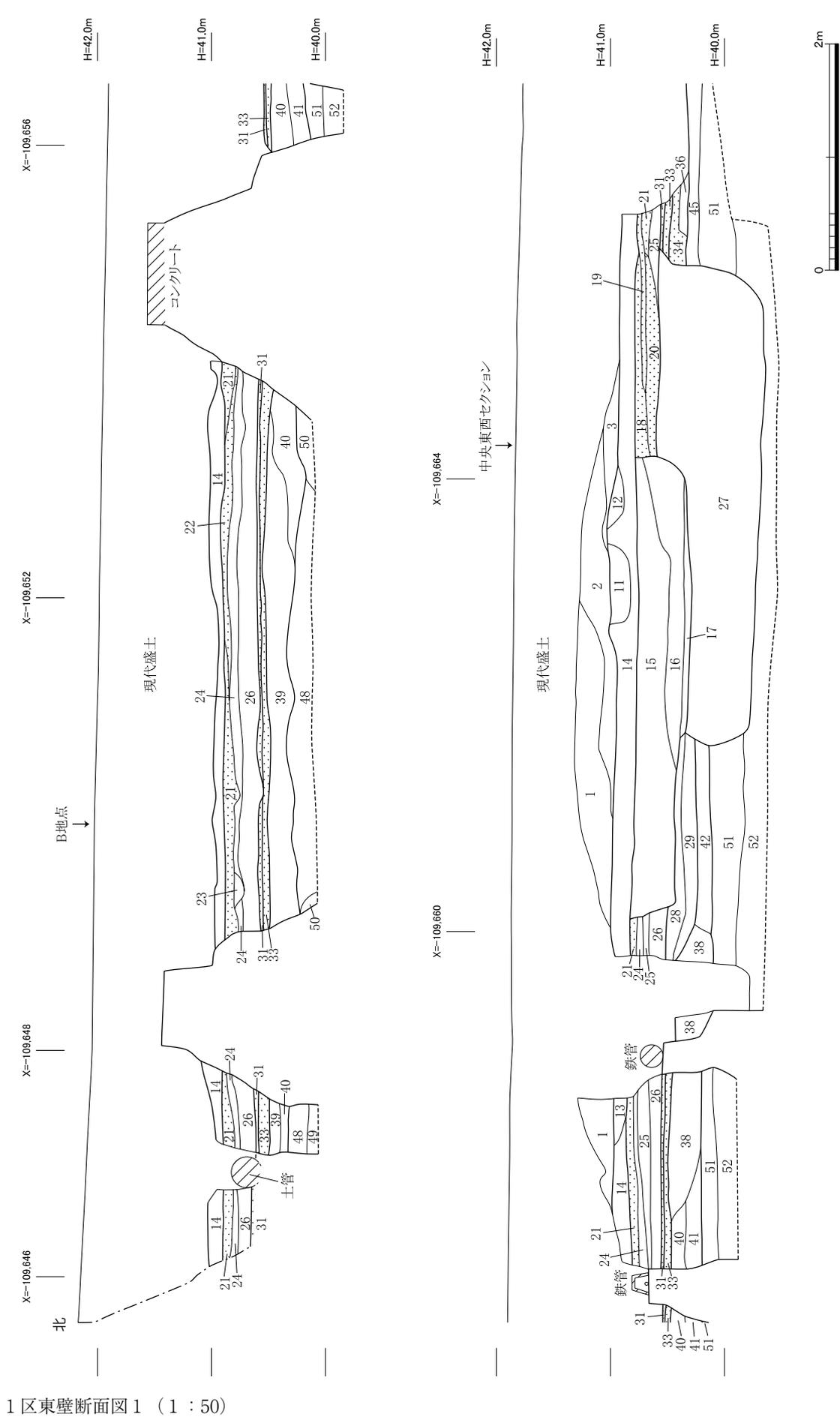
1区第1面遺構平面図 (1 : 150)

1区北部東西断面図 (1:50)

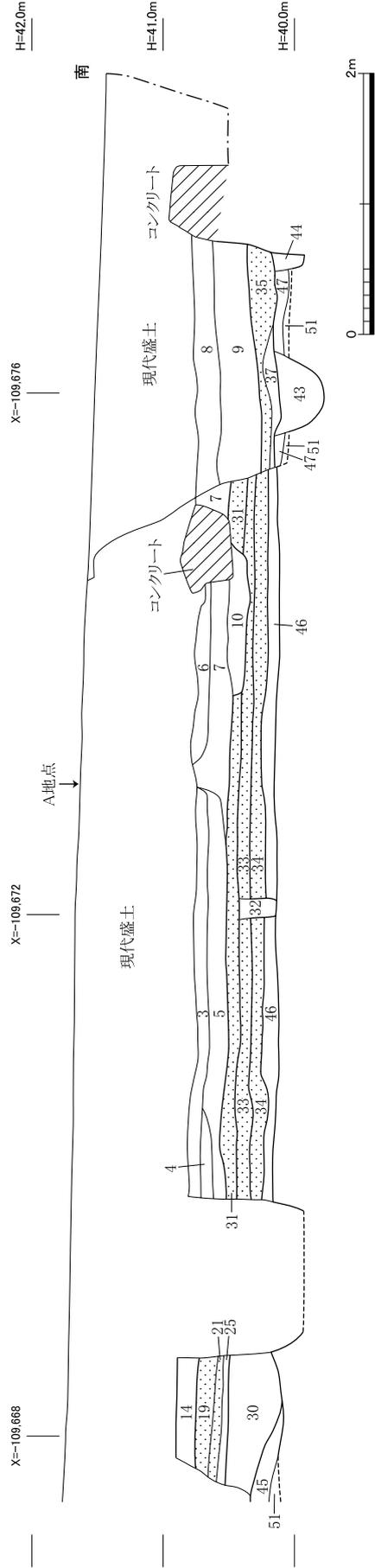


※ A-A'の位置は図版5参照

- <第1面>
- 1 10YR3/3暗褐色砂泥 φ4cm以下の礫少量 炭・土師片・漆喰片微量含む
- <第2面>
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ2cm以下の礫微量 焼土・炭少量含む(路面76)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ4cm以下の礫・漆喰片・瓦片少量含む
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ5cm以下の礫・焼土少量 瓦片多量含む(路面139上面)
- <第3面>
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥 φ3cm以下の礫・焼土・炭・瓦片少量含む
- 6 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ3cm以下の礫・焼土・炭少量含む
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ3~4cmの礫
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ12cm以下の礫・焼土・炭・瓦片少量含む(土坑127)
- 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ10cm以下の礫中量 焼土・炭少量含む
- 10 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ7cm以下の礫・焼土・炭少量含む(石列142掘形)
- 11 10YR4/4褐色砂泥 φ5cm以下の礫・焼土・炭少量含む
- 12 10YR3/2~3/3黒褐色砂泥 φ4cm以下の礫中量 焼土・漆喰片・炭微量含む(路面139)
- <第4面>
- 13 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ1cm以下の礫・焼土・炭少量含む
- 14 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ10cm以下の礫・焼土・炭少量含む
- 15 10YR4/3~4/4褐色砂泥 φ3cm以下の礫少量含む(路面303)
- <第5面>
- 16 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ5cm以下の礫少量含む
- 17 7.5YR3/3~4/3褐色砂泥 φ10cm以下の礫中量含む
- 18 10YR3/2~4/2黒褐色砂泥 φ粗砂 φ3cm以下の礫少量含む
- <第6面>
- 19 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ10cm以下の礫・土師片・瓦片少量含む(落込み395)
- 20 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ7cm以下の礫・焼土・炭少量含む
- 21 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ3cm以下の礫少量含む
- 22 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ3cm以下の礫・焼土・炭少量含む(落込み396)
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ3cm以下の礫・焼土・炭少量含む
- 24 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ粗砂 φ3cm以下の礫少量含む
- 25 10YR3/3暗褐色粗砂~砂礫 φ4cm以下の礫

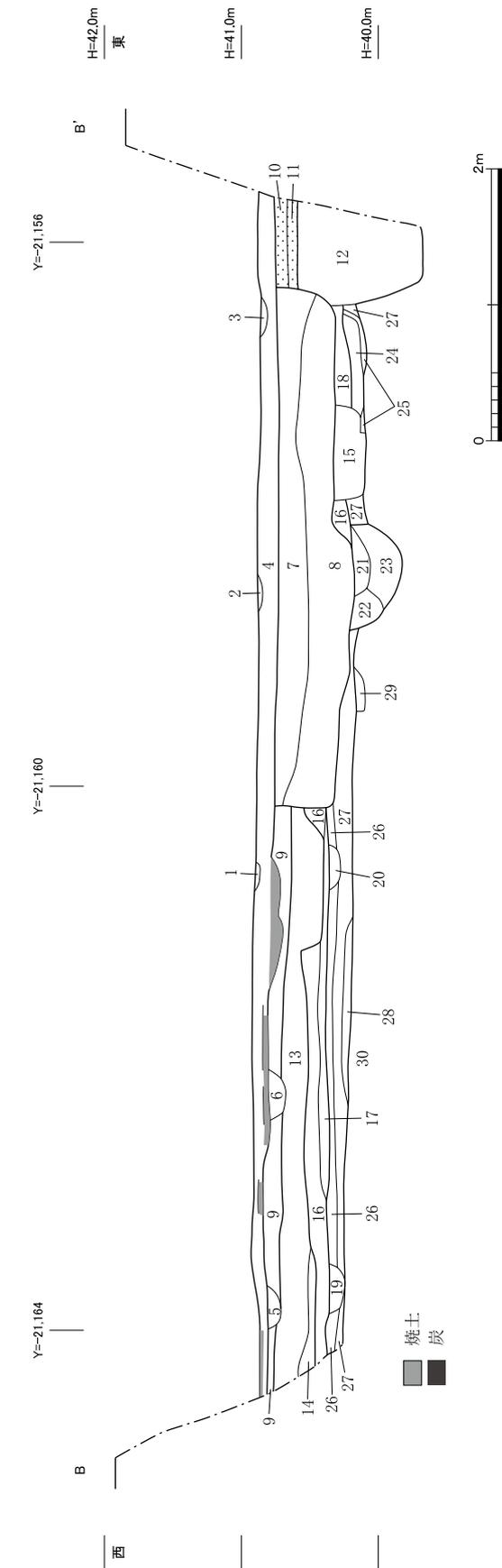


1区東壁断面図1 (1:50)



- <近代盛土>
- 1 10YR3/2黒褐色砂泥 焼土少量 炭・漆喰・小礫微量含む
 - 2 7.5YR2/3暗褐色砂泥 φ5cm以下の礫・炭・灰・焼土・漆喰片微量含む
 - 3 7.5YR3/2黒褐色砂泥 焼土中量 小礫少量含む
 - 4 7.5YR3/4暗褐色粗砂 φ4cm以下の礫中量含む
 - 5 10YR3/3暗褐色粗砂
 - 6 10YR4/4〜5/4にぶい、黄褐色砂泥 φ2cm以下の礫微量含む
 - 7 10YR4/4褐色砂泥 φ10cm以下の礫・炭少量 瓦片・土師片微量含む
 - 8 10YR4/3にぶい、黄褐色シルト(やや締まる) φ8cm以下の礫少量 炭・土師片微量含む
 - 9 10YR3/3〜3/4暗褐色砂泥 φ12cm以下の礫中量 漆喰片・瓦片・炭・土師片少量含む
 - 10 10YR3/2黒褐色砂泥 φ5cm以下の礫中量 炭少量 瓦片少量含む
- <第1面>
- 11 7.5YR2/3〜3/2黒褐色砂泥 φ4cm以下の礫少量 焼土・炭・土師片微量含む
 - 12 7.5YR2/2〜3/2黒褐色砂泥 焼土・炭・土師片微量含む
 - 13 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ2cm以下の礫少量 土師片・焼土含む(溝46)
 - 14 10YR3/3暗褐色砂泥 φ4cm以下の礫少量 炭・土師片・漆喰片微量含む
- <第2面>
- 15 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ5cm以下の礫少量 焼土・炭・漆喰・瓦片微量含む
 - 16 10YR3/2黒褐色砂泥 φ5cm以下の礫少量 焼土・炭・漆喰微量含む
 - 17 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ3cm以下の礫微量 炭・焼土多量含む
 - 18 10YR4/2〜4/3にぶい、灰黄褐色砂泥 φ3cm以下の礫少量含む
 - 19 10YR4/4褐色砂泥(均質)
 - 20 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ5cm以下の礫・焼土中量 炭少量含む
 - 21 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ2cm以下の礫微量 焼土・炭少量含む
 - 22 7.5YR3/3暗褐色砂泥 φ4cm以下の礫・土師片・瓦片・炭微量 焼土少量含む
 - 23 10YR3/3暗褐色砂泥 φ4cm以下の礫少量含む
 - 24 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ4cm以下の礫・漆喰片・瓦片少量含む
 - 25 10YR4/2灰黄褐色砂泥(砂質) φ3cm以下の礫少量 瓦片多量含む
 - 26 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ5cm以下の礫・焼土少量 瓦片多量含む(路面139上面)
- <第3面>
- 27 5YR4/4〜4/6赤褐色砂泥(焼土)+7.5YR2/1〜2/2黒色泥砂(炭含む) 炭・焼土中量 瓦多量含む(瓦溜り86)
 - 28 10YR6/6明黄褐色粘土 炭微量含む
 - 29 10YR3/2黒褐色砂泥(粗砂含む) φ20cm以下の礫・漆喰片中量 瓦多量含む (瓦溜り238)
 - 30 10YR4/3にぶい、黄褐色泥砂 φ15cm以下の礫中量〜多量 瓦片・陶器片少量 漆喰・炭・焼土微量含む(溝180)
 - 31 10YR3/2〜3/3黒褐色砂泥 φ4cm以下の礫中量 焼土・漆喰片・炭微量含む(路面139)
- <第4面>
- 32 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ10cm以下の礫多量含む
 - 33 10YR4/3〜4/4褐色砂泥 φ3cm以下の礫少量含む(路面303)
- <第5面>
- 34 10YR4/2灰黄褐色砂泥(締まる) φ6cm以下の礫微量含む
 - 35 10YR3/4暗褐色砂泥 φ6cm以下の礫中量 瓦片・炭・土師片少量含む (路面397)
 - 36 7.5YR3/3〜4/3褐色細砂 φ5cm以下の礫中量含む
 - 37 10YR3/3暗褐色砂泥 φ3cm以下の礫少量 土師片少量 炭微量含む
 - 38 10YR4/1〜4/2褐色泥砂〜粗砂 φ10cm以下の礫中量 瓦片微量含む
 - 39 7.5YR3/3〜4/3褐色泥砂〜粗砂 φ10cm以下の礫中量含む
 - 40 10YR3/2〜4/2黒褐色泥砂〜粗砂 φ3cm以下の礫少量含む
 - 41 10YR4/2〜5/2灰黄褐色細砂 φ4cm以下の礫少量含む
 - 42 7.5YR3/2黒褐色細砂〜粗砂 φ2cm大の礫中量含む
- <第6面>
- 43 10YR4/3にぶい、黄褐色微砂 φ10cm以下の礫・土師片微量含む
 - 44 10YR3/4暗褐色微砂 φ3cm以下の礫少量 土師片・炭微量含む
 - 45 10YR3/2〜3/3暗褐色細砂(泥砂混じり) φ4cm以下の礫微量含む
 - 46 10YR3/3暗褐色砂泥 φ10cm以下の礫中量 炭・土師片微量含む
 - 47 10YR3/3暗褐色微砂 φ5cm以下の礫中量含む
 - 48 10YR4/2灰黄褐色泥砂〜粗砂 φ3cm以下の礫少量含む
 - 49 10YR3/3暗褐色粗砂〜砂礫 φ4cm以下の礫少量含む
 - 50 10YR3/2黒褐色砂泥 φ3cm以下の礫中量含む
 - 51 10YR4/2〜4/3灰黄褐色砂礫 φ7cm以下の礫多量含む
 - 52 10YR4/2〜5/3灰黄褐色粗砂 φ12cm以下の礫中量含む

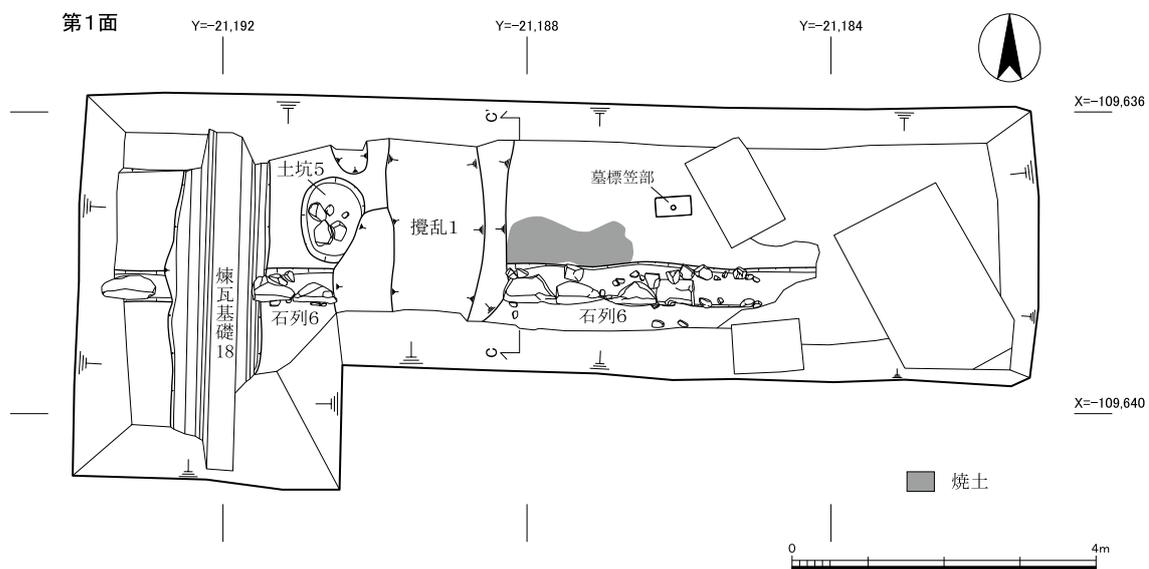
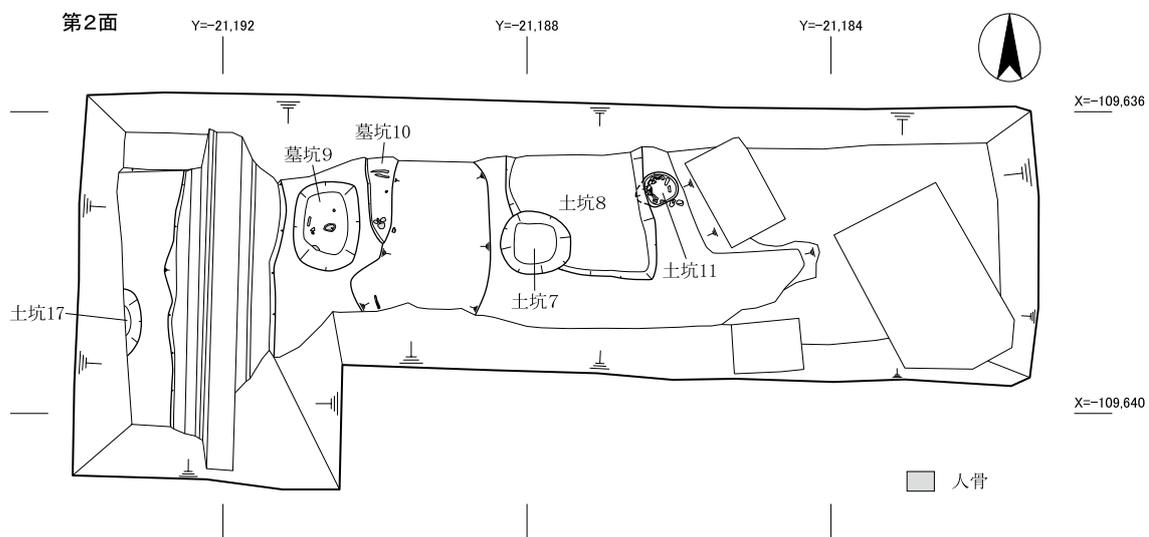
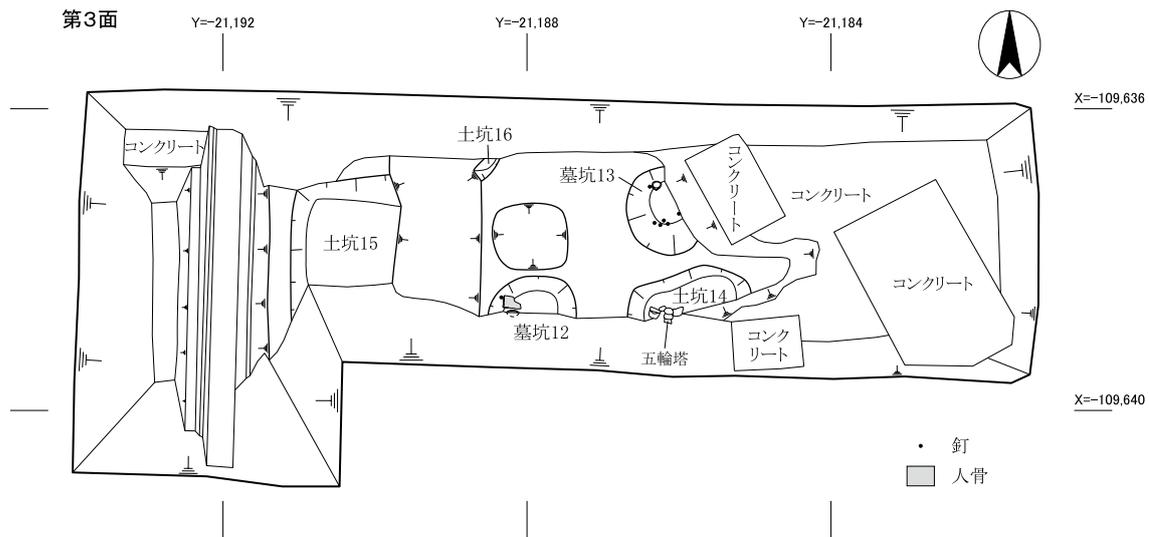
1 区東壁断面図2 (1:50)



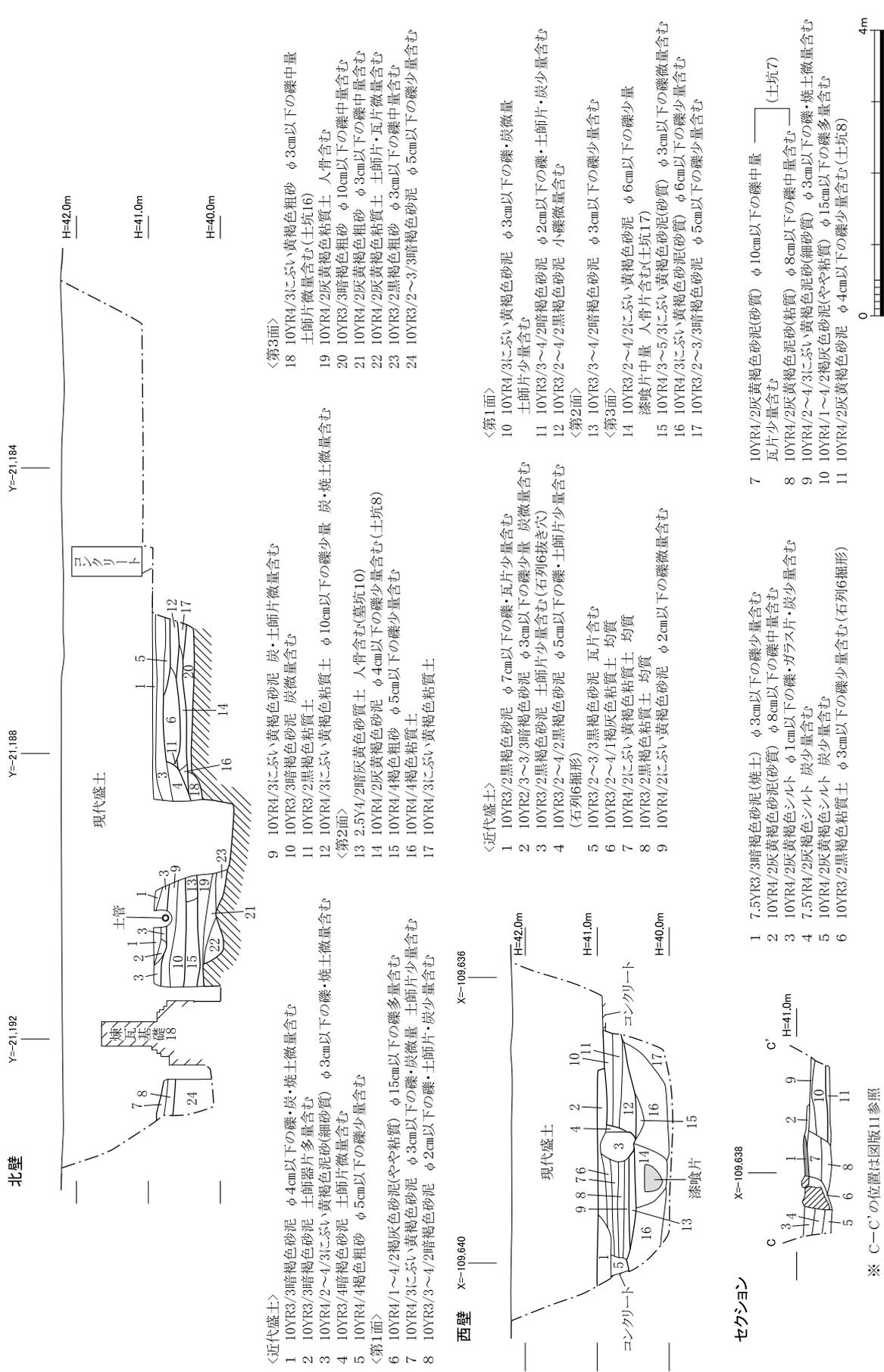
※ B-B' の位置は図版5参照

- <第1面>
- 1 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 3cm以下の礫少量 土師片・焼土含む(溝44)
 - 2 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 2cm以下の礫少量 土師片・焼土含む(溝45)
 - 3 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 2cm以下の礫少量 土師片・焼土含む(溝46)
 - 4 10YR3/3暗褐色砂泥 上面には7.5YR2/3極暗褐色砂泥 φ 3cm以下の礫・炭少量含む
西側で焼土層(5YR3/4暗赤褐色砂泥)及び炭層を含む
- <第2面>
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥 φ 4cm以下の礫少量含む
 - 6 7.5YR4/6褐色砂泥(焼けた漆喰)+10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 4cm以下の礫少量 漆喰片多量含む
 - 7 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 5cm以下の礫少量 焼土・炭・漆喰・瓦片微量含む (土坑175)
 - 8 10YR3/2黒褐色砂泥 φ 5cm以下の礫少量 焼土・炭・漆喰微量含む
 - 9 10YR3/3暗褐色砂泥(粗砂混じり) φ 10cm以下の礫・焼土少量 炭微量含む
 - 10 10YR4/2~4/3にぶい、灰黄褐色砂泥 φ 3cm以下の礫少量含む
 - 11 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 5cm以下の礫・焼土中量 炭少量含む (略面76)
- <第3面>
- 12 5YR4/4~4/6赤褐色砂泥(焼土)+7.5YR2/1~2/2黒色泥砂(炭含む) 炭・焼土中量 瓦多量含む(瓦溜986)
 - 13 10YR3/2黒褐色砂泥 φ 8cm以下の礫中量 焼土・漆喰片少量含む
 - 14 10YR2/2黒褐色砂泥
- <第4面>
- 15 10YR3/3~3/4暗褐色砂泥 φ 15cm以下の礫多量含む(土坑282)
 - 16 7.5YR3/3~10YR3/3暗褐色砂泥 φ 3cm以下の礫・焼土微量含む
 - 17 10YR4/2灰黄褐色粘質土 φ 4cm以下の礫・土師片含む
 - 18 10YR4/4褐色砂泥(粗砂混) φ 4cm以下の礫中量 瓦片微量含む
- <第5面>
- 19 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 3cm以下の礫・焼土微量含む
 - 20 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 3cm以下の礫微量含む
 - 21 10YR3/3暗褐色砂泥 φ 8cm以下の礫中量 炭・焼土微量含む
 - 22 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥φ粗砂 φ 4cm以下の礫中量含む (辨245)
 - 23 10YR3/2~4/2黒褐色砂泥(砂質) φ 6cm以下の礫少量含む
 - 24 10YR3/2~4/2黒褐色砂泥(砂混) φ 6cm以下の礫少量含む
 - 25 10YR4/4~5/4にぶい、黄褐色粘質土 φ 4cm以下の礫少量含む (土坑369)
 - 26 7.5YR4/3~4/4褐色砂泥 φ 5cm以下の礫・土師片微量含む
 - 27 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 φ 5cm以下の礫中量 焼土少量含む
 - 28 10YR3/3~4/3暗褐色砂泥 φ 2cm以下の礫少量含む
- <第6面>
- 29 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ 4cm以下の砂礫含む
 - 30 10YR3/2~4/1褐色粗砂~砂礫 φ 15cm以下の礫中量~多量含む(河川氾濫堆積層)

1区中央セクション断面図 (1:50)

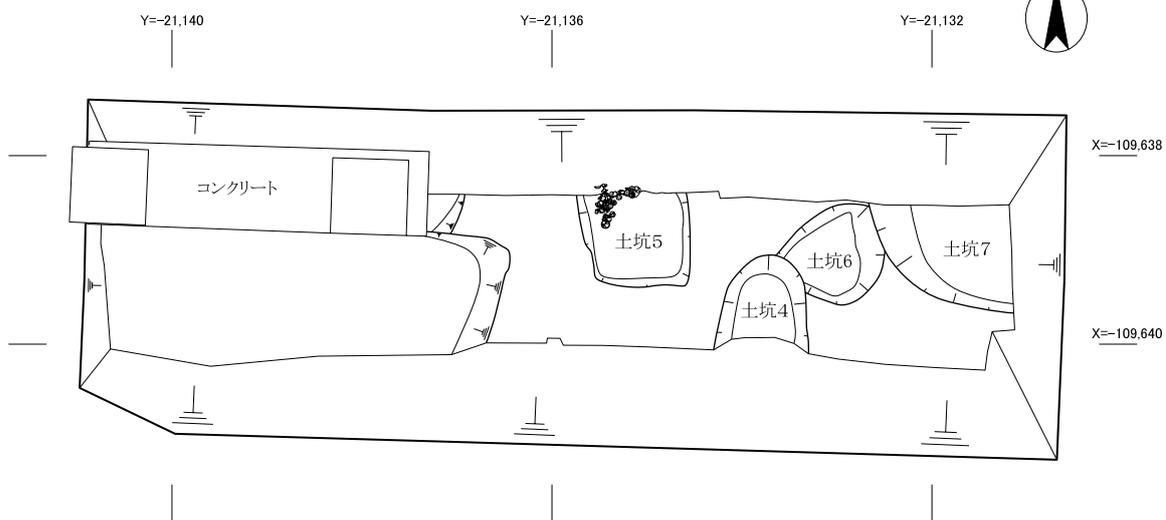


2区第3～1面遺構平面図 (1 : 100)

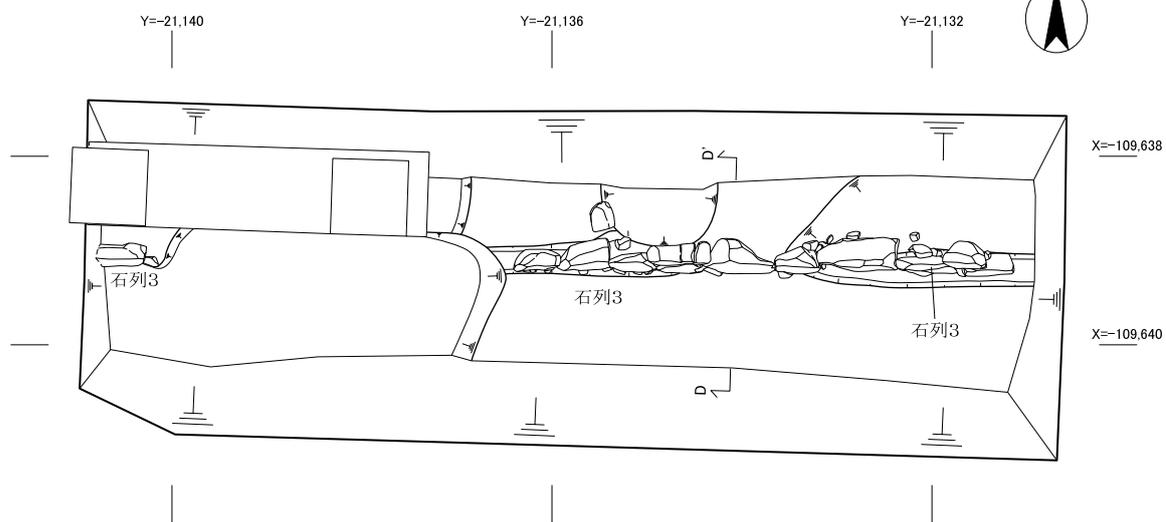


2区北壁・西壁・セクション断面図(1:80)

第2面

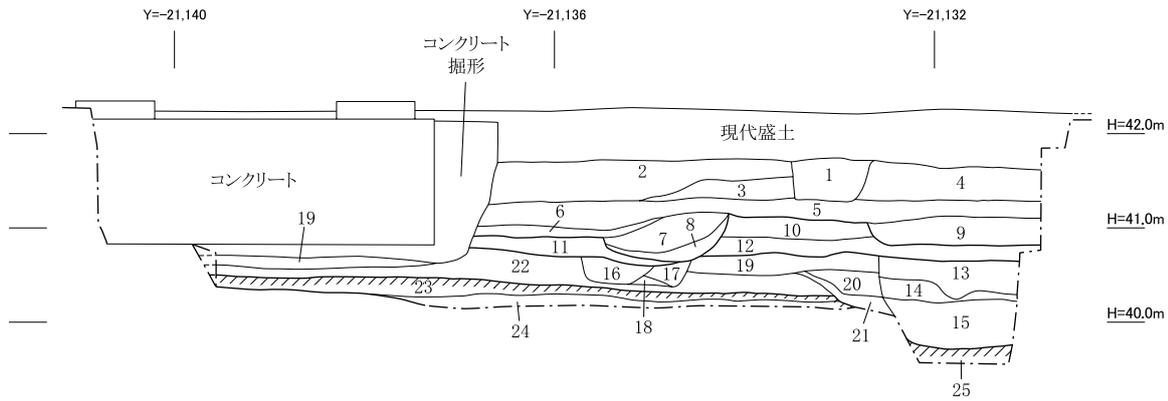


第1面



3区第2・1面遺構平面図 (1 : 80)

北壁



<近代盛土>

- 1 7.5R5/2灰赤色泥砂 φ1~10cmの礫・焼土・瓦片含む
- 2 7.5YR4/2灰褐色泥砂 φ1~5cmの礫・焼土少量含む
- 3 10YR4/2灰黄褐色泥砂 φ3~5cmの礫少量含む
- 4 7.5R4/3にぶい赤褐色泥砂 焼土多量 焼瓦含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 炭・焼土少量含む
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 7 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 焼土・焼瓦・漆喰多量含む (攪乱1)
- 8 10YR5/2灰黄褐色泥砂 漆喰少量含む
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 漆喰・炭少量含む (攪乱2)

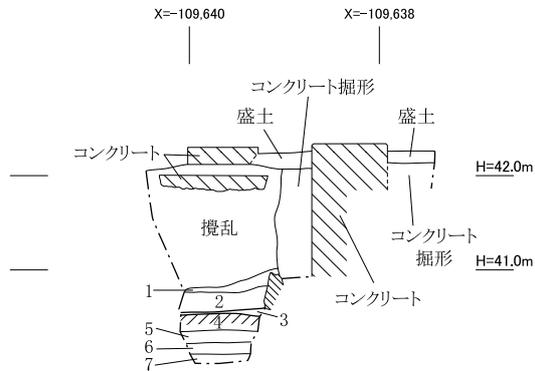
<第1面>

- 10 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 土器細片含む
- 11 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 焼瓦・漆喰破片含む
- 12 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 φ8cm以下の礫・瓦片・炭・漆喰少量含む

<第2面>

- 13 10YR4/2灰黄褐色泥砂 木の根多量含む
- 14 10YR5/2灰黄褐色泥砂 砂・炭多量含む (土坑7)
- 15 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 炭少量含む
- 16 10YR5/1褐灰色泥砂 炭・土師器皿多量含む (土坑5)
- 17 10YR5/1褐灰色泥砂
- 18 10YR5/1褐灰色微砂
- 19 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭微量含む
- 20 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂
- 21 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 やや粘質
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 φ1~3cmの礫少量含む
<河川氾濫堆積層>
- 23 2.5Y4/3オリーブ褐色微砂 φ2cm以下の礫微量含む
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
- 25 10YR2/1黒色砂礫 φ3cm以下

西壁



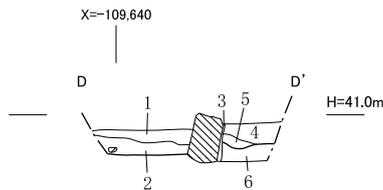
<近代盛土>

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 φ2cm以下の礫・炭微量含む
- 2 10YR3/2暗褐色砂泥(均質) 炭微量含む

<第1面>

- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色微砂
- <河川氾濫堆積層>
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色微砂 φ2cm以下の礫微量含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 φ3cm以下の礫微量含む

セクション

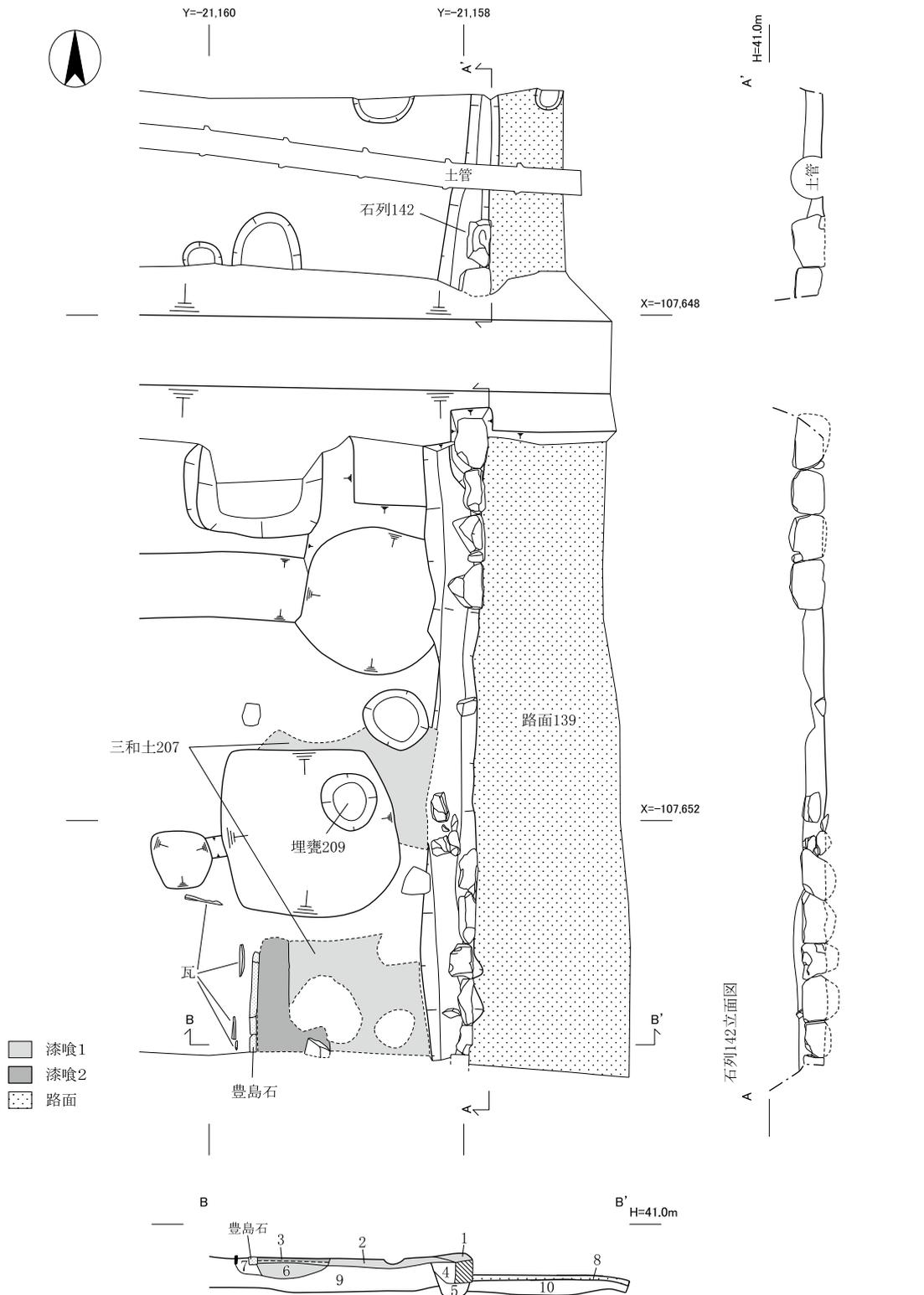


※ D-D'の位置は図版13参照

- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂(細砂質) 均質
- 2 10YR3/2暗褐色砂泥(やや粘質) 均質 炭微量含む
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(石列3掘形)
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 φ8cm以下の礫・瓦片・炭・漆喰少量含む
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 φ8cm以下の礫少量含む 土師片・炭微量含む
- 6 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭微量含む



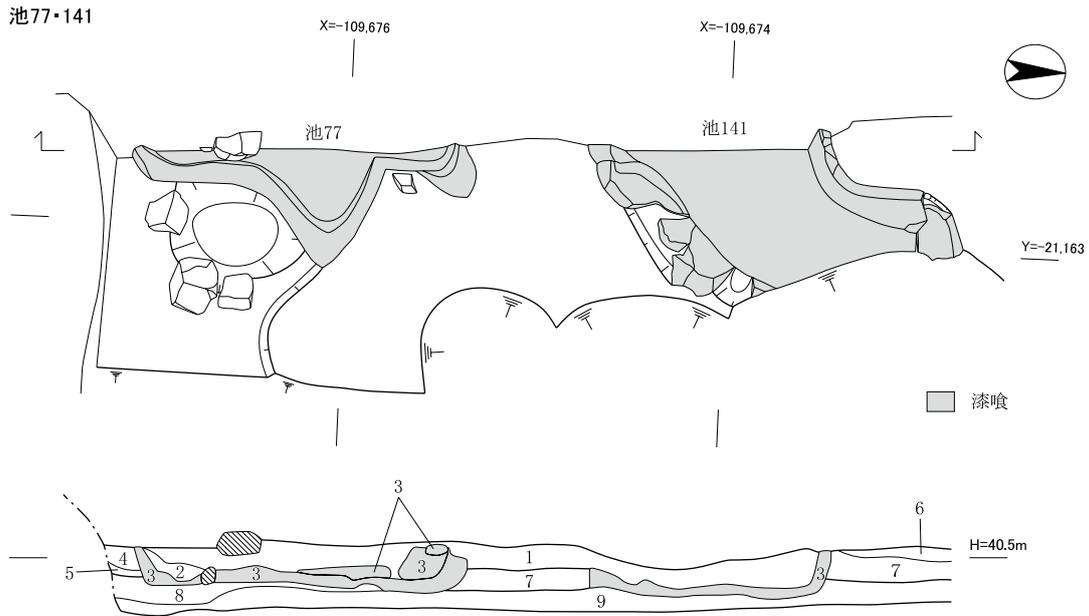
3区北壁・西壁・セクション断面図(1:80)



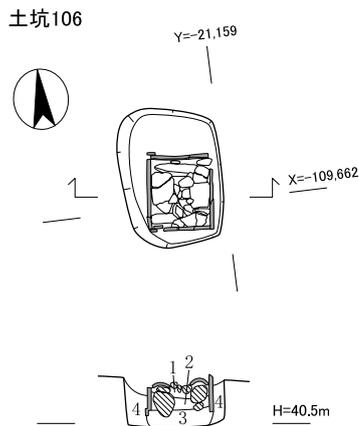
- 1 2.5Y5/6黄褐色漆喰1
- 2 10YR5/8黄褐色漆喰1 (三和土207)
- 3 2.5Y8/1灰白色漆喰2 下層に10YR5/8黄褐色漆喰
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥 φ 3cm以下の礫中量 10YR5/8黄褐色漆喰多量含む (石列142掘形)
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥 φ 4cm以下の礫・炭・瓦片・土師片少量含む
- 6 10YR3/3暗褐色砂泥 φ 3cmの礫少量 漆喰中量含む
- 7 10YR3/3~3/4暗褐色砂泥 φ 4cmの礫・瓦少量含む
- 8 10YR3/2~3/3黒褐色砂泥 φ 4cm以下の礫中量 焼土・漆喰片・炭微量含む(路面139)
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ 4cm以下の礫・炭少量含む
- 10 10YR4/3~4/4褐色砂泥 φ 3cm以下の礫少量含む(路面303)



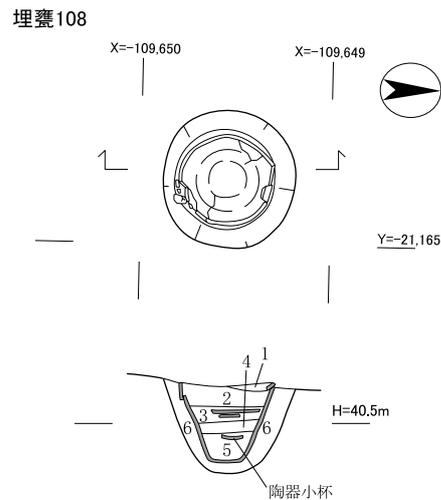
1区石列142・路面139・三和土207・土坑209実測図 (1 : 50)



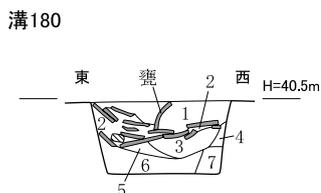
- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ5cm以下の礫・瓦片・漆喰少量含む | 6 10YR3/2黒褐色砂泥 φ8cm以下の礫・土師片・瓦片・炭少量含む |
| 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ5cm以下の礫少量 瓦片・漆喰多量含む | 7 10YR4/3にぶい黄褐色シルト φ6cm以下の礫少量含む |
| 3 2.5Y6/8明黄褐色漆喰 | 8 10YR4/2灰黄褐色シルト φ4cm以下の礫・土師片・瓦片・炭少量含む |
| 4 10YR4/2灰黄褐色シルト φ4cm以下の礫少量含む | 9 7.5YR4/4褐色シルト φ4cm以下の礫・炭少量含む |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘土含む | |



- 1 7.5YR3/1~3/2黒褐色砂泥 φ10cm以下の礫多量含む
- 2 7.5YR3/2~10YR3/2黒褐色砂泥 φ15cm以下の礫少量含む
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥(やや砂質) φ5cm以下の礫少量含む
- 4 10YR4/3~4/4褐色砂泥 φ3cmの礫少量含む



- 1 7.5YR4/3褐色泥砂 φ5cmの粘土塊・焼土片・漆喰片少量含む
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥 焼土少量 炭微量含む
- 3 7.5YR3/3暗褐色泥砂 瓦片多量 炭少量 焼土微量含む
- 4 7.5YR1.7/1黒色炭
- 5 10YR5/4~5/6黄褐色泥砂
- 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 φ7cm以下の礫中量 漆喰片・土師片少量 炭微量含む(掘形)



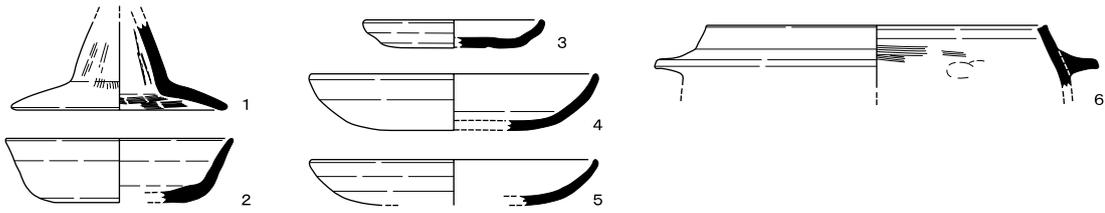
- 1 10YR3/2~3/3暗褐色泥砂 φ4cm以下の礫中量含む
- 2 10YR3/2黒褐色泥砂 φ5cmの礫・焼締陶器片少量 瓦多量含む
- 3 2.5Y7/6明黄褐色漆喰塊
- 4 10YR3/3~4/3暗褐色砂泥 φ4cmの礫含む
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色粘土
- 6 10YR4/2~4/3にぶい黄褐色泥砂 φ6cm以下の礫少量含む
- 7 10YR3/3暗褐色泥砂

※ 断面の位置は図版4参照

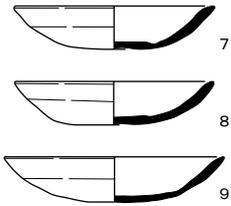


1 区池77・141、土坑106、埋甕108実測図、溝180断面図 (1:40)

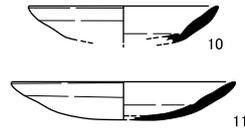
1区
落込み396



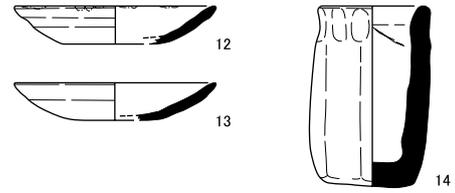
柱穴286



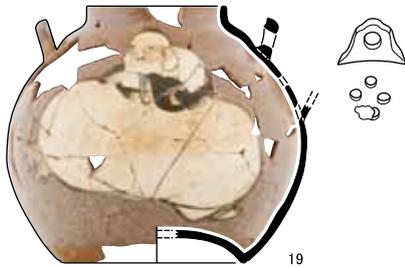
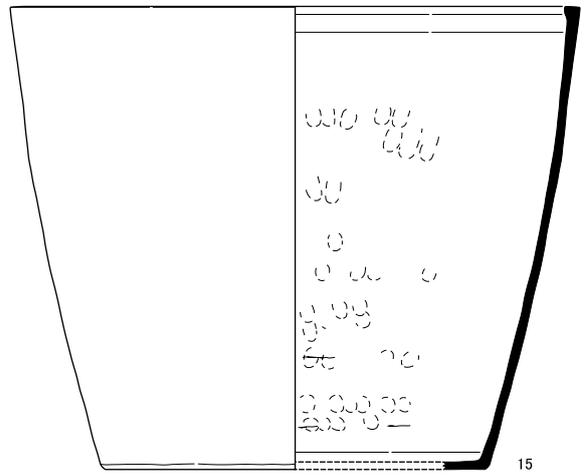
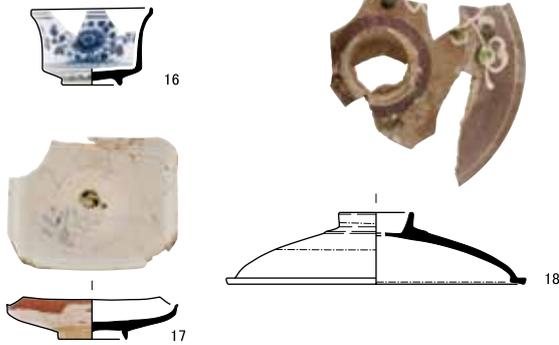
土坑283



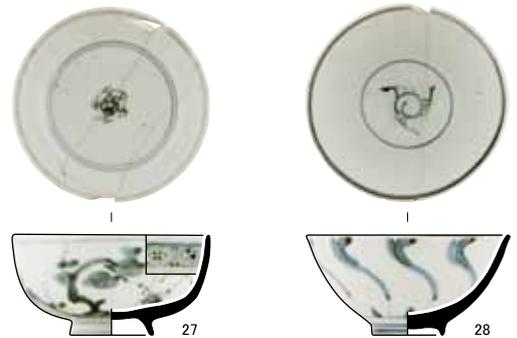
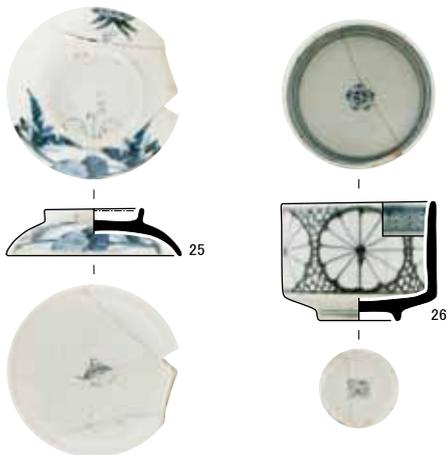
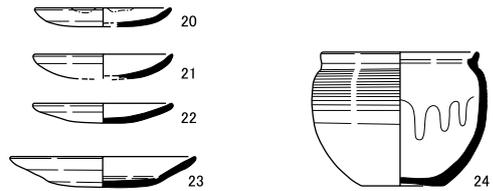
土坑305



溝180

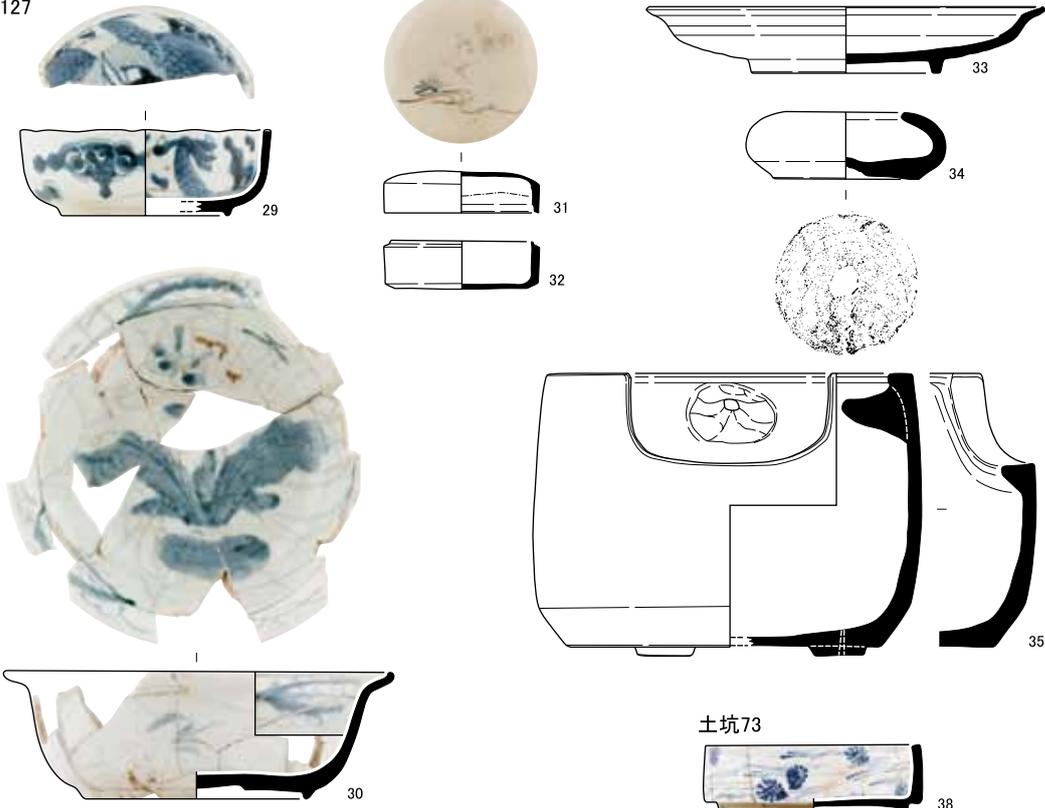


土坑127

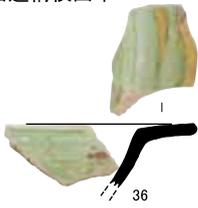


土器実測図1 (1:4、15のみ1:8)

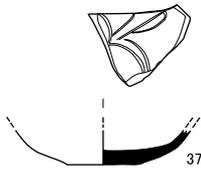
1区
土坑127



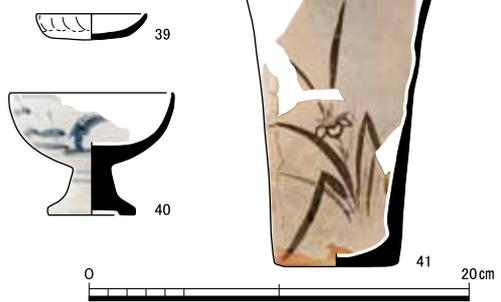
第3面遺構検出中



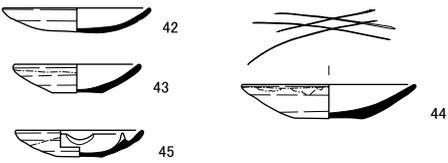
石列142



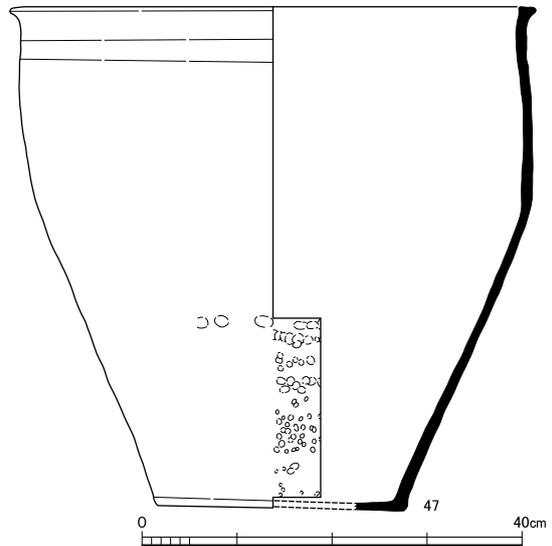
土坑109



埋甕108



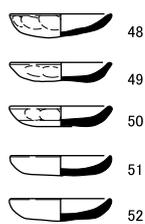
埋甕209



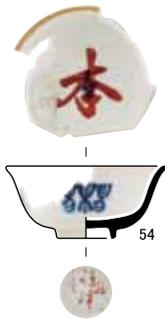
土器実測図2 (1 : 4、46・47のみ1 : 8)

1区

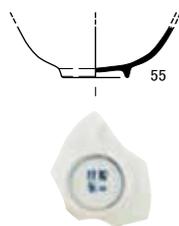
土坑175



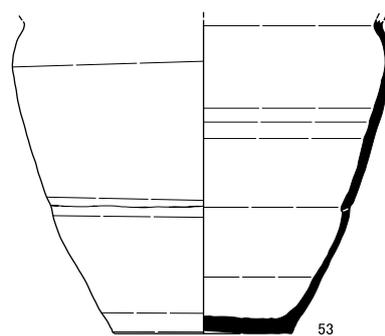
第1面遺構検出中



柱穴26

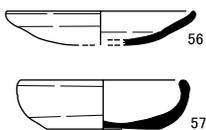


埋甕80

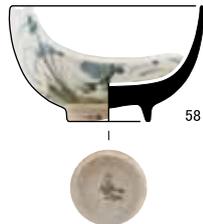


2区

土坑15



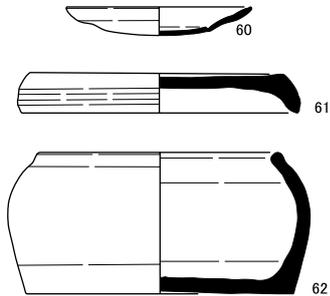
墓坑12



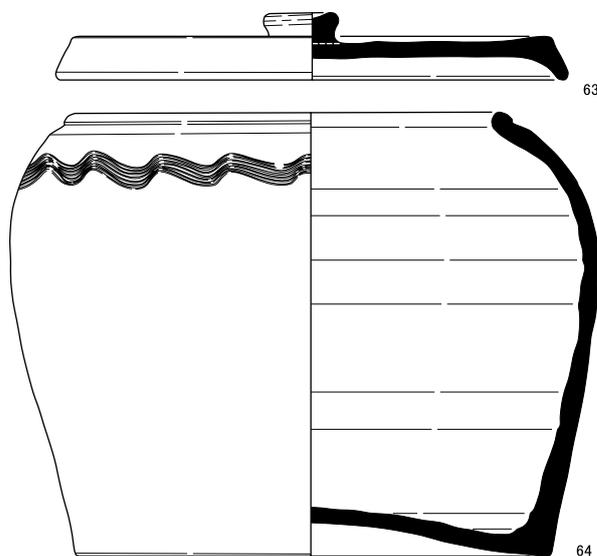
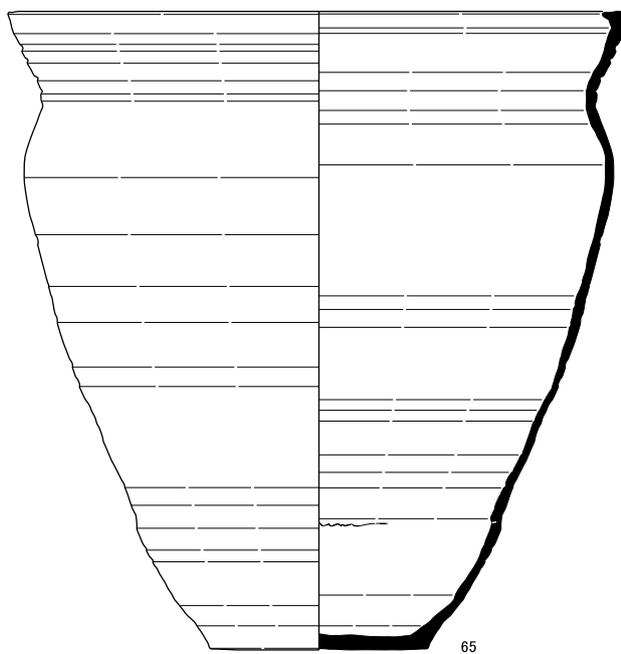
墓坑13



土坑11



土坑7



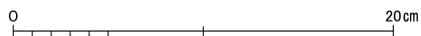
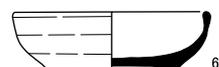
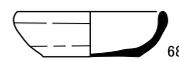
石列6



土坑5



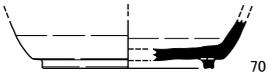
第2面遺構検出中



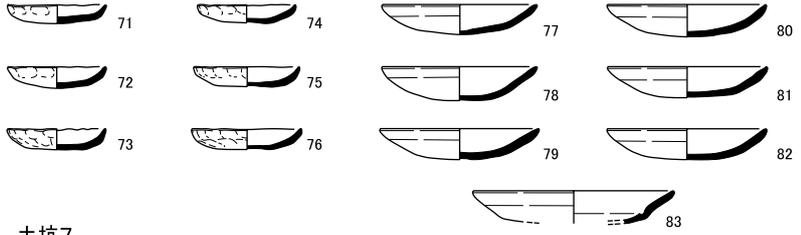
土器実測図3 (1:4、53・65のみ1:8)

3区

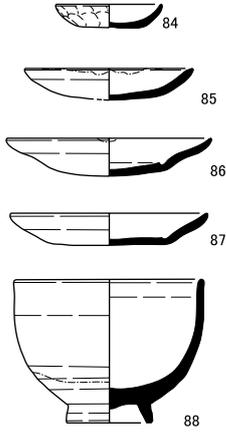
第VI層



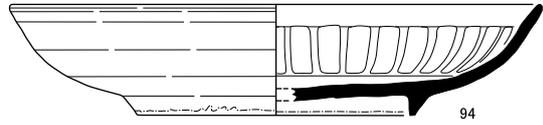
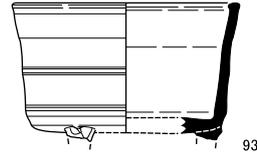
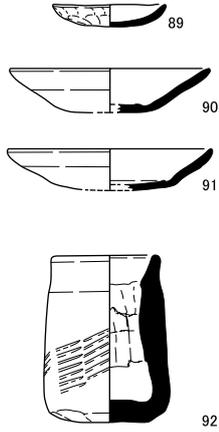
土坑5



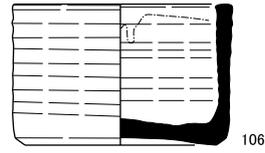
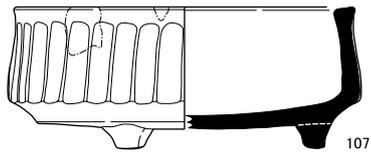
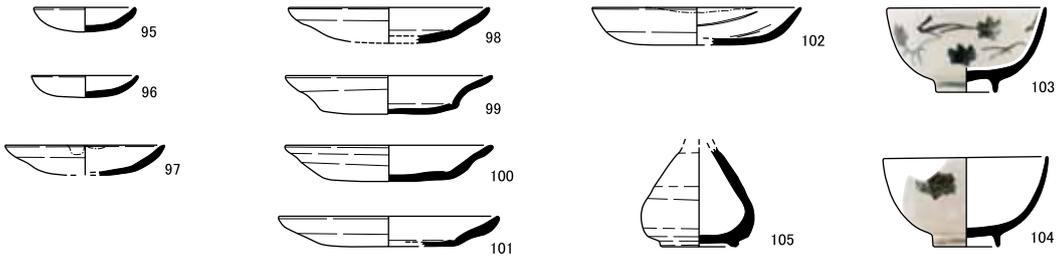
土坑6



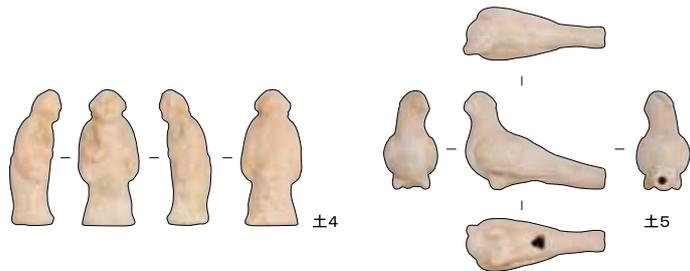
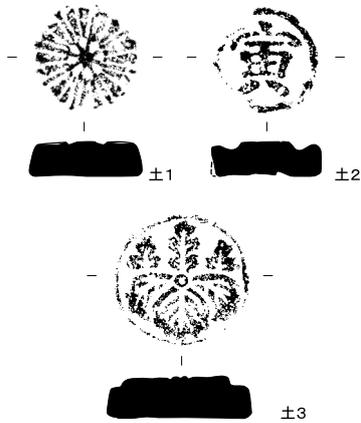
土坑7



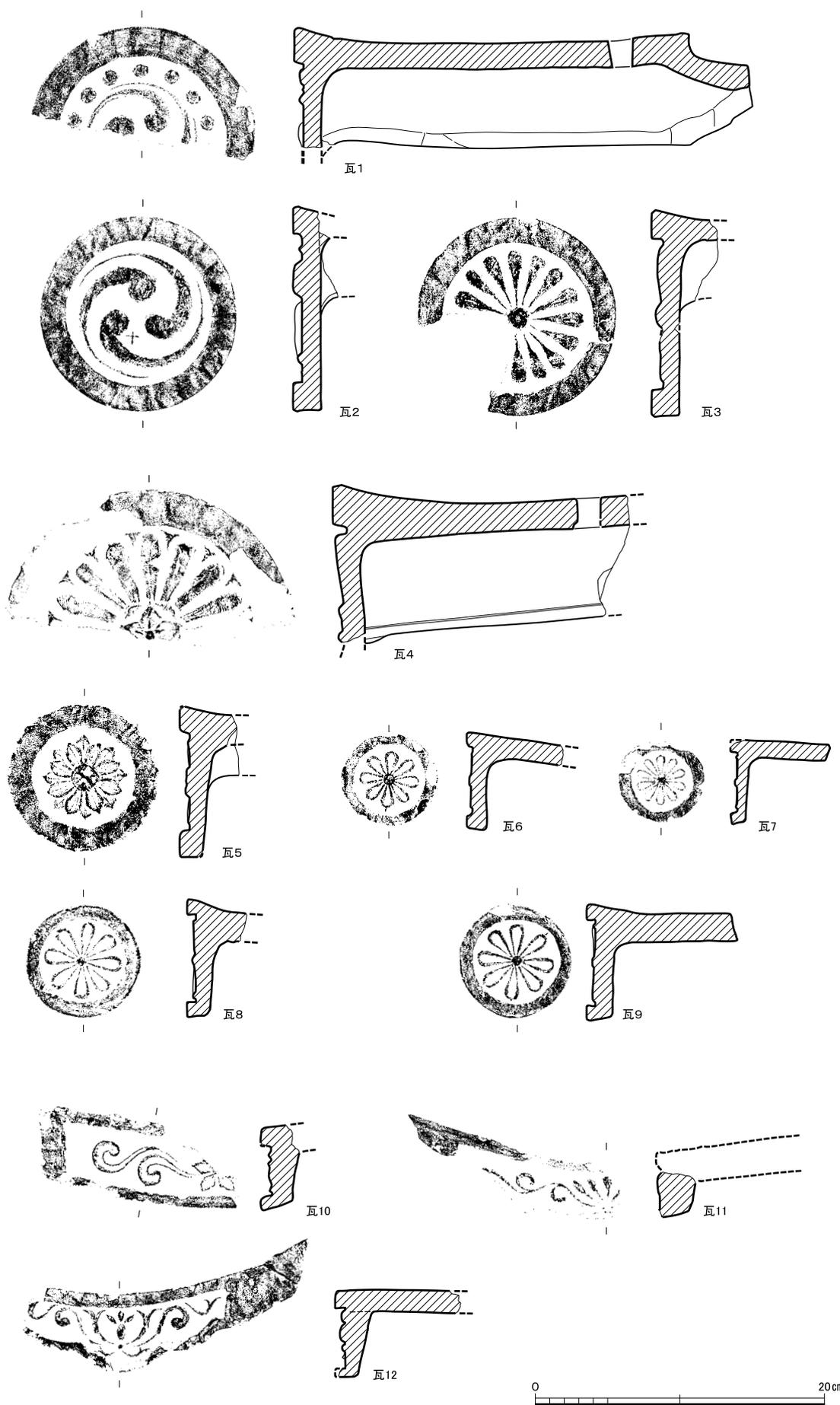
石列3



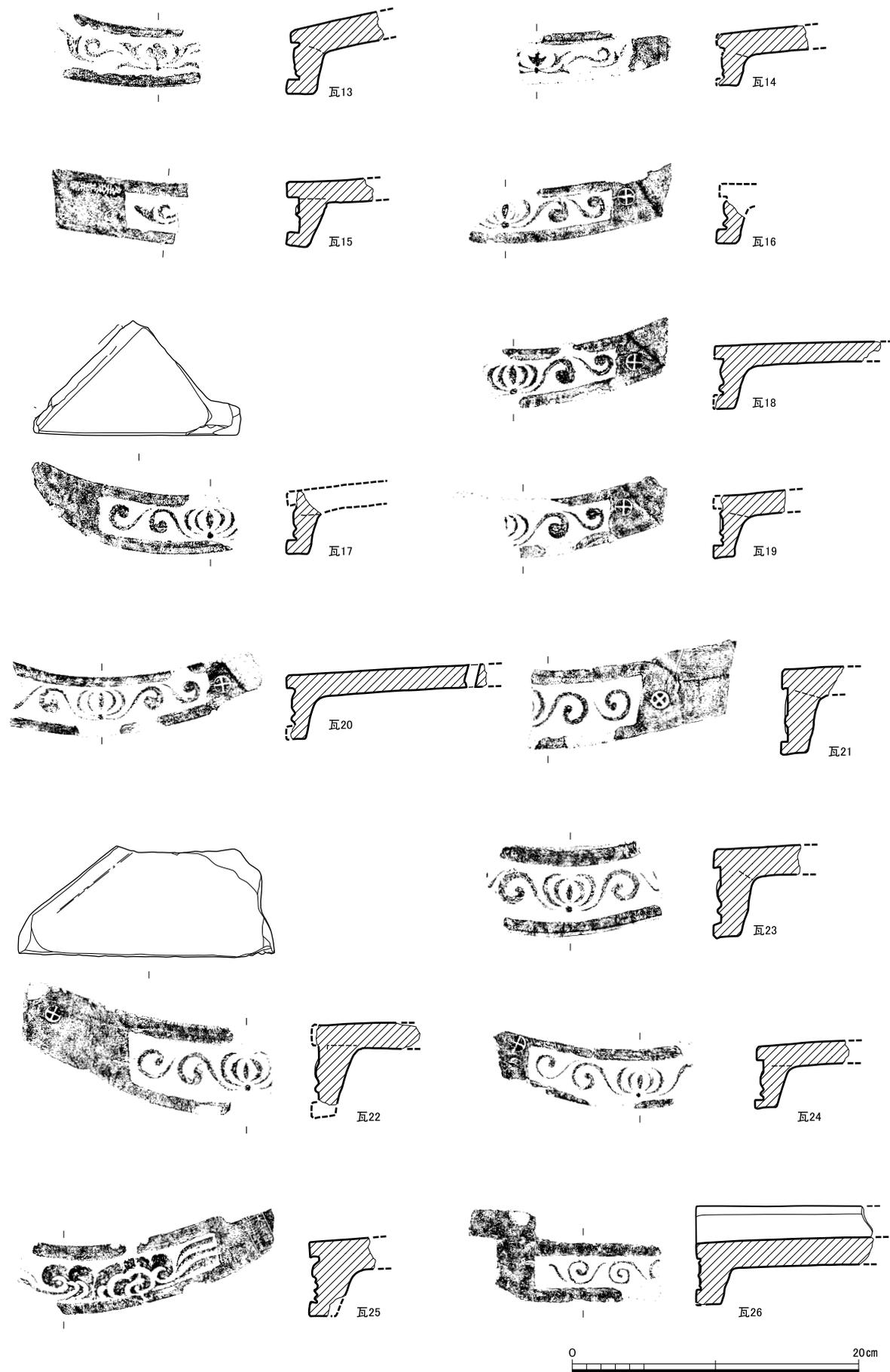
土製品



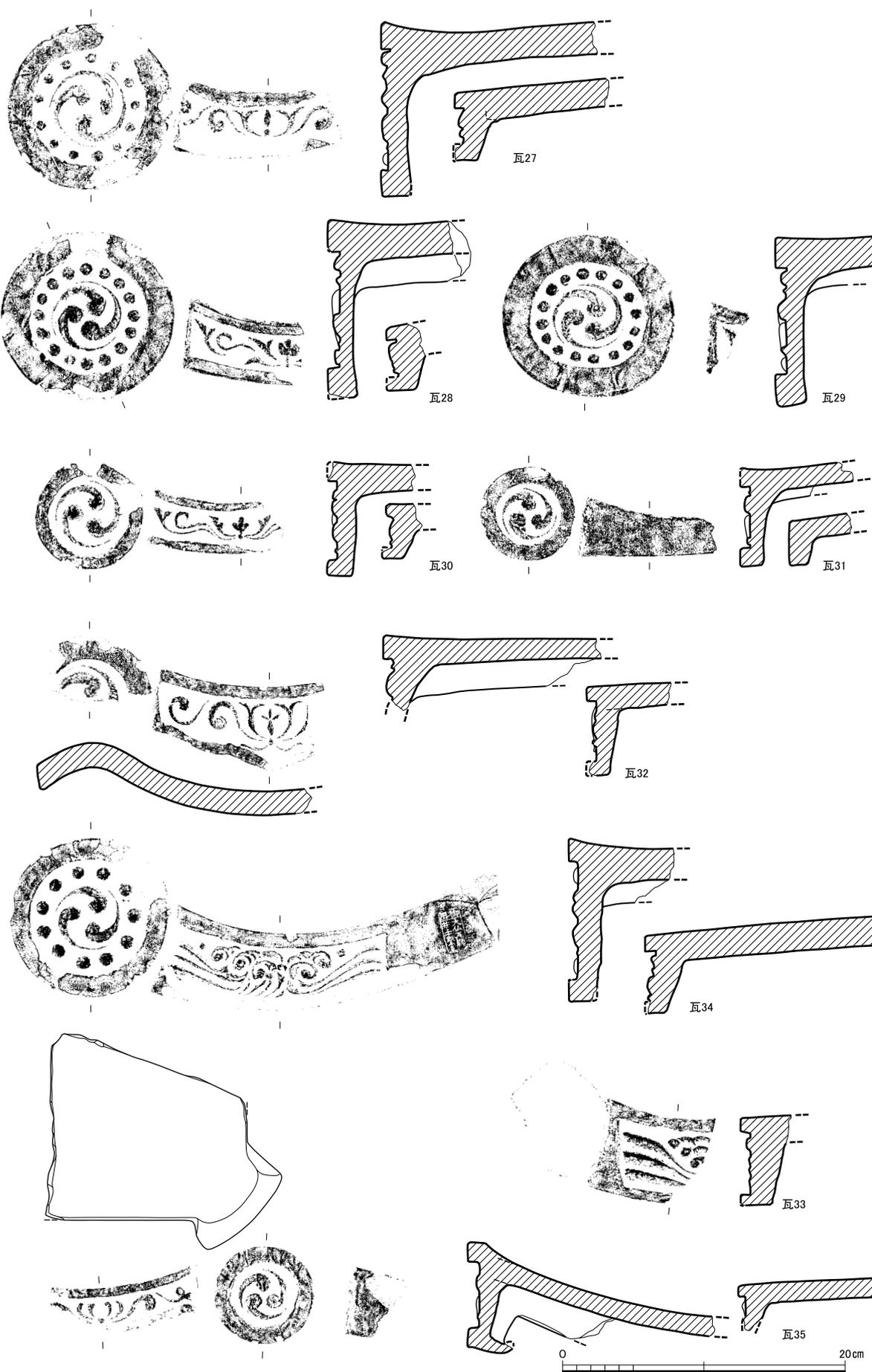
土器実測図4、土製品実測図（1：4、土1～3のみ1：2）



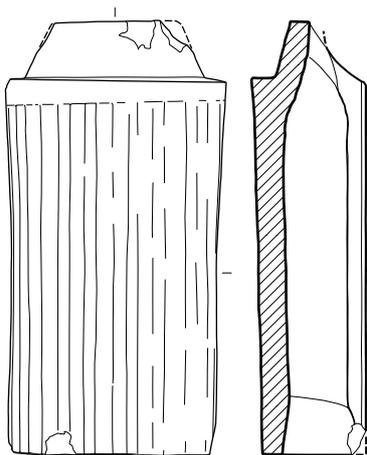
瓦拓影及び実測図1 (1 : 4)



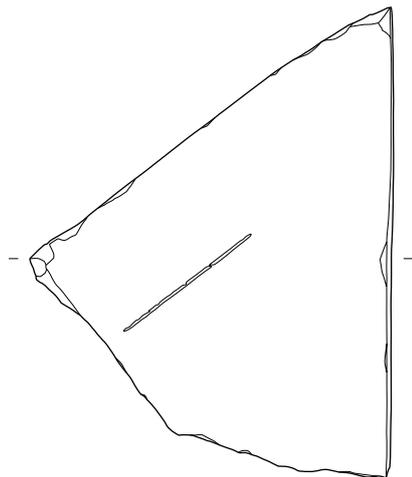
瓦拓影及び実測図 2 (1 : 4)



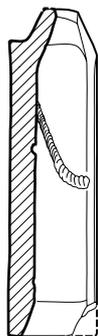
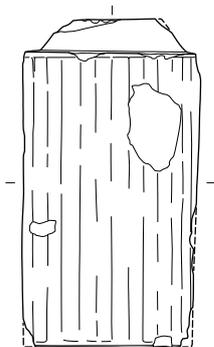
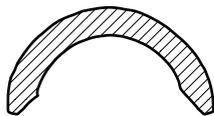
瓦拓影及び実測図3 (1 : 4)



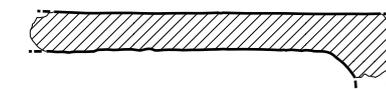
瓦36



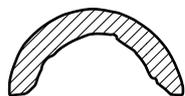
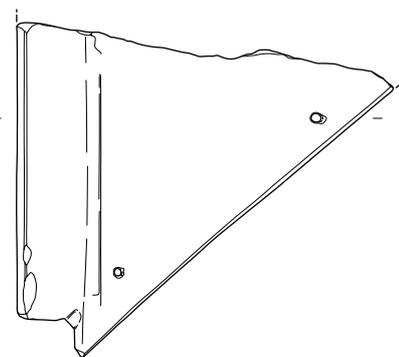
瓦38



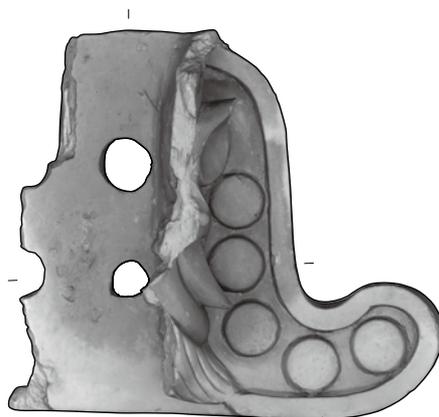
瓦37



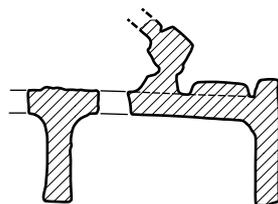
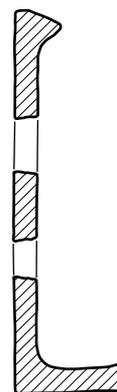
瓦39

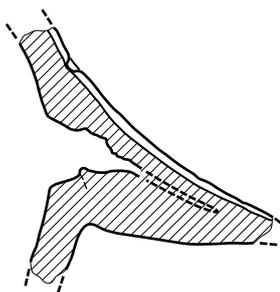
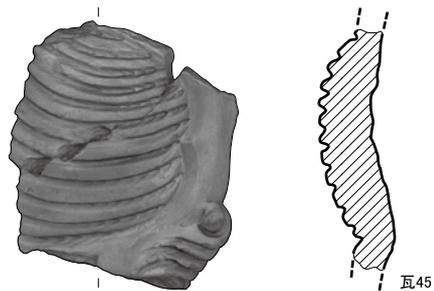
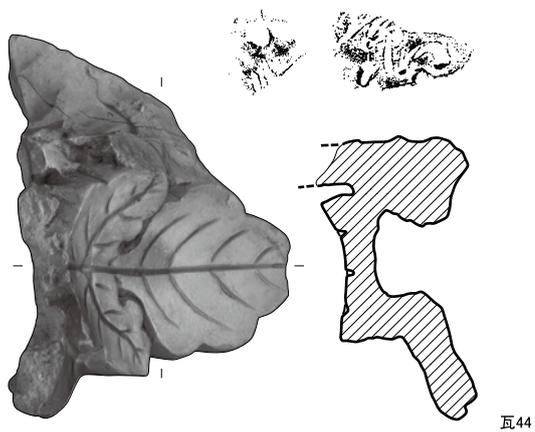
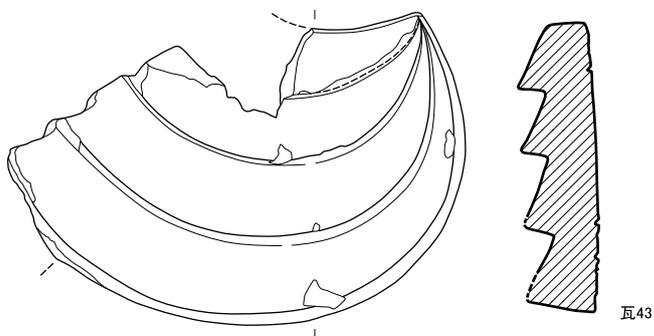
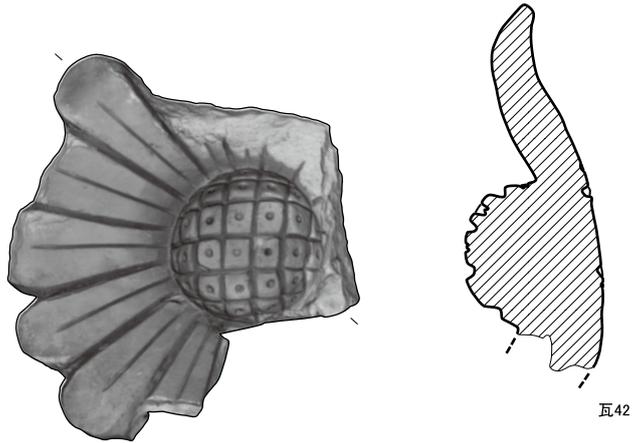


瓦40

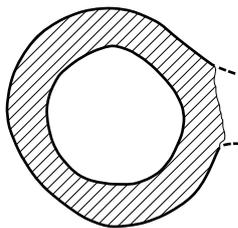
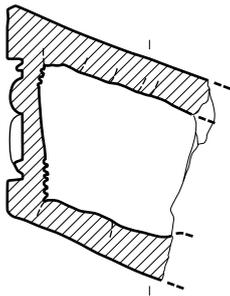


瓦41

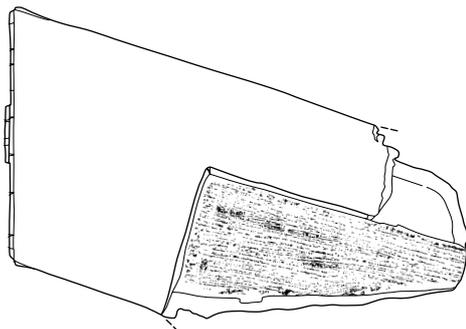
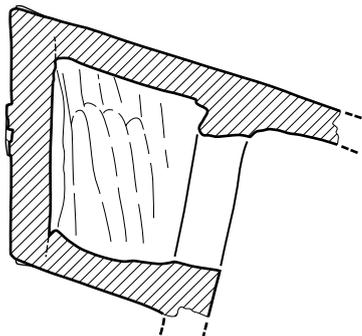
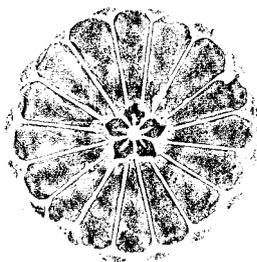




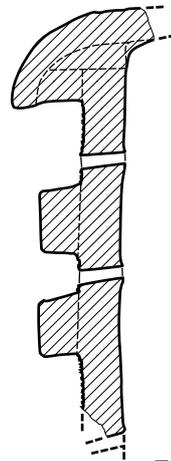
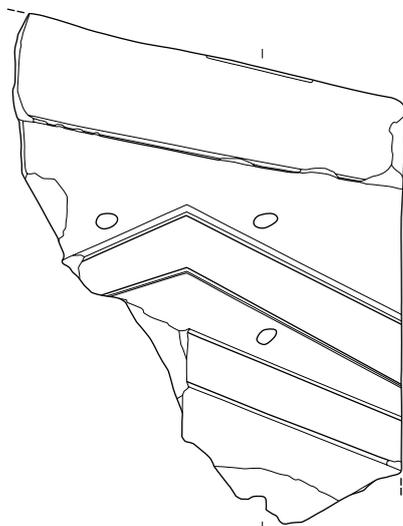
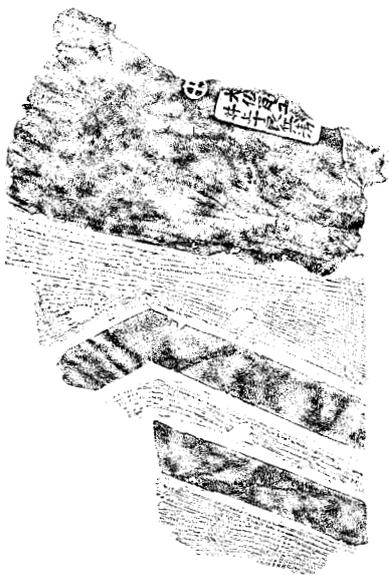
瓦拓影及び実測図5 (1 : 4)



瓦46



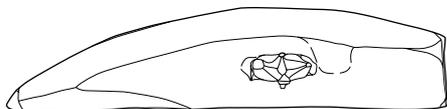
瓦47



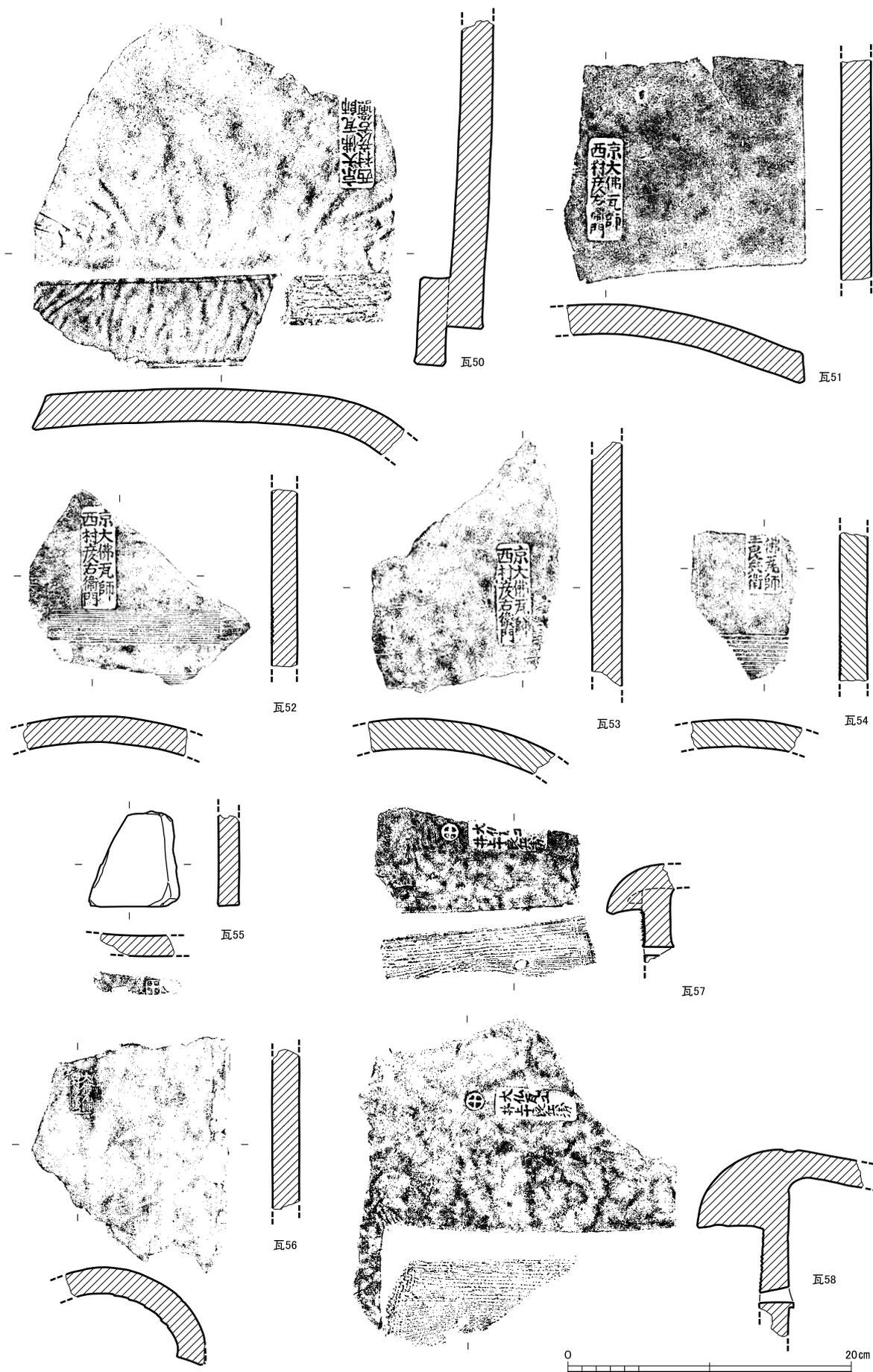
瓦48



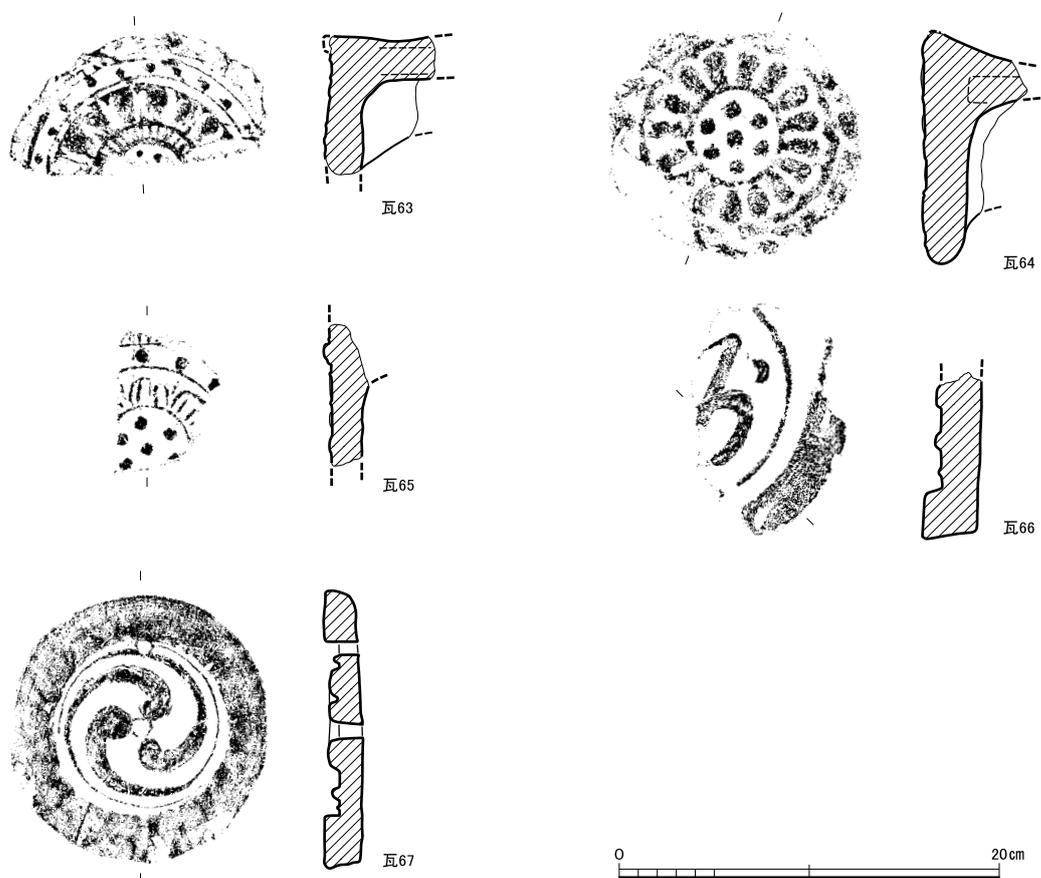
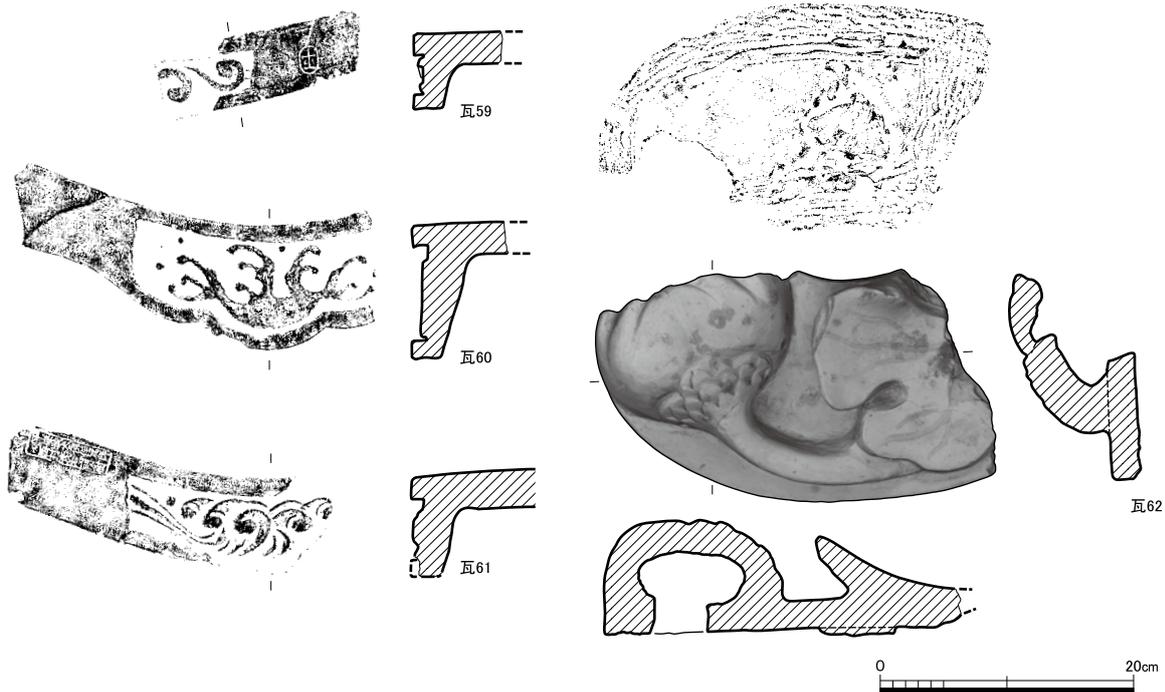
瓦49



瓦拓影及び実測図6 (1 : 4)



瓦拓影及び実測図7 (1 : 4)



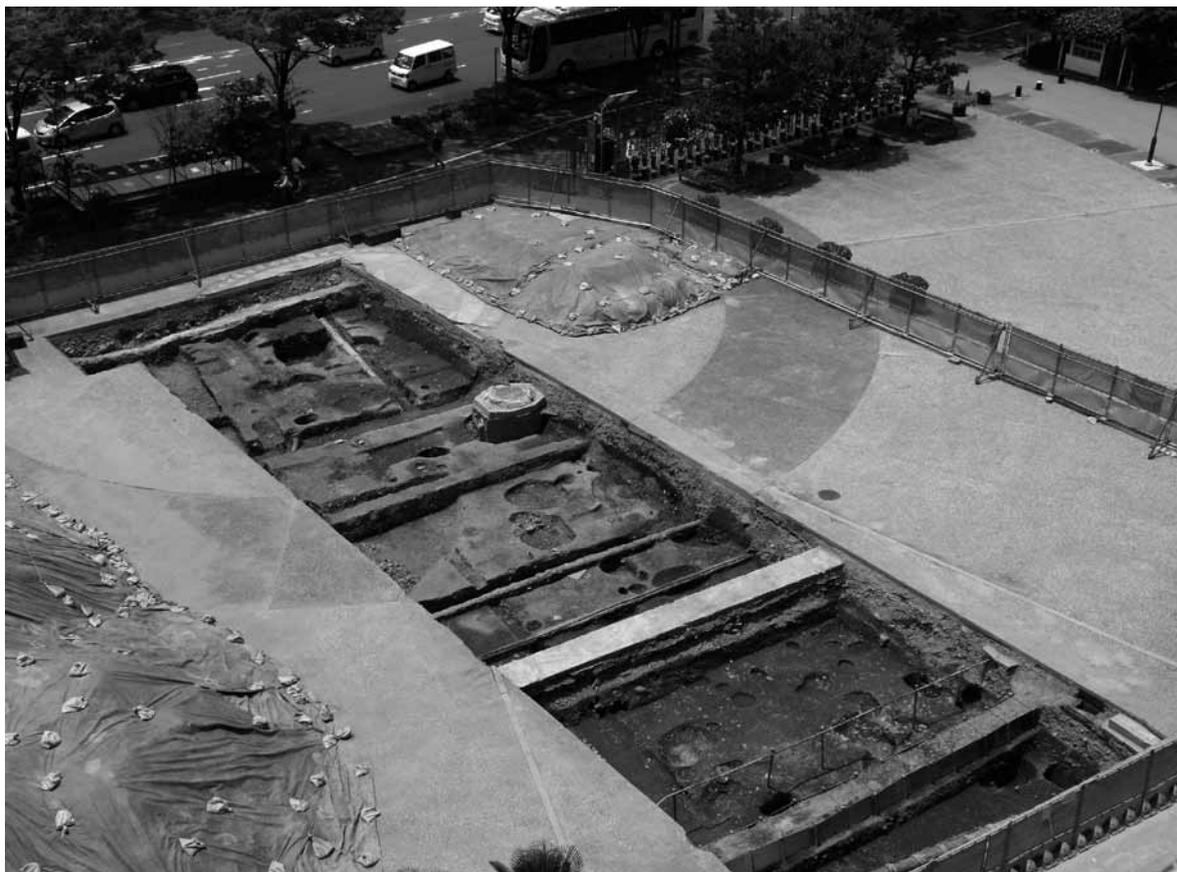
瓦拓影及び実測図8 (1:4、瓦62のみ1:6)



1 1区第6面全景（北東から）



2 1区第5面全景（北東から）



1 1区第4面全景（北東から）



2 1区第3面全景（北東から）



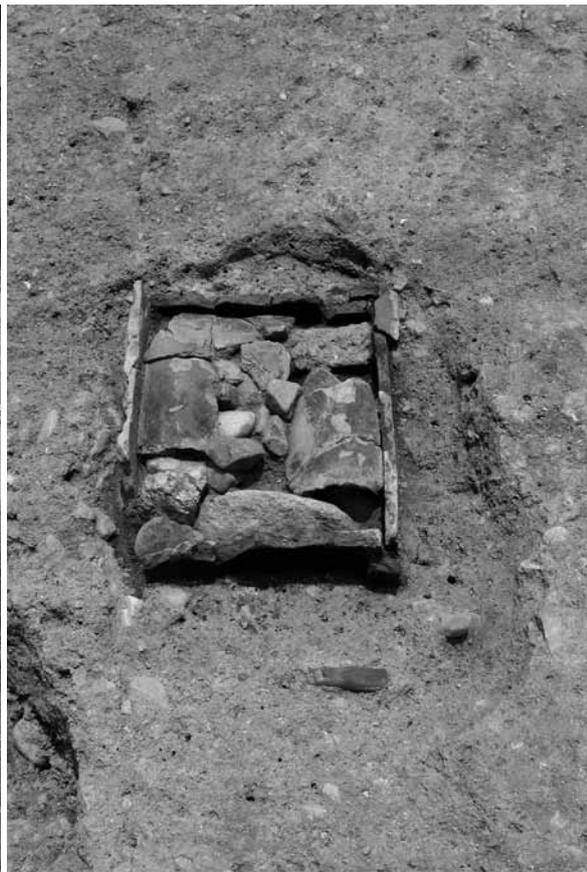
1 1区第2面全景（北東から）



2 1区第1面全景（北東から）



1 1区塀245 (南から)



2 1区土坑106 (北から)



3 1区池77・141 (北から)



4 1区建物1 (柱穴26・28) (南東から)



1 2区第3面全景（南東から）



2 2区第2面全景（南東から）



3 2区第1面全景（南西から）



1 2区墓坑9・10 (北から)



2 3区第2面中央部 (南東から)



3 3区第1面全景 (南東から)



19



32

31



35



41



61

62

64

60

63



瓦類

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらまちきゅういき (ほんのうじあと)							
書名	寺町旧域 (本能寺跡)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-10							
編著者名	モンペティ恭代							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらまちきゅういき 寺町旧域	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 てらまちどおりおいけあが 寺町通御池上る かみほんのうじまえちよう 上本能寺前町 488番地	26100	170	35度 00分 41秒	135度 46分 05秒	2017年4月 20日～2017 年8月31日	455㎡	庁舎整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
寺町旧域	寺院跡	安土桃山時代	土坑、塀、路面、 柱穴列、集石、墓 坑	瓦類 土師器、土師質土器、 瓦質土器、磁器、施釉 陶器、焼締陶器、輸入 陶磁器、瓦類、土製品、 石製品、銭貨、鉄滓、 人骨、獣骨	安土桃山時代に旧 地から移転してきた 本能寺の旧境内 北部における変遷 が明らかとなった。 歴代京都市庁舎に 関連する遺構が見 つかった。			
		江戸時代前期	土坑、石列、路面、 墓坑					
		江戸時代中期	土坑、石列、路面、 三和土、埋甕、池、 瓦溜り、溝					
		江戸時代後期	土坑、路面、埋甕					
		幕末～近代	土坑、溝、井戸、 漆喰槽、会所、建 物、煉瓦基礎	磁器、施釉陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-10

寺町旧域（本能寺跡）

発行日 2018年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961